ストライク・ザ・ブラッド 3
天使炎上

南宮那月の助手として、絃神市上空に出現する怪物〝仮面憑き〟の捕獲に協力することになった古城と雪菜。しかし古城の眷獣でも倒せない〝仮面憑き〟を相手に思わぬ苦戦を強いられる。そんな彼らの窮地を救ったのは、暁凪沙の友人だという銀髪の少女、叶瀬夏音だった。

そして失踪した夏音を追う古城と雪菜は巨大企業メイガスクラフトに騙されて、二人きりで無人島に置き去りに――！

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第三弾！

み-3-33
ストライク・ザ・ブラッド3
天使炎上
三雲岳斗
電撃文庫
¥570

み-3-33

ストライク・ザ・ブラッド3
天使炎上

三雲岳斗

電撃文庫
㊀
570

9784048862745

1920193005707

ISBN978-4-04-886274-5
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 570 円
※消費税が別に加算されます

三雲岳斗（みくもがくと）

大分県出身。主に小説などを書いている人。執筆に行き詰まると気分転換でよく海を見に行くのですが、たまに自殺志願者と間違えられて見知らぬおっちゃんに声をかけられたりとか。人の情けが身にしみます。

【電撃文庫作品】

コールド・ゲヘナ①～④
コールド・ゲヘナ あんぷらぐど
レベリオン 全5巻
i.d. Ⅰ～Ⅲ
道士さまといっしょ
道士さまにおねがい
アスラクライン①～⑭
ストライク・ザ・ブラッド 1～3
サイハテの聖衣（シュラウド）

イラスト：マニャ子（こ）

佐賀県出身の神奈川県在住。フリーでイラストレーターやってます。最近は開封すらしていないゲームソフトを横目に絵を描いています。趣味はゲームと昼寝です。

カバー／加藤製版印刷

ストライク・ザ・ブラッド 3

天使炎上

STRIKE THE BLOOD

三雲岳斗

illustration マニャ子

暁古城［あかつき・こじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

姫柊雪菜［ひめらぎゆきな］
『剣巫』Swords - Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

ラ・フォリア・リハヴァイン
『王女』Princess of Aldeigia
聡明怜悧な白銀の姫御子

吐瀬夏音「かなせかのん」
『模造天使』Faux-Ange
心優しき中等部の聖女

絶叫必死女神

『舞破姫』Shamanic War Dance

破裂に舞う、爆弾の射手

『ばくだんのまい』

矢瀬基樹［やぜもとき］
『過適応者』Hyper - Adapter
陽気な級友、あるいは双貌の道化師
藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

Contents

序　章　Intro　11

第一章　友情と愛情と古城の事情　Delicate Relation　21

第二章　屋上の聖女　The Saint On The Roof　59

第三章　搭乗、のち窮状　The Island Of Exile　113

第四章　王女たちの戦場　Faux-Angel　185

第五章　天使炎上　The Amphisbaena　225

終　章　Outro　295

あとがき　310

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド

天使炎上 3

序章

PROLOGUE

少女は、光の中で目を覚ました。

純白の壁。眩い照明。塵一つない清潔な空気。

ベッドの上に横たわる彼女を、医療用の電子機器たちが、彫像のように無言で見おろしている。大理石の床に刻みこまれているのは、古代神聖文字による聖句の一節。

そこは特別な患者を隔離するための病室であり、同時に荘厳な聖堂でもあるのだった。

『――実験体ＸＤＡ－７、覚醒レベル上昇』

どこか遠い場所から、耳障りな声が聞こえてくる。体温の乏しい無機質な声だ。

その声から無意識に逃れようとして、少女がベッドの上で身体をよじった。

両腕に嵌められた鉛色の手枷が、かすかに軋んで硬い音を立てる。

『血圧、心拍数ともに増加。体温プラス〇・三。血中コルチゾール濃度急激に上昇中。手順二五四四に基づき、偽典六章一節から九章十一節までの詠唱を申請』

『――申請承認。詠唱を開始する』

苦悶する少女の頭上から、厳かな音楽が降りそそぐ。

無数の旋律が、追唱によって繰り返されていく多重追複曲。

神々しいパイプオルガンの伴奏に乗せて、機械音声が奏でる聖歌が響く。その歌声に呼応するように、床に刻まれた文字が輝きを増す。

室内を清澄な気配が満たしていき、少女はゆっくりと動きを止めた。

銀色の髪の少女である。年齢は、いまだ十代の半ばにも達していないだろう。
彼女が身につけているのは紺色の短い患者衣と、金属製の黒い仮面だけ。無数の眼球を象った不気味な仮面である。
少女の剝き出しの両手脚は、頼りないほどに細く白い。その白い肌の表面に、奇妙な刻印が浮かび上がっていた。電子回路を連想させる、緻密な魔術紋様だ。
降りそそぐ機械の歌声に合わせて、彼女の刻印が明滅を繰り返す。
『詠唱続行。並行して鎮痛鎮静剤投与、半睡暗示行程を継続』
魔導技師たちの冷ややかなやりとりを、少女は浅い眠りの中で聞いていた。
今はもう苦痛も哀しみも感じない。美しい光と音の洪水が、彼女を包みこんでいる。
少女の魔術紋様が生み出す神聖な波動は、やがて彼女自身の存在を変質させ、より高位なる霊的存在へと転移させるだろう。天に座す全能の神に近い、畏くも清浄なる存在へと。
今の少女は人ではなく、魔術によって祝福された神の御使いだ。
ならばなぜ、と少女は思う。
わたしの舌に残された、生々しい鮮血の味はなんなのだろう？

十

その船は、全身に炎をまといながら、高度一千メートルの夜空を航行していた
全長百七十メートル超。特殊合金の硬殻に覆われ、ターボプロップエンジン四発と十一門の機関砲を装備する、巨大な装甲飛行船である。
安定翼に描かれているのは、大剣を持つ戦乙女　北欧アルディギア王家の紋章だ。
紡錘形の船体は、氷河の煌めきにも似た白群青に染められ、黄金の装飾に縁取られている。
王族と、その従士団だけが搭乗を許された空飛ぶ城塞。
月光を浴びて闇の中に浮かぶその姿は、まさに天上の王宮と呼ぶに相応しい
だが、その美しい船体も今は、無数の傷を負った無残な姿をさらしていた
「ハァ……怠」
燃え上がる船上に立っているのは大柄な女。深紅のボディスーツで全身を覆って、右手には長槍を握っている。
彼女の瞳もまた、血に濡れたように艶めかしい深紅だった。
唇の隙間からのぞく純白の牙が、女の正体を雄弁に語っている。D種完全体　－吸血鬼だ。
「ったく、手間かけさせてくれちゃって。かったるいったらありゃしないわ……」

女は槍を引きずりながら、甲板の上を歩いて行く。
深紅の槍の穂先が船の装甲を削り、甲高い音と火花を散らす。
彼女がこの船の襲撃者。壮麗な船体を容赦なく破壊し、炎の渦に巻きこんだ張本人だ。
「……貴様……何者だ。誰に雇われた？」
彼女の前に立ちはだかったのは、強化鎧に身を包んだ騎士だった。黄金で縁取られた装甲戦闘服。その肩当てにも、アルディギアの紋章が刻まれている。
それは王家直属の近衛騎士、そしてこの飛行船の護衛団長の証である。
「この船を、我ら聖環騎士団が守護する〝ランヴァルド〟と知っての狼藉か！」
全身に手傷を負いながら、騎士は獰猛に女を睨みつけた。構えた剣が青白い光を放つ。
吸血鬼の女は気怠げに立ち止まり、目の前の騎士を蔑むように眺めた。
彼女の背後で、爆発が起きる。船体を浮上させている気嚢の一部が破壊されたのだ。貴重な浮力体の漏出とともに、巨大な装甲飛行船が、なすすべもなく傾いていく。
剝がれ落ちていく黄金の装飾を見送りながら、騎士は怒りに両腕を震わせた。
女は、波打つ長髪を鬱陶しげにかき上げる。
「だからァ、言ってるじゃないのよ。あんたたちが後生大事に匿ってる腐れビッチの小娘をさっさと引き渡しなって。そしたら、こっちもあんたたちを楽ウに殺してあげるからっ――！」
その言葉が終わる前に、彼女の腕が大気を裂くように轟然と唸った。深紅の長槍が、爆発的

な魔力の波動をまとって騎士を襲う。

「思い上がるなよ、吸血鬼風情が！」

騎士はその一撃を、正面からまともに受け止めた。

凄まじい魔力の余波を撒き散らし、深紅の槍が弾かれる。彼女は、特に驚きもせずにそれを眺めて、あーあ、と気の抜けたような息を吐いた。

「はァン……それがアルディギアのヴェルンド・システムってヤツ？　たしかに厄介だわね奏えるわァ」

「薄汚い野良犬が、この船を墜とせるとでも思ったか。これ以上、貴様らの好きにはさせんぞ、魔族！」

騎士が、青白く輝く剣先を女に向けた。

ヴェルンド・システムとは、アルディギア王国が開発した最新鋭の騎士装備。母艦の精霊炉から送りこまれた大量の霊力で、武器の霊格を一時的に聖剣クラスにまで引き上げるという強力な戦術支援兵器である。これによってアルディギア聖環騎士団は数多の戦功を上げ、魔族の天敵とまで呼ばれるようになったのだ。

しかしその疑似聖剣の輝きを前にしても、女の表情に変化はない。だらりと槍を提げたまま、嘲るような視線を手負いの騎士に向けている。

そのとき彼女のすぐ背後に、黒い影が現れた。漆黒の毛並みを持つ獣人だ。

「――待たせたな、ＢＢ」

獣人が、醒めた口調で女に呼びかける。彼の全身から漂ってくるのは血の臭い、飛行船の乗員たちを襲って浴びた返り血だ。鋭く尖った爪の先には、生々しい肉片がこびりついている。

「ハァイ、お帰り、アルディギアの雌豚はどこよ？」

振り返りもせずに女が訊いた。獣人は静かに首を振る。

「いない。艦橋も寝室ももぬけの殻だ。救命ポッドが一機なくなってる。逃げられたらしい」

「無駄足だったってわけ？　やーれやれ。これって報酬出るのかしらね。ま、いーけど」

女は気の抜けたような声を出す。退廃的な美貌から殺気が消え去るのと同時に、深紅の槍もまた彼女の手の中から消滅した。自分に剣を向けている騎士の存在など、眼中にない、と言わんばかりの傲慢な態度だ。

「愚弄するか、貴様ァ　　！」

疑似聖剣を大上段に振り上げて、騎士が吼えた。

女は、うんざりしたようにそれを見返し、嘲笑する。

「ヴェルンド・システム……たいした威力なのは認めるわよ。並の魔族なら、その光に近づくことも出来ないかもね」

怒声とともに放たれた騎士の攻撃を、吸血鬼の女は悠々と躱した。そして取り出した携帯電話型の装置を、慣れた手つきで操作する。装置の画面に浮かび上がったのは、「降臨」の文字。

その直後、彼女たちの頭上を光が満たした

「でも、残念だったわね……あんたの相手は魔族じゃない」

暗い夜空を引き裂くようにして、雲の裂け目からなにかが降りてくる。禍々しい輝きに包まれた、小柄な影。その背中には、赤い血管を浮き上がらせたいびつな翼が何枚も生えている。

「なんだ、こいつは……!?」

空中の影に向かって、騎士が剣を一閃した。

疑似聖剣の霊力が、閃光となって影を襲う。あらゆる魔物を退ける破魔の霊光。だが、その光の刃は、空中の影に触れた途端、ガラスのように砕け散って消滅した。

馬鹿な、と動揺する騎士を憐れむように、紅い服の女が笑った。

その間にも、空中の影は高度を下げ、傷ついた装甲飛行船へと近づいてくる。撒き散らされる魔力の波動が、暴風と化して船体を激しく揺さぶった。

騎士が再び斬撃を放つ。だが、何度繰り返しても結果は同じだった。

疑似聖剣の霊光は、空中の影に触れることができない。まるで人工の頼りない照明が、太陽の輝きにかき消されるように――

破魔の霊光を無効化し、消滅させる力。それはつまり目の前に浮かぶいびつな影が、邪悪な存在ではないことを示している。この禍々しい怪物は、精霊炉によって人工的に生み出された疑似聖剣よりも、遥かに神聖な存在なのだ。

「まさか……これは……」

今や怪物は飛行船の甲板上に降着し、その姿を完全に露わにしていた

剝き出しの細い四肢に浮かびあがる不気味な紋様。吐き気を催すような醜悪な翼。頭部を覆う奇怪な仮面。だがしかし、その存在が放つのは、あまりにも清澄で神々しい波動——

「天使……だ……と!?」

翼を持つ怪物が、澄んだ歌声とともに眩い閃光を放った。すべてを焼き払う浄化の光だ。

すでに紅い服の女と獣人は逃走している。それに気づく間もなく、騎士の意識は灼熱の光に呑みこまれた。美しかった装甲飛行船が爆発四散し、その残骸は、暗い夜の海へと墜ちていく。

友情と愛情と古城の事情
Delicate Relation

1

実際のところ、それが二人の初めての出会いだった、というわけではない。

しかし彼女　藍羽浅葱について暁古城が思い出す最初の記憶は、あの夜の病院の、薄暗い待合室の出来事だった。

その夜の浅葱は、たった一人でベンチに座って、膝の上に広げたノートＰＣをぼんやりと眺めていた。彩海学園の制服を着た、地味な黒髪の中学生だ。

時刻は午後九時を過ぎていた。外来の患者や見舞い客はもう残っていない。窓の外は暗く、院内は静かだ。非常灯の弱々しい光だけが、まだ少し幼い彼女を照らしている。

たまたまその場を通りかかった古城は、ふと立ち止まって、その横顔に目を留めた。

見覚えのある少女だったから、というのが理由の半分。

残りの半分は、彼女が泣いているように見えたからだった。

そんな古城の視線に気づいて、浅葱が不意に顔を上げた。

涙に濡れた強気な瞳が、思いがけず正面から睨みつけてくる。

そのことに古城は少し驚いた。教室にいるときの藍羽浅葱は、目立たない大人しそうな女子、という印象しかなかったからだ。

「あんた……うちの学校の新入りだっけ？」
意外に静かな口調で浅葱が訊いてきた。古城は短く溜息をつく
「せめて転校生と言ってくれ。転校してきたのだって、二カ月近く前なんだけどな」
「そうだっけ……べつにどうでもいいけどさ」
浅葱は投げやりに肩をすくめた　あとになって知ったことだが、彼女は幼稚園児のころから、この紘神島という小さな人工島で暮らしていたらしい。そんな浅葱から見れば、この島に来てまだ二カ月にもならない古城は、たしかに新入り以外の何者でもないだろう
「おまえ、眼鏡は？」
普段、教室で見かける彼女との違和感の原因に気づいて、古城は訊いた。古城の記憶では、浅葱はいつも野暮ったい地味な眼鏡をかけていたはずだ
しかし浅葱はあっさりと首を振り、
「あれは伊達　べつに視力悪くないし」
「そうだったのか。なんか――」
せっかく美人なのにもったいない、と言いかけて古城は言葉を呑みこむ　さすがに余計なお世話だと思い直したのだ　そんな古城を、浅葱は訝るように半眼で睨み、
「それより、なんであんたはこんな時間に病院にいるわけ？　突き指でもした？」
「……突き指くらいで、こんなでかい病院まで来ねーよ」

古城は顔をしかめて言い返す。いちおう古城がバスケ部員だということは、浅葱も知っていたらしい。赤く泣き腫らしたままの目で、彼女は少し意地悪く微笑み、

「じゃあ、なに？　選手生命が絶たれるような大怪我だったわけ？」

「やめろ。縁起でもねえ」

本気で嫌そうに唇を歪めて、古城は声を低くした。なるべく深刻になりすぎないように、事実だけを淡々と告げる。

「妹が入院してるんだよ。俺たちが、この島に来てからずっと」

「そう……そうなんだ……」

浅葱は表情を動かさなかった。ただその瞬間、彼女の声から、古城に対する警戒心や敵意が薄れたように思えたのは、たぶん気のせいではないと思う。

「なに突っ立ってるのさ？　座れば？」

膝に抱いていたノートPCを畳んで、浅葱は自分の隣のシートを指さした

「いや、だけど……」

「いいから。こんなところで、人で泣いてたら、あたしが惨めな人みたいじゃない」

「俺がいたってなんも役に立たねーぞ」

慰めの言葉なんかを期待されても困るんだが、と思いながら古城が言うと、浅葱はニヤリと笑ってみせた。文句なしの美人のくせに、やけにあけっぴろげで飾り気のない笑顔だ。

「いいのよ。誰かになんか言われたら、あんたに泣かされたことにするから」
「なんだそれ。俺の扱い、ひどすぎないか？」
「そのくらい我慢しなさいって。このあたしの泣き顔を見た罰よ」
彼女の理不尽な物言いに、古城は苦笑した。異性であることを意識させない、サバサバした態度が心地好かった。まるでつき合いの長い男友達と一緒にいるような気分になる
その夜、浅葱の母親が病死していたことを古城が知ったのは、それから数日後のことだった。
それは暁古城という少年が、世界最強の吸血鬼、第四真祖と呼ばれる前の記憶

2

――そういうことだから。
柔らかな唇の感触と、悪戯っぽい声が脳裏に生々しく甦り、古城はハッと顔を上げた
混み合った朝のモノレール車内。気怠い車掌のアナウンスと、眠気を誘う単調な加速。窓の外には絃神市の人工的な街並みと、朝陽に照らされた青い海が広がっている。見慣れた魔族特区の景色である。
出血の前兆のようなむず痒さを鼻の奥に感じながら、夢か、と古城は息を吐き、
「先輩」

「うおっ!?」

至近距離から姫柊雪菜に呼びかけられて、古城は本気で悲鳴を上げた。

むー、と唇を引き結びながら、雪菜が不服そうに古城を見上げてくる。

制服に、黒いギターケースを背負った女子中学生。整い過ぎるほどに整った、清冽な美貌の少女である。少しは見慣れたつもりでいたが、やはりその容姿でいきなり目の前に出てこられると、正直わけもなく焦ってしまう。しかし彼女自身には、そんな自覚は微塵もないらしく、

「もうすぐ駅に着きますけど」

動揺する古城を露骨に疑うような口調で、雪菜が言った。

ちょうどモノレールが駅の手前で減速を始めたところだった。古城たちが通う私立彩海学園の最寄り駅である。通学の時間帯ということもあって、車内には古城たち以外にも同じ学校の生徒は多い。雪菜のような綺麗な後輩と一緒に登校している古城には、周囲からあからさまな嫉妬と憎悪の視線が降りそそぐ。

実のところ、雪菜は単に彼女の任務で古城を監視しているだけなのだが、この状況でそれを主張しても、信じてくれる者はいないだろう。たとえ古城の正体が〝第四真祖〟と呼ばれる吸血鬼であり、雪菜が背負っている黒いギターケースには、その真祖をも殺すという破魔の槍が収められているとしても

勘弁してくれ、と心の奥で呟きながら、古城は弱々しく嘆息し、

「お、おう。悪い。ちょっとウトウトしてた」
「それは見てればわかります」
「そ、そうか」
「……悩み事ですか？　なんだか、うなされてたみたいですけど」
雪菜が生真面目な表情で訊いてきた。古城は再び表情を引き攣らせる　クラスメイトにキスされたときのことを思い出していた、とは、さすがに言えない。
「い、いや。べつになにもないって。ちょっとびっくりしただけで」
「……藍羽先輩となにかあったんですか？」
「え!?」
どうしてそれを、と言いかけて、古城は慌てて言葉を呑みこむ。剣巫などと呼ばれているだけあって、雪菜の霊感は侮れない。
じりじりと詰め寄ってくる雪菜から、古城は冷や汗にまみれながら視線を外し、
「い、いや、まさか……ハハッ……」
「本当に？」
「してない。なにもしてないです」
「……どうして目を逸らすんです、先輩」
「そ、そんなことを言われても、この角度はちょっと……」

ほとんど密着するような距離から見上げてくる雪菜に、古城はもごもごと言い淀む。

「角度？」

雪菜はきょとんと目を瞬いた。

小柄な彼女と古城の身長差は、十数センチ。その位置から至近距離に立つ雪菜を見下ろすと、ちょうど彼女の制服の胸元をのぞきこんでしまう形になる。

つまり襟の隙間から見える白い肌と、谷間と呼ぶにはささやかな膨らみの狭間を

「先輩……！」

バッ、と両腕で胸元を隠して、雪菜が古城を睨みつけた。古城は必死で首を振る。

「待て待て！　今のは俺は悪くないだろ！」

「……そうですね。いつもどおりの先輩で安心しました」

雪菜が諦めたように深々と息を吐く。そんなんで安心されても困るんだが、と古城は顔をしかめた。とりあえず話題が逸れたのは助かるが、なぜか釈然としない気分だ。

無人運転のモノレールが駅に到着して、ドアが開く。わらわらと降車する生徒たちの群れに混じって、古城たちは改札へと向かった。

駅から彩海学園までは徒歩で十分足らず。人工的に設計された緩やかな坂道を、古城は気怠げに歩いていく。そんな古城の横顔を見上げて、雪菜が心配そうに眉を寄せた。

「先輩。本当に大丈夫ですか。顔色もよくないですよ」

「仕方ねーだろ。吸血鬼の体質にこの時間の登校はきついんだって。マジで」
古城は恨みがましい表情で、無駄によく晴れた青空を見上げた。
太平洋のド真ん中に浮かぶ絃神島は、常夏の人工都市だ。十月になっても秋の気配は微塵もなく、相変わらず強烈な陽射しが降りそそいでくる　吸血鬼でなくても正直つらい。
「それにここ最近ずっと寝不足だったからな」
「寝不足、ですか」
「ああ。煌坂のやつが夜中に電話なんかかけてくるから」
「電話？　紗矢華さんが先輩に？」
雪菜が驚いたように目を瞠る。古城はそれに気づかないまま、
「こないだから、たまにあるんだよ　その日の姫柊の様子を訊かれたりとか、あと、なんか知らんが延々と説教されたりとか。たいした用事もないくせに、なに考えてんだか」
「用事もないのに……延々と……ですか」
「姫柊が携帯持ってないから、仕方なく俺と会話してやってるって言ってたぞ」
特に疑問を覚えないまま、古城は言われたままの説明を口にする。
雪菜はなぜか真顔になって、独り言のようにぽそりと言った。
「……紗矢華さんって昔から電話嫌いで、少し問題になったことがあるんです　獅子王機関の上司が相手でも、耳元で男の人の声がするのに耐えられないって、着信を拒否したりして」

「ああ……そういや、あいつ、男嫌いだもんな」

出会った直後の紗矢香の刺々しい態度を思い出して、古城は溜息をついた。

煌坂紗矢華は、雪菜と同じく獅子王機関に所属する攻魔師だ。

幼いころから優れた霊視力を持っていた彼女は、その能力を疎んだ父親に日常的に暴力を振るわれていたらしい。そのせいで彼女は今でも男性全般を嫌っている。

「それなのに、わざわざ俺に電話してくるくらいだから、よっぽど姫柊のことを気にしてるんだな。相変わらず友達想いというか、過保護というか……」

「先輩……」

迷惑そうに呟く古城に、雪菜が責めるような視線を向けてくる。予想外の彼女の反応に、古城は軽く困惑して、

「姫柊？」

「いえ、なんでもありません。そうですね」

淡々と答えて、雪菜は足を止めた。どこか拗ねているような態度だが、古城にはその理由がわからない。雪菜は無表情なまま、機械的に会釈して、

「それでは、ここで失礼します。わたしは中等部の校舎に行きますから」

「あ、ああ」

遠ざかっていく雪菜を見送りながら、古城は首を傾げた。ギターケースを背負った小さな背

中は、同じ制服の生徒たちにまぎれてすぐに見えなくなる
「なんなんだ、いったい？」
立ち尽くす古城を、眩い朝の陽射しが容赦なく照らす　今日も暑い一日になりそうだった。

3

「うーす、古城。おまえ、なんかいつにも増して人相悪いなー。大丈夫か？」
昇降口でもたもたと上履きに履き替えていると、背後から声をかけられた
首にヘッドフォンを引っかけた男子生徒が、テンション高めの態度で古城に手を振っている。
中学時代からの悪友、矢瀬基樹だ。古城は面倒臭そうに手を振り返し、
「ただの寝不足だ。ほっといてくれ」
「へえ……寝不足？」
投げやりな古城の返答を聞きつけて、笑い含みに会話に乱入してきたのは、通りすがりの築島倫だった。抜群のスタイルとクールな言動で校内の男子に根強いファンを持つ、古城たち高等部一年B組のクラス委員である。
「なにか悩み事かな。もしよかったら相談に乗るよ」
「いや、べつに悩んでるってわけじゃ……ないんだが……」

「人間関係ね」

曖昧に誤魔化そうとする古城を見つめて、倫は迷いのない口調で断言する。自信に満ちた彼女の言葉に、古城は呆気なく動揺した。

「え？」

「その眉の形と小鼻の角度は、人間関係に悩みを抱えてる顔だよ」

「……そ、そうなのか？」

思わず自分の鼻先に触れて困惑する古城。倫に人相占いができるという話は聞いたことがなかったが、人間関係の悩みと言われれば、心当たりがないわけではない。

焦りまくる古城とは裏腹に、厳かな口調で倫が続ける。

「悩みの原因はあなたの身近な人ですね　あなたのスピリチュアルなオーラのカラーリングが暗示しているのは……女性関係？」

「な、なんでわかるんだ？」

反射的に浅葱のことを思い浮かべて、古城はうめいた。

彼女が古城にキスをしたのは、約二週間前。とあるテロ事件が終わった直後のことである。

中学時代に知り合って以来、浅葱をほとんど異性だと意識していなかった古城だが、さすがにあんなことがあったあとではそうも言っていられない。いくら古城が鈍くても、彼女が自分に好意を抱いていることくらいはわかっている。

それを迷惑に感じているわけではない。恋愛感情と呼べるかどうかはべつにして、好きか嫌いかということなら、古城は間違いなく彼女のことを好きだと言い切れる。

そしてその事実が、古城を悩ませている原因なのだった。

なぜなら古城は、彼女に言えない大きな秘密を抱えているからだ　自分が世界最強の吸血鬼である、などという馬鹿馬鹿しくも致命的な秘密を

そんな重大な事実を伏せたまま、浅葱の好意を受け入れるわけにはいかない

だからといって、秘密を守るために浅葱を突き放せば、結果的に彼女も自分も傷つくことになる。そもそも自分が近くにいるというだけで、なにも知らない浅葱を危険に巻きこんでいるのではないか　そんなことを考え始めると、出口のない思考の泥沼にはまりこみ、古城は途方に暮れてしまうのだった。ここ最近の寝不足の理由は、紗矢華との長電話だけではない。

と、そんな古城を憐れむように眺めて、矢瀬がしみじみと呟いた。

「古城……おまえって意外に霊感商法とか詐欺とかに引っかかりやすいタイプだったんだな」

「さ、詐欺？」

唖然とする古城を見つめていた倫が、クスクスと声を洩らして笑い出す

それを見て古城もようやく理解した。倫にまんまと嵌められたのだ

考えてみれば彼女は普段から間近で古城と接してるわけだし、古城が悩んでいることくらい、ちょっと観察していれば簡単に気づくだろう　占いなんかに頼るまでもない　ひょっとしたら、

浅葱が古城の苦悩の原因だということすら、すでに見抜いているのかもしれない。

「くそ……完璧に騙された。もうおまえらのことは二度と信用しねえ」

「騙すなんて人聞きが悪いな。相談に乗るっていうのは本気なのに」

倫が真面目な顔で言い返す。古城は乱暴に息を吐き、

「遠慮しとく。自分がやんなきゃいけないことくらいはわかってるんだ。最初から」

「ふうん……それなら、まあいいけど」

苦々しげな古城の横顔をじっと見つめて、倫が微笑する。

古城たち二人は、そのまま連れ立って教室へと向かった。始業時刻にはまだ少し早いせいか、教室内にいる生徒はクラスの半分ほど。その中でもひときわ目立つ派手な容姿の女子生徒、藍羽浅葱が、古城たちに気づいて手を上げる。

「おはよー、お倫。あんたたちもね」

おー、と気怠く挨拶を返しながら、いつもと変わらない浅葱の様子に、古城は内心ホッとする。古城に対する彼女の態度は、あの保健室の出来事のあとも、まったく変化していない。そのことが素直にありがたくもあり、少し不気味でもあった。

しかし倫は、浅葱の微妙な変化に目敏く気づいて、おや、と眉を上げ、

「どうしたの、浅葱も寝不足？」

倫の指摘に、浅葱は、悪戯がばれた子どものような表情を浮かべた。化粧で上手く誤魔化し

ていたが、よく見れば彼女の目元には、うっすらと隈が浮かんでいる。
「んー、昨日ちょっとね……って、なによ、古城。そのひどい顔？」
眠そうに目を細めていた浅葱が、古城を見上げて怪訝な顔をする。そんな浅葱と古城の様子を、倫は愉しげに見比べながら、
「暁くんも、昨日あんまり寝てないんだって」
「な、なにニヤニヤしてるのよ――」
浅葱が声を上擦らせながら抗議する。倫の発言が暗に示唆することに気づいたのか、その頬が赤い。浅葱はそのまま古城をキッと睨みつけ、
「あんたも、そういう誤解を招きそうなことするのやめてよね」
「なんで俺が文句を言われてんだ……」
「とにかく、あたしが眠れなかったのは、昨日の騒ぎのせいだからね」
浅葱が早口で言い訳する。それを聞いていた矢瀬が、おお、と話に喰いついた。
「そうか。アレって、おまえん家の近くだっけか」
「そうなのよ。明け方近くまで消防車が走り回ってて、騒々しいったら……」
「……昨日の騒ぎってなんだ？」
かすかな引っかかりを覚えて古城が訊いた。浅葱の自宅があるのは、市の中心部に近い高級住宅街だ。深夜の騒動などとは無縁な、閑静な地区というイメージがある

ん……俺もちらっとニュースで見ただけなんだが、夜中に西地区で魔族が暴れたんだってよ。未登録魔族同士が戦り合ったらしい」

「魔族が暴れた？」

面白がっているような矢瀬の説明に、古城は表情を硬くする。

浅葱は気怠げに頬杖をついて頷き、

「けっこう派手にやらかしたみたいで、ビルが何棟か倒れてたし、道路は陥没してるし、特区警備隊が押し寄せてきて、もう大騒ぎよ。どこかの馬鹿な吸血鬼が、また眷獣でも暴走させたのかと思ったんだけど……」

「俺じゃない、俺はなにもやってないぞ」

無意識にそんなことを口走った古城を、浅葱は呆れたような表情で見上げた。

「そんなことわかってるわよ。なに言ってんの、あんた」

「そ、そうか。そうだよな」

古城は額に浮いた汗を拭いながら、弱々しく言った。ここ絃神市は魔族特区、五十六万人の総人口のうち、約四パーセントは正式な市民権を与えられた人外の魔族である。獣人、精霊、半妖半魔に人工生命体。そして吸血鬼。この街では魔族など外国人よりもありふれた存在だ。だから古城以外の魔族が暴れて街を壊したとしても、べつに驚くようなことではない。

「ところでき、古城……あんた、今日の放課後、なにか予定ある？」

矢瀬や倫が自分たちの席に向かった直後、古城の制服の裾をつまんで、浅葱が小声で訊いてきた　なぜか照れているような彼女の声につられて、古城の緊張も一気に高まる。

「いや。特になんもないが」

古城はぎこちなく首を振った。おそらく今日も監視者であるところの雪菜につきまとわれるのだろうが、それは予定とは呼べないだろう。

浅葱が安堵したように小さく息を吐く。

「じゃあさ、授業が終わったあと美術室につき合って。あんた一人で」

「美術室？　べつにいいけど、なんでだ……？」

表面上は平静を装いながらも、古城は思いきりうろたえていた。彩海学園の美術部は、部員不足で活動休止中。つまり放課後の美術室は無人のはずである。そんなところに古城を連れこんで、いったいなにをしようというのか――

「いいから。ほかの人には内緒にしておいてよ」

そんな古城の苦悩も知らず、浅葱が頬を赤らめながら囁く。そんな彼女の顔を静止できずに、古城は逃げ出すようにその場を離れた。

4

そして訪れたその日の放課後。

先に教室を出た浅葱は、誰もいない美術室で古城を待っていた。カーテン越しの夕陽が淡い逆光となって彼女を照らし、吹きこむ海風が髪を揺らしている。

そんな浅葱の目の前にあるのは、真っ白なスケッチブック。彼女の右手に握られているのは、芯を長く削ったデッサン用の鉛筆だ。

「……肖像画？」

制服の上にエプロンを羽織った彼女を、ぽかんと間の抜けた顔で見返して古城が訊く。

浅葱は、美術室の隅にあるカレンダーを指さして、

「そう。友達の肖像画っていうか、似顔絵？　提出期限が今度の月曜だったでしょ」

「……それって先週の授業でやったやつか？」

古城は気怠い表情で訊き返す。放課後、ひと気のない教室に呼び出されるという状況に、古城なりに覚悟を決めて来たつもりだったのだ。たとえば真面目に告白をされるとか、あるいは、こないだの保健室の続きを要求されるとか

しかし浅葱は、いつもの悪びれない笑みを浮かべたまま、

「そうなんだけど、あたし、授業に出てないのよ、その日は警察に事情聴取に呼ばれてたからさ。ほら、例のテロ組織に拉致られた件で」

「それで……俺にモデルになれって？」

古城は、ぐったりと脱力して用意されてた椅子に座りこんだ。

「いいでしょ。あんた、どうせ暇なんだし」

「まあ、俺はいいけど。でも、どうせ描くなら、築島とかのほうが見栄えがいいんじゃねーか」

「お倫は今日は委員会の仕事。基樹のバカは先輩とデート」

「……そうか……じゃあ仕方ないな」

古城は諦観したように、力無く呟いた。冷静になって考えてみれば、浅葱の頼みはべつに理不尽なものではない。古城が勝手にあれこれ妄想して、振り回されていただけである。

「そうそう。そういうわけだから、とりあえず脱いでくれる？」

大人しくなった古城を満足げに眺めて、浅葱が何気ない口調でさらりと言った。

古城は、なんの疑いもなくその命令に従いかけて、途中でハッと我に返る。

「は？　脱ぐってなにを？」

「モデルが脱ぐっていえば服に決まってるでしょ。なに今さら恥ずかしがってんの」

「待て待て！　似顔絵のモデルが服を脱ぐ必要はないだろ！」

「芸術のためだから観念しなさいって。で、あれと同じポーズでお願いね」

ニヤニヤ笑いを浮かべて浅葱が指さしたのは、美術室の片隅に飾られていたダビデ像のレプリカだった。オリジナルの製作者はミケランジェロ　ルネサンス期を代表する傑作である　が、

「思いっきり丸裸じゃねーか！」

あまりにも芸術的なその姿に、古城が絶叫する。浅葱はクックッと喉を鳴らして笑い、

「冗談よ、冗談。その汗臭そうなパーカーだけ脱いでくれたらいいからさ」

最初からそう言え。あと汗臭そうってのは余計だ」

低くうめきながら、古城は制服の上に着ていたパーカーを脱いだ。

浅葱も今度はふざけるのをやめて、古城の正面にスケッチブックを広げて座る　当然、互いの顔を見つめ合うような形になるが、浅葱がそれを気にしている様子はない

鼻歌交じりに鉛筆を走らせている彼女を見て、古城は不意に罪悪感を覚えた

浅葱は古城が、吸血鬼になったことを知らない。古城がそれをひた隠しにしているからだ。

それはもしかしたら、彼女を騙しているということではないか、と古城は自問する。

考えるまでもなく、答えはイエスだった。古城のことを信頼して、浅葱は無防備に振る舞っている。そんな彼女を、古城は、こうしている今も裏切り続けている。

浅葱のことは大切な友人だと思っている。

だからこそ、その裏切りは許されることではない。古城はそれを今さらのように自覚する。

そう。最初からわかっていたことだ。浅葱が本当に自分に好意を寄せてくれているのなら、

古城は事実を伝えなければならない。自分が〝第四真祖〟と呼ばれる吸血鬼である、という馬鹿げた事実を。たとえその結果として、彼女の友情や好意を失ってしまうとしても――

そんな悲壮な決意を古城が密かに固めた、まさにその瞬間だった。

「うーん、つまんない」

浅葱がスケッチブックを投げ出して突然立ち上がる。

まったく想定外のその行動に、古城は完全に意表を衝かれて、

「な、なにがだ？」

「創作意欲がわかないのよね。あんた、すごい普通だし。もっと面白い顔はできないわけ？」

「……なんでモデルやってる人間が絵描きを楽しませなきゃなんねーんだよ　変顔の肖像画が残るのって、嫌すぎるだろ」

浅葱の身勝手な要求に、古城が当然の反論をする。浅葱はそれをきっぱりと無視して、古城の顔におもむろに手を伸ばし、

「まあ、そう言わずに試してみなさいよ。案外楽しくなるかもしれないからさ」

「バ、バカ！　やめろ、こら！　って、おまえ、どこからテープなんか持ってきた!?」

器用にピニールテープなどを駆使する浅葱に、抵抗虚しく好き勝手に弄ばれる古城。無理やり払いのけることができないのは、浅葱の身体に手を触れることにためらいがあるせいだ。

「あはははは！　うーん、いいわよ、その表情。こうして見ると古城もけっこうイケメン

よね。ピカソ級の傑作の予感がするわ」

「全然褒められてる気がしねーよ！　そもそもピカソはモデルに変顔させながら描いてたわけじゃねえ……って、なんだこれ!?」

「……ん、メイク？」

「油性マーカーじゃねえか！」

頬に触れるしっとりした感触に、古城は声を荒らげた。浅葱は慣れた手つきで、古城の顔にキュッと垂直のラインを引いて、

「なかなか似合ってるわよ。ヴィジュアル系っぽい雰囲気で」

「こんなお笑いコントのニセ外国人みたいなメイクのヴィジュアル系がいるか……！　ってか、あとでちゃんと洗い流せるんだろうな、このマーカー!?」

「まあ、細かいことは気にしなさんなって」

細かくねえだろ、と古城は脱力気味に言い返す。正直、腹が立たないわけではなかったが、笑っている浅葱を見ていると、悩んでいた自分が馬鹿馬鹿しく思えてきたのも事実だった。

もしかしたらそれが目的で、浅葱はこんな悪ふざけをしたのではないか、とふと思う。

「あ、そうだ……ちょっと待ってて」

浅葱は突然そう言い残して、一人で美術室を出て行った。古城は不安げにそれを見送る。顔の落書きを落とさなければ、浅葱を追いかけて外に出ることもままならない。

やかて美術室に戻ってきた浅葱は、大きな段ボール箱をいくつも引きずっていた。
嫌な予感しかしなかった
「お待たせー」
「……なんだこれは？」
「衣装。演劇部の部室が、ここの近くだから借りて来たのさ　あの部にはうちのクラスの女子、多いからね」
そう言って浅葱は段ボールを開ける。箱の中に詰めこまれていたのは、今ドキ風のド派手な衣装だった。執事服やメイド服、魔法少女にゴスロリ、特撮ヒーロー風の全身タイツなど。演劇部の備品というよりも、明らかにコスプレオタクの持ち物だ。
「……それで、俺にこれをどうしろと？」
「古城が着るに決まってるでしょ。これとかそのメイクに似合いそうじゃない？」
澄まし顔でそう言いながら、浅葱が衣装を取り出してみせる。ハンバーガーショップの軒先で見かける紅白縞模様のピエロの服装である。似合うかっ、と古城は怒声を上げて、
「おまえの美術の課題のために、なんで俺がコスプレしなきゃなんねーんだよ!?」
「あたしの芸術性の問題だってば。変顔で似顔絵を描かれるのが嫌なら、せめて衣装くらい着てくれたっていいでしょ。それとも、やっぱり脱ぐ？」
「脱ぐかっ！　だいたい、人でこんな恰好してたら俺が馬鹿みたいじゃねーか！

「……なにそれ？　一人じゃなかったらいいわけ？」

浅葱がいきなり真顔で訊いてくる。黙りこむ古城を挑発するように、浅葱は箱の中の衣装を指さして、

「だったら、あたしもあんたにつき合って着替えてあげるから。それなら文句ないのよね」

「いや、文句ないってことはないと思うんだが……」

「はいはい。着替えるから、あっち向いててよ」

古城の異議申し立てを遮って、浅葱が制服のネクタイをするりと解いた。そのまま上着のボタンに手をかける。古城は慌てて彼女に背中を向けた。

放課後の静かな美術室に、浅葱が着替える衣擦れの音が響く。古城は脳内でフリースローのイメージトレーニングをしながら、煩悩を刺激するその雑音を遮断しようと試みた。

異様に長く感じる数分間が過ぎてようやく、もういいわよ、と浅葱に肩を叩かれる。

「ほら、これで文句ないでしょ」

ファミレス店員の制服を着た浅葱が、古城の目の前でくるりと回ってみせる。胸の膨らみを強調した衣装にフリフリのエプロン。不自然なほど短いスカートとニーハイソックス。露出度が高いわけではないが、同級生が校内でそんな服を着ているという状況の異常さに困惑する。

「……なんでウェイトレスなんだ」

「古城がこういうの好きかな、と思って。いっつもファミレスで店員さん、ガン見してるし」

「してねえよ、そんなこと！」

「まあまあ。あたしがここまでサービスしてあげたんだから、あんたも着替えなさいよ、ほら」

「おまえ、完璧に最初の目的を忘れてるだろ　美術の課題はどうしたんだよ」

ぶつぶつと不平を洩らしながら、古城は段ボール箱の中をのぞきこんだ。目についた範囲で、いちばんまともそうな執事服を引っ張り出す。興味津々で見つめている浅葱に壁側を向かせて、古城は仕方なく着替え始めた。幸いなことにサイズ的な問題はない。演劇用の衣装ということで、ある程度、融通が利くように作ってあるらしい。

「うん、古城にしてはなかなか似合うじゃない」

着替え終えた古城を見て、浅葱が感心したように笑う。

「まったく嬉しくもなんともねえよ」

鏡に映る自分を見て、古城はうんざりと顔をしかめた。執事服というが、要は黒の燕尾服である。その衣装は、古城に否応なく古めかしい吸血鬼の姿を連想させた。聖域条約が締結される以前、人類の敵として恐れられていた大戦前の魔族のイメージである

その事実に古城はわけもなく不愉快な気分を味わいながら、そろそろ気が済んだだろうか、と浅葱の様子を窺うと、

――カシャ！

無駄に高性能なスマートフォンのカメラで、自分を撮影している浅葱と目が合ってしまう

「お、おまえ、なに撮ってんだ!?」
「ん？　作画参考資料？」
「やめろ、消せ。今すぐ消せ！」
声を上擦らせて古城が叫んだ。文化祭の準備をしてるわけでもないのに、放課後に居残って学校内で執事服。しかも顔には変なメイクつき、という状況は正直かなりイタいと思うしかし浅葱は、カシャカシャと連射性能をフルに発揮したシャッター音を響かせて、大丈夫よ。クラスのみんなに一斉送信したりしないから」
「そんな発想がさらっと出てくる時点で信用できねえよ！　ああ、くそっ！」
反撃とばかりに古城は自分の携帯電話で、浅葱のウェイトレス姿を撮り返す。それを見た浅葱が可愛く悲鳴を上げた。いちおう彼女にも恥ずかしいという意識はあったらしい。
「ちょっ……なんであんたまで撮るわけ!?　いやらしい」
「当然の対抗措置だ。いやらしくねえ！」
「まったく……！」
浅葱は開き直ったように荒々しく嘆息すると、いきなり古城の隣に立って自分の腕を掲めてきた。そのまま全身を密着させて、自分たちの姿をまとめてカメラのフレームに収める。
カシャリ、とシャッター音が響いて、スマートフォンの画面に表示されたのは、二人のツーショット写真だった。執事とウェイトレス。まったく謎のシチュエーションだが、なぜか不思議

としっくりはまっている。

「どう？　これで気が済んだ？」

「……気が済むとか済まないとか、そういうことじゃないんだけどな」

妙に満足そうな浅葱を睨んで、古城は疲れた声を出す。

その直後、校舎内に長いチャイムが鳴り始める。下校時刻になったのだ。

真っ白なままのスケッチブックを眺めて、浅葱が憮然と頭をかいた。

「全然終わらなかったわ。あんたが駄々をこねてたせいで」

「俺のせいなのかよ!?　おまえが余計なことばっかやってたせいだろ！」

「まずったなあ……あたし、明日はちょっと用事があるのよね」

めずらしく本気で困ったように、浅葱がうめく。古城もさすがに少し罪悪感を覚えた。

浅葱が居残りで課題をやらされているのは、テロ事件に巻きこまれたせいであって、彼女に非があるわけではない。それに古城自身、その事件と無関係ではなかったのだ。

「……だったら週末にうちでやるか？」

仕方なく古城が提案する。どのみち放課後の短い時間だけでは、肖像画を完成させるのは難しい。それに古城の自宅で作業するぶんには、変な服を着せられる心配もないだろう。

「いいの？」

「ああ。うちの母親はまた当分帰ってこないみたいなことを言ってたし、昼間は凪沙も部活で

いないからな。とりあえず気は遣わなくていいぞ」
「……ふ、二人っきりって……？」
ほとんど聞き取れないくらいの小さな声で、浅葱がぼそぼそと呟いた　古城は自分がなにか致命的なミスを犯したような気がしたが、やっぱやめた、などと今さら言い出せるわけもなく、
「じゃあ、悪いけど、それでお願い。土曜日にね」
浅葱が、満面の笑みで古城を見上げて言う　そしてそういうことになった。

5

美術室の鍵を返してくる、という浅葱と別れて、古城は廊下の手洗い場の前にいた　浅葱に描かれた顔の落書きを洗い流すためである。
「あー、くそ……やっと落ちたか……」
頑固な汚れに手こずりつつも洗顔を終えて、古城はホッと息を吐く
そんな古城の前にそっとタオルが差し出された。淡いブルーの清潔そうなタオルだ
「どうぞ」
「ああ、悪い」
古城は条件反射的にタオルを受け取って、濡れた顔を拭き、

「って、姫柊!?」

タオルを渡してくれた相手に気づいて、そのまま硬直した。

中等部の制服にギターケースを背負った雪菜が、気配もなく古城の隣に佇んでいた。彼女が、いつからそこにいたのか、古城にはまったくわからない。

「こんな時間まで、なにをしてたんですか、先輩？」

雪菜が静かな口調で訊いてくる。柱の影になっていて、彼女の表情は読み取れない。雪菜の声は穏やかだったが、それが余計に古城をびびらせた。

浅葱のことで頭がいっぱいで、雪菜の存在を忘れていたのが古城の敗因だ。監視者を自称する国家公認ストーカーの彼女が、放課後の古城の行動を見張ってないわけがなかったのだ。

「あ……いや、さっきまでクラスメイトの美術の課題につき合ってたんだ。悪い」

古城は平静を装ってぎこちなく笑う。雪菜がどこまで状況を把握しているかわからない以上、不用意な言い訳は命取りである。

「べつに謝っていただく必要はありませんけど」

古城から受け取ったタオルをしまいながら、雪菜はそっと溜息を洩らした。

「――先輩の言う課題というのは、藍羽先輩にウェイトレスの衣装を着せて、写真を撮ったりすることですか？」

「やっぱり見てたのかよ!?」

「監視役ですから」
雪菜が当然のような口調で言う。いつもの澄ました声音だが、かすかに不満そうな響きが含まれているのを古城は聞き逃さなかった。ここ一カ月あまりのつき合いで、一見わかりにくい雪菜のご機嫌も、それなりの確率で把握できるようになっているのだ
「だったらわかるだろ。あれは浅葱の悪ふざけで、俺は本当に肖像画のモデルを頼まれただけなんだって」
「……ただの悪ふざけにしては、ずいぶん楽しそうでしたね。お二人とも」
雪菜がむくれたような表情で呟いた。どこか羨ましそうな彼女の態度に古城は困惑し、
「え？」
「いえ、なんでもありません」
「そ、そうか……まあ、ちょうどよかった。実は姫柊に相談したいことがあったんだ」
いちおう雪菜が納得してくれたと判断して、古城は無理やり話題を変える。雪菜は警戒の表情で古城を睨んだ。
「相談というのは、藍羽先輩のことですか？」
「まあ……まあ、浅葱のことというか、俺自身のことというか」
「え？」
「えーと、つまり……今の俺の本当のところを、浅葱にだけは言っておいたほうがいいんじゃ

ないかと思って」

要領を得ない古城の説明に、雪菜の表情はますます険しくなる。

「それは藍羽先輩に……欲情している、ということですか？」

「……よ、欲情？」

意外な単語を聞かされて、古城はぽかんと雪菜を見返した。彼女の誤解に気づいて慌てて首を振り、

「いや、違う。俺が浅葱の血を吸いたがってるとかそういう話じゃなくて――」

「だったらどういう話なんですか」

「俺が実は吸血鬼だったってあいつに教えとくって話だよ！」

「あー……」

雪菜が力の抜けたような相づちを打つ。

彼女にとって、古城は出会ったときから監視対象の吸血鬼だ。今さらそれをカミングアウトする、と宣言されても、ピンと来なかったのかもしれない。

雪菜の微妙なリアクションのせいで、古城もどことなく気恥ずかしい思いをしながら、

「このまま浅葱を騙し続けるのは、さすがにちょっと気が引けるというか、心苦しいというか」

「はあ」

雪菜が曖昧な表情で頷いた。

「気持ちはわからないでもないですけど、今ごろになって、どうして急に？」
「そ、それは……ほら、こないだみたいに、あいつがなにも知らないまま危険に巻きこまれるようなことがあったらまずいと思って」
キスされたから、と正直に答えるわけにもいかず、古城はもっともらしい言い訳を口にする。
「なるほど……」
そのせいで、俺があいつに避けられるようなことになっても、それは仕方ないことだしな」
古城は自嘲気味に乾いた声で笑った。
この絃神島では吸血鬼などめずらしくもないが、友人が未登録魔族で、しかもそれを隠していた、となると話はべつだ。浅葱が怒り狂う可能性は、決して低くない。
「ただ、俺の正体がバレたら、姫柊の立場にも影響するだろ。だから、姫柊には相談しておいたほうがいいかと思ってさ」
古城は神妙な表情で、雪菜の反応をちらちらと確認する。しかし雪菜は、なぜか心ここにあらずという表情で俯いて、
「そう……ですか……わたしだけが知ってた秘密を、藍羽先輩に……」
「え？」
「いえ、なんでもありません」
雪菜が顔を上げて姿勢を正した

「わたしのことはお気遣い無用です。もともと公表されて困る身分でもありませんし」
「そ、そうか」
そういえば雪菜は国家資格を持つ攻魔師で、所属している組織も、れっきとした政府機関なのだった。わざわざ言いふらすことではないが、バラされて困る理由もない　彼女が身分を隠しているのは、どちらかといえば古城の立場を配慮してのことである。
「問題は、わたしよりも凪沙ちゃんですね」
「そうだな」
雪菜の冷静な指摘に、古城は頭を抱えた。
古城の妹――暁凪沙は、魔族特区の住人でありながら魔族を恐れている。彼女は重度の魔族恐怖症なのだ。それは彼女が、かつて魔族に襲われて瀕死の重傷を負ったという、自己の体験に根ざしたものである。
だから古城は自分の正体を隠さなければならない。
凪沙がそれを知ってしまったら、古城たち兄妹が一緒に暮らせなくなるというだけでなく、最悪、彼女の精神に深刻なダメージを与えかねないからだ
浅葱に秘密を明かしてしまえば、当然、それが凪沙の耳に入るという危険も増すことになる。
雪菜もそれを心配しているのだろう。
「あー……くそ、どうすりゃいいんだ……」

古城は弱音を吐きながら、廊下の窓枠に突っ伏した。
眼下には夕陽に照らされた中等部の中庭が見える。校庭や、ほかの校舎からは死角になった建物の陰に、ちょうど見覚えのある女子生徒の姿を見つけて、古城は、む、と眉を寄せた。
「風沙……？」
中等部の制服に身を包んだ小柄な影。長髪を短く束ねた特徴的な髪型に、瞬をすれば影、というわけでもないのだろうが、そこに立っていたのは今まさに話題にしていた古城の妹だった。
そして彼女の隣には、ジャージ姿の運動部員らしき男子の姿がある
その光景を見た瞬間、古城の意識は怒りと焦りで真っ白になった
「――野郎っ！」
「先輩!?　ちょ……ちょっと待ってください！　なにやってるんですか!?」
校舎四階の窓から飛び降りようとした古城を、雪菜が慌てて引き止める
古城は窓枠に足を乗せたまま、引き攣った表情を雪菜に向けて、
「な、なんだあいつ……なんであんな男が風沙と一緒に？」
「……わたしたちのクラスの男子生徒ですね」
雪菜が、冷静な口調で最初の質問に答える。雪菜と風沙は中等部のクラスメイトだ　つまり
中庭の男子生徒も、風沙と同じクラスにいるということになる
「そう言えばなんか見覚えがあるな……たしか高清水とかそんな名前だっけか」

曖昧な記憶を辿って古城は呟いた。古城がまだバスケ部にいたころ、放課後のグラウンドで何度か見かけた顔だった。こざっぱりした顔立ちのサッカー部員で、女子にも人気があると聞いた記憶がある。

そんなヤツが凪沙になんの用だ、と古城が狼狽していると、

「あ……手紙」

「なっ⁉」

雪菜の何気ない呟きに、古城の息が止まる。見ればたしかに高清水の手には、白い封筒が握られていた。

「な、な、なんで同じクラスの男子が、こんなひと気のない場所で凪沙に手紙を渡すんだ⁉」

「それはわたしに訊かれても……」

雪菜が困ったように身をすくめる。ただならぬ古城の剣幕に気圧されているらしい。

「でも、ああいう手紙はやっぱり人目につかない場所で渡すんじゃないでしょうか」

「ああいう手紙って、どういう手紙――⁉」

「ラブレターではないんですか？」

雪菜の言葉を聞いた瞬間、古城の全身から力が抜けた。同級生の男子が、凪沙に恋文を渡す。馬鹿な、そんなことはあり得ない、と古城は自分に言い聞かせる。だって凪沙はまだ子どもで。ほんのちょっと前まではランドセルを背負って、小学五年生までサンタクロースを信じていた

のに。

「あ、あの……先輩？」

諭吉のようになにごとかを呟き続ける古城に、雪菜が怖ず怖ずと呼びかける

古城は虚ろな笑みを浮かべて、

「ハハッ、まさかそんな。あの凪沙にラブレターを渡す男なんているわけないだろ」

「いえ、あの……凪沙ちゃんってもてますよ」

雪菜が言いにくそうに衝撃の事実を明かした。

「そ、それは相手が犬とか猫とか……」

「そうではなくて、普通にクラスの男子に……明るくて可愛いですし、話しかけやすいですし、面倒見もいいですし、友達も多くて、もてない理由がないと思うんですけど」

半ば放心状態で古城は雪菜の言葉を聞く。

中庭では、凪沙に手紙を渡した高清水が、自分はやり遂げたといわんばかりに颯爽と立ち去っていくところだった。

「とりあえず今日は、手紙を受け取っただけ、みたいですね」

事の一部始終を見ていた雪菜が、廊下に突っ伏している古城のために実況する　動揺する古城を見て呆れているのか、その声には残念なものを見ているような響きが混じっていた

1

月齢七。上弦の夜

『もっ……もしもしっ!?　暁古城!?　私だけど!』

深夜一時を過ぎたころ、突然の電話に、古城は寝入り端を叩き起こされた。

電話口から聞こえてくるのは、ガチガチに張り詰めた感じの硬い声。ここ数日ですっかり聞き慣れてしまったその声に、古城はやる気のない口調で応答する。

「……煌坂か。悪いけど今日はおまえの相手をしてる気分じゃないんだ。じゃあな」

そう言って古城が電話を切ろうとすると、

『は!?　ま、待ちなさいよ!?』

電話回線の向こうで、煌坂紗矢華が慌てる気配がした。

彼女は獅子王機関で〝舞威媛〟と呼ばれる呪詛と暗殺の専門家。そして雪菜の元ルームメイトだ。一週間ほど前に絃神島で起きた事件がきっかけで、古城は彼女と知り合った。

男嫌いの紗矢華の一方的な逆恨みで、古城はひどい目に遭わされたのだが、任務を終えて絃神島から離れたあとも、なぜか彼女はこうして頻繁に電話をかけてくるのだった。

『なに勝手に切ろうとしてるわけ!?　どういうことか報告しなさい。まさかあなた私の雪菜に

またなにかしたんじゃないでしょうね……!?」

相変わらずの雪菜への過保護ぶりを見せつけられて、古城はとても遺憾な気分になる。これさえなければ、紗矢華の性格は嫌いではないのだが

「姫柊は関係ない――こともないけど、あいつに迷惑がかかるようなことはねーよ、たぶんな」

『なにそれ。言ってることが全然わかんないんだけど』

それはそうか、と古城は少し反省した。

「だからさ、姫柊と同じクラスにうちの妹がいるんだけどな……」

『ああ、暁凪沙ちゃん？』

「なんで煌坂が知ってるんだ？」

『こないだの事件の資料で見たの。可愛いよね、あなたと違って』

うっとりした声でそんなことを言い出す紗矢華。うるせえ、と古城は歯噛みして、

「その凪沙が……クラスの男子に、告白っぽいことをされてな……」

『――殺したの？』

突然、冷え冷えとした口調になって紗矢華が訊いてきた。その急激な変化に古城は戸惑い、

「は？」

『あなたが殺したんじゃないの、その薄汚いコソ泥野郎を？　たしかに気持ちはよくわかるけど、あなたの眷獣で焼き払うのはやりすぎじゃないかしら』

「殺すかっ！」

あまりにも極端な紗矢華の思い込みに、ゾッとした気分を味わいながら古城は怒鳴った。

「なんで妹に言い寄ってくる男を、いちいち眷獣で焼き払わなきゃならんのだ!?　ていうか、俺にはおまえの気持ちが理解できねえよ！」

『どうしてよ？　私の雪菜にあなたが手を出したと聞かされたときの、このやり場のない怒りと絶望に少しは共感できたんじゃないの？』

「いやいやいや、姫柊はおまえの妹じゃないし、そもそも俺はあいつに手を出してないから」

『……私の雪菜の血を吸ったくせに私の雪菜の血を吸ったくせに……』

紗矢華がぼそぼそと恨みがましい口調で繰り返す。うぜえ、と古城は携帯を耳から離した。しばらくして、ゴホン、という咳払いの音が聞こえてくる。

『まあ、だいたいの事情はわかったわ』

「そ、そうか」

『あなたって、いわゆるあれよね。シスコン？』

「いや、おまえ、本当は全然わかってないだろ。そういうんじゃねーよ」

古城が苛々と反論した。

「……ただ、うちは両親が離婚してて父親がいないし、凪沙も入院生活が長くて苦労してるんだ。だから、なんていうか……俺が守ってやんなきゃ、ってのはあるんだよ」

『そ……そうなんだ……な、なによ、暁古城のくせに……かっこつけて。普段からそこまで深く考えていたわけではなく、半分以上は今思いついただけの言い訳だったのだが、紗矢華は本気にしたらしい　震える声でそう呟いて沈黙する

古城は少し罪悪感を覚えて、話題を変えることにした。

「それより今夜はなんの用だよ？」

『べつにあなたなんかに用があったわけじゃないんだけど！』

紗矢華が間髪入れずに言い返してくる。なんだそりゃ、と古城は呆れて、

「じゃあ電話してくんな」

『こ、今週末からまた絃神市に行くから、あなたがお願いするなら会ってやってもいいわよ、って言いたかっただけ』

「……またヴァトラーの馬鹿がなにかやらかしたのか？」

不意に嫌な予感を覚えて古城が訊いた。ディミトリエ・ヴァトラーは、欧州〝戦王領域〟の貴族。第二真祖〝忘却の戦王〟の血脈に連なる、純血の吸血鬼だ。

戦闘マニアとでも呼ぶべき好戦主義者で、二週間前の事件でも、絃神島にテロリストたちを招き寄せる一因になった傍迷惑な男である。紗矢華は、そのヴァトラーの監視役だったのだ。

しかし紗矢華は物憂げに嘆息して、

『別件よ。アルディギア王国のお……要人が来日するから、その護衛と道案内　のはずだっ

たんだけど……ちょっとトラブルがあって』

「アルディギア？　あんな遠くから紘神市になんの用だ？」

古城は怪訝な声で訊き返す。

アルディギア王国はバルト海に面する北欧の小国だ。美しい自然と高い工業力で知られ、特に魔導産業では有名である。しかし地理的に遠いため、日本との関係はそれほど深くない

『詳しいことは私も知ら……い、言えないんだけど。いちおう外交機密だから』

「ああ。そりゃそうか……」

微妙に歯切れの悪い紗矢華の言葉を、古城は素直に受け入れる。

「だけど外国の要人の案内を任されるなんて、煌坂って実はたいしたやつだよな。俺らと歳も変わらないのに」

『え、あ……ありがとう……』

紗矢華が意表を衝かれたように、素の可愛らしい声を出す。それから慌てて強気な口調に戻して、

『ま、まあ……当然だけどね。あなたみたいな半人前の真祖とは違うっていうか。雪菜の姉としてはこれくらいはね』

べつにおまえは雪菜の姉貴じゃないだろ、と古城は心の中で突っ込んだ。

「だけど、そんな大物の護衛なんかしてたら、俺や姫柊と会ってる暇なんてないよな。忙しい

だろうし。大変だな。さすがに俺らとは立場が違うわ」

『え、う……』

本気で感心する古城の言葉を聞いて、紗矢華は弱々しくうめいた　なにか反論しようと、うぐぐ、と低く唸り、

『そうよ、そのとおりよ！　死になさいよ、バカ！』

突然、開き直ったように叫んで電話を切る。

本当になんの用だったんだよ……と、沈黙した携帯電話を迷惑そうに眺め、まあいいか、とすぐに思い直して古城は再び眠りについた。

2

翌日の放課後。古城は授業が終わるとすぐに、中等部へと向かった。もちろん凪沙を監視するためである。

人工物である絃神島は慢性的な土地不足で、彩海学園の敷地も決して余裕のある広さではない。体育館やプールなどの多くの施設は中等部との共用だ。そんなわけで、古城も特に見咎められることなく、中等部の校舎へと辿り着く。

凪沙が今日の昼休み、部活のミーティングに出ていたことは確認済みだ　従って、高清水が

彼女と再び接触を図るとすれば、この放課後の時間帯という可能性が濃厚である
問題は、どうやって凪沙本人に気づかれずに彼女を監視するか、ということだが
「……こんなところでなにをやってるんですか、先輩」
人目を避けながら校舎内に潜入した古城は、いきなり呼び止められてその場に固まる。
声のしたほうをぎくしゃくと振り返ると、無表情に立っている雪菜と目が合った。
「姫柊……ぐ、偶然だな。俺は、たまたま通りかかっただけなんだが」
「中等部の校舎で偶然……ですか」
雪菜が呆れたように息を吐いた。さすがに校舎内ということもあってか、彼女の背中に、いつものギターケースはない。
「凪沙ちゃんなら、屋上に行きましたよ」
「……屋上!?　しまった、そっちか……！」
古城は舌打ちして頭上を振り仰ぐ。昨日、校舎裏で見かけたせいで、てっきり今日もその付近に現れるだろうと思いこんでいたのだった。
もはや忍びこんだ目的を隠そうともしない古城を、雪菜は冷ややかに見返して、
「先輩って、意外にシス……心配性ですよね。ちょっと引きます」
さすがに気を遣ったのか、シスコンと言いかけて訂正する雪菜。古城は不満げに唇を曲げて、
「言っとくけどな、姫柊のことだって心配してたぞ――」

煌坂が、と昨夜の電話のことを思い出しながら告げる　しかし、古城が最後のひと言を口にするよりも先に、雪菜は頬を赤くして、

「な……なんでそんな……わたしは任務でここにいるんですから、先輩が心配することなんてないのに……」

なぜか照れたように俯いて、雪菜は小声で独りごちた。彼女の謎めいた反応に、古城が少し戸惑っていると、

「――さっき教室を出たばかりですから、まだ間に合うと思います。急ぎましょう」

雪菜が勢いよくそう言って、古城の前に立って歩き出す。いきなり協力的になった雪菜に、古城はますます困惑し、

「姫柊……？」

「わ、わたしも同行します　先輩の監視のためですから」

「あ、ああ」

まあいいか、と思いながら古城は彼女のあとに続いた。

高等部の建物とは色違いの階段を、少し懐かしく思いながら屋上まで駆け上がる。

屋上の扉に鍵はかかっていなかった。正面に人の姿がないのを確認して、雪菜がそっと扉を押し開ける。妙に甘ったるく抑えた男子の声が聞こえてきたのは、そのときだ。

「――いいから大人しくしてろよ。ほら……騒ぐなって」

にやけているようなその口調に、古城の顔が青ざめる。断片的に聞こえてくる言葉の内容から判断する限り、嫌がる相手を強引になだめすかそうとしているとしか思えない

「な、なにをやってるんでしょうか……」

雪菜が不安そうに呟いた。古城は表情を凍りつかせたまま、

「この声、高清水ってやつなのか？」

「……はい。たぶん」

唇を噛んで雪菜が頷く。高清水と一緒にいる相手の言葉は聞こえない。ただ時折、悲鳴のようなか細い声が混じるだけだ。

ごくり、と古城は固唾を飲んで、扉の隙間に耳を押し当てる。

「――もう、駄目だってば。そんな強く抱かないで」

「ああ、ごめん……俺、こういうの慣れてないからさ」

「や、くすぐったいってば……！」

「あんまり大きな声を出すと、誰かに気づかれるぞ」

「わかってるけど……そんなふうに舐められたら……や、痛っ……」

今度こそはっきりと聞こえてきたのは、古城のよく知る少女の声だった。高清水と愉しげに会話しているのは、まぎれもなく凪沙である。

それを確信した瞬間、考えるよりも先に古城は扉を蹴り開けていた。

「せ、先輩!?」
「野郎おおおおっ！」
制止しようとする雪菜を引きずったまま、古城は屋上へと飛び出して荒々しく吼える。
驚愕に目を見開いて、凪沙と高清水が振り返るのが見えた
「離れろおまえら！　てめえ、自分が誰に手を出してるのかわかってんだろうな!?」
「え……!?　あ、あの……」
「先輩、ダメです！　落ち着いて！」
怒り狂った古城の姿に、高清水が怯えたように後ずさる　しがみつく雪菜を振りほどいて、古城は高清水めがけて拳を振り上げる
そんな古城の視界に飛び込んできたのは、茶色い毛並みの小動物だった。
高清水の腕に抱かれた子猫が、つぶらな瞳できょとんと古城を見返している。その瞳に射すくめられたように、古城はそこで動きを止める。
ミィ、と子猫が小さく鳴いた。
「あ、あれ!?」
その場にいる全員の注目を浴びたまま、古城はゆっくりと周囲を見回した
状況がまったく理解できなかった。
子猫を抱いて立ち尽くしている高清水。その子猫に、自分の指をしゃぶらせていた凪沙　古

城の背後で雪菜が目元を覆っている。ミィ、と再び子猫が鳴く。

そして、もう一人

凪沙の横に、見知らぬ女子生徒が立っていた。

古城は一瞬、彼女の姿に目を奪われた。

穏やかな微笑を浮かべたその少女は、この混沌とした状況にはあまりにも不似合いで、世界にまぎれこんだ異物のようにも思えたからだ。

雪原を思わせる銀色の髪と、氷河の輝きにも似た淡い碧眼。

その髪と瞳の色のせいなのか、どことなく高貴さを感じさせる美しい少女だった。

小柄な凪沙や雪菜とも、身長はそれほど変わらない。それでも背が高く見えるのは、日本人離れしたスタイルの良さが理由だろう。

彼女は半袖の制服の下に、ハイネックの長袖シャツを着ている。常夏の絃神島ではめずらしい着こなしだが、涼しげな彼女の容姿にはよく似合っていた。

「えっと……誰だ……？」

古城は思わず問いかける。ミィ、ともう一度、子猫が鳴く。

銀髪の少女は無言のまま、少し困ったように首を傾げてみせた。その直後、

「――古城君！」

威嚇する山猫のように髪を逆立てた凪沙が、古城に向かって突進してくる。

「な、風沙……おまえ、なんで、こんなところで猫なんか……」

「古城君こそ、中等部の校舎でなにやってるの!?　いきなり大声でわけのわかんないこと言って！　高清水くんに失礼だし、猫ちゃんが驚いてるじゃない。雪菜ちゃんにも迷惑かけて！」

ものすごい早口で妹にまくし立てられて、古城はだらだらと冷や汗を流す。

「いや……だって、告白の返事は……？」

「告白？　なんの話……？　あたしは高清水くんがこの子を引き取ってくれるっていうから、立ち会ってただけだよ」

風沙は、そう言って高清水が抱いていた子猫を指さした。子猫が、ミィ、と相づちのように鳴く。古城はいまだに混乱から抜け出せないまま、

「……だったら昨日の手紙はいったい……」

「手紙って？　ああ……もしかしてこれのこと？」

風沙が制服のポケットから引っ張り出したのは、なんの色気もないただのコピー用紙だった。そこに書かれていたのは愛の告白などとはほど遠い、単なる住所氏名の羅列である。

「じゅ、住所録……？」

「運動部員の名簿です。暁さん……妹さんが、俺のほかにも猫を引き取ってくれるやつを探してるって言ってたんで、なにか参考になるかと思って」

最初の驚きから立ち直った高清水が、体育会系らしい礼儀正しさで古城に説明する。そんな

高清水に、凪沙は恥ずかしそうに頭を下げて、
「ありがとう、高清水くん。ごめんね、うちのお兄ちゃんが変な勘違いして」
「それは気にしなくていいよ。じゃあ、俺はこれで」
爽やかな笑みを浮かべながら、高清水は段ボール箱に入れた子猫を連れて校舎に戻っていく。
古城は、そんな彼を見送りながら、
「あいつ、実はいいやつだったんだな」
素直に感心して、他人事のように呟いた。その途端、
「先輩……」「古城君……」
雪菜と凪沙が古城を見上げて、二人同時に溜息をつく。
それだけでは怒りが収まらなかったのか、凪沙はさらに古城に詰め寄ってきて、
「もう信じられない。ホントあり得ない。どうやったら捨て猫を引き取ってもらうって話から告白なんて発想が出てくるわけ!?　ていうか、もし本当に告白だったとして、なんで古城君がそれをのぞきにくるのよ!?」
「……ごめんなさい。わたしがついていながら」
雪菜ちゃんが謝ることはないよ。どう考えても古城君の勘違いが原因じゃん」
うなだれる雪菜を庇いつつ、凪沙は膨れっ面で古城を睨んだ。実際そのとおりなんだけどな、と古城も内心では認めつつ、

「たしかに勝手にのぞいてたのは悪かったけど、おまえも猫の里親を探してるなんて、ひと言も言ってなかっただろ！」

「べつに必要ないでしょ。古城君も雪菜ちゃんもあたしと同じマンションに住んでるんだから、ペットを飼えないのは最初からわかりきってるじゃない」

「う」

理路整然と凪沙に諭されて、古城はなにも言い返せなくなる

「……そう言えば、あの猫、どうしたんだ？　拾ってきたのか？」

「あたしじゃないよ。夏音ちゃんが保護して、面倒を見てたの」

「夏音ちゃん……というのは？」

聞き覚えのない名前を訝るように古城が訊く。と、それまで沈黙を続けていた銀髪の少女が、そっと古城の前に歩み出た。

「あ、はい。私でした。叶瀬夏音です」

柔らかな声でそう言って、彼女はふわりと笑みを浮かべた。慈母という言葉を連想させる、神々しくも優しげな表情だ。

「全部、わたしのせいですね。ごめんなさい、でした」

銀色の髪を揺らして、少女が深々と頭を下げる。

古城は、流れるような彼女の動きに見とれて言葉をなくした。

そんな古城の表情を、凪沙と雪菜がなぜか不機嫌そうに見つめていた。

3

「凪沙ちゃんのお兄さんなんですね、ご迷惑をおかけしました」
足元に置いてあったトートバッグを抱き上げながら、叶瀬夏音はそう言った
バッグの中身は、猫用のミルク缶やキャットフード、おもちゃなど。子猫一匹の世話を焼くには、ちょっと大げさすぎるほどの荷物である。
「いや、叶瀬さんが謝るようなことはなにもないと思うけど……」
古城がばつの悪い思いをしながらそう言うと、夏音は微笑んで首を振った。
「凪沙ちゃんとは去年まで一緒のクラスで、いつも助けてもらってました。私は人見知りだし、男子にも避けられてるから、今日も凪沙ちゃんがいなかったら、高清水くんにあの子を引き取ってもらうことはできなかったと思います」
本気でそう信じているらしい夏音の言葉を、古城は少し意外に思う。
近寄りがたい雰囲気はあるが、夏音は芸能人にも滅多にいないくらいの美少女だ。控え目な性格といい穏やかな物腰といい、男子に避けられる理由があるとは思えない。
しかし凪沙は、なに言ってるんだか、と呆れたように苦笑して、

「そんなこと全然ないから。みんな夏音ちゃんのことが好きすぎて、声がかけられないだけだから。〝中等部の聖女〟って呼ばれてるくらいだから」

「はあ……」

なんのことかよくわからない、というふうに目を瞬く夏音。

聖女というのは、なかなか上手い表現だと古城は思う。実際、夏音の雰囲気は、いつぞやのロタリンギアの殲教師なんかよりも、よっぽど聖職者っぽい。本職はシスターだと言われても納得してしまいそうだ。

「姫柊も叶瀬さんのことは知ってたのか？」

古城がこっそりと雪菜に訊いてみる。雪菜は古城の耳元で声を潜めて、

「いえ。でも噂はよく聞きます。すごく綺麗で目立ちますし、同級生の女子にも慕われてますし。叶瀬さんのクラスの男子は、自分から彼女に話しかけたりすると罰金刑だそうですよ」

「そうか。なんかわからんが、それはすごいな」

「はい。でも気軽に話しかけづらいという気持ちはわかりますね、綺麗すぎて」

「あんたがそれを言うなあんたが……！」

たまりかねたように口を挟んできたのは凪沙だった。

「言っとくけど今のは全部、雪菜ちゃんにも当て嵌まってるからね。うちのクラスの男子には、雪菜ちゃんとの接触距離に応じて、三秒ルール、五秒ルール、八秒ルール、二十四秒ルールが

設定されてるから。その時間を超えて会話したら厳罰だから。あと暁古城を呪う会も絶賛活動中だから、せいぜい気をつけてね、古城君！」

「なんで俺がおまえのクラスの男子に呪われなきゃならねーんだよ……」

古城が軽い頭痛を覚えながらぼやく。凪沙は、ふん、と拗ねたようにそっぽを向き、

「とにかく、あたしは高清水くんにもう一度きちんと謝っておくから。古城くんたちは代わりに夏音ちゃんを手伝ってあげてよ」

「あ、ああ。それくらいはべつにいいけど」

夏音が持っているバッグを警戒して、古城は頷く。たしかに彼女の細腕には、不釣り合いな大荷物だ。それを運ぶ手伝いをするのは、やぶさかではない。

「すみません、お兄さん……」

古城がバッグを受け取ると、夏音はそう言ってはにかむように微笑んだ。

高清水の誤解が解けた以上、中等部の校舎に残っている理由はない。帰り支度を済ませた雪菜と再び合流して、古城たちは下校することにした。しかし、途中で凪沙と別れたあたりから、古城は自分が妙に注目されてることに気づいて、ひどく落ち着かない気分になる。

夏音はたしかに目立つ容姿をしているが、容姿端麗さでは雪菜も劣らない。そんな後輩女子を二人も連れ歩いて、人目を惹かないわけがないのだった。おまけに、

「……妙な気配を感じます。二人とも、わたしから離れないでください」

古城に向けられた殺意に反応した雪菜が、そんなことを言いながら身体を寄せてくる。そのせいで、余計に人々の憎悪が古城に集中するという悪循環が生じていた

護送中の犯罪者にでもなった気分で、古城はそっとパーカーのフードで顔を隠す　どうにか無事に中等部の校舎を抜け出したときには、古城の背中は嫌な汗でじっとりと濡れていた

「すみませんでした。お兄さん……私のせいで」

自分の髪を指先で弄りながら、申し訳なさそうに夏音が言った　どうやら彼女は、自分が人より目立つのは、その髪のせいだけだと思っているらしい

「その髪って、やっぱり地毛だよな」

何気ない気持ちで古城が訊くと、夏音は少し寂しげに頷いた

「実の父親が外国人でした。私は日本で育ったので、ほとんど記憶はないんですけど」

「そうだったのか」

なにやら複雑な事情がありそうなことを察して、古城はそれ以上、なにも訊けなくなる

夏音が向かったのは駅ではなく、学校の裏手にある丘の上だった　緑の木々に覆われた小さな公園の奥。廃墟となった灰色の建物が見えてくる。

「……これって、教会か？」

建物の屋根に刻まれたレリーフを見上げて、古城は訊いた。

二匹の蛇が巻きついた〝伝令使の杖〟　西欧教会ではあまり見かけないシンボルだ

「私が幼いころにお世話になっていた修道院でした」
夏音は少し懐かしそうに、朽ち果てた中庭を見つめていた。そこには雑草に埋もれた花壇と、錆びた三輪車が取り残されている。
「叶瀬さんって、もしかして本当にシスターなのか？」
「いえ、違います　憧れでした……けど」
古城の疑問に、夏音は静かに首を振る。その言葉の続きを古城が訊き返す前に、夏音は建物の扉に手をかけた。ぎしぎしと蝶番を軋ませて、傷んだ木製の扉が開く。
「わっ……」
ボロボロになった建物の中をのぞきこみ、雪菜が可愛らしい歓声を洩らした
勢いよく振り返った彼女の瞳が、めずらしく年相応の無邪気な感情を露にして輝いている
……姫柊？」
「猫！　猫です！　猫ですよ、先輩！」
「あ、ああ。それは見ればわかるが……」
雪菜らしからぬテンションの高さに、古城は軽く気圧された。廃墟になった無人の修道院。薄暗いその建物の中に、金色に輝く無数の瞳が浮かび上がる
まだ幼い小さな猫が十数匹、まるで親鳥の帰りを待ちわびていた雛のように、古城たちのほうへと殺到してくる。その光景は、愛らしいというよりも恐怖を誘うものであったが

「ふわあ……可愛い……よしよし、よしよし……」

子猫たちを抱き上げて、雪菜が幸せそうに笑う。ああそういえば、と古城は彼女が猫のマスコットを集めていたことを思い出していた。高清水がいた中等部の屋上では平静を装っていた雪菜だが、本心ではあのときから猫を構いたくてうずうずしていたのかもしれない。

「えーと、これって、全部、きみが育ててるのか？」

足元にまとわりつく子猫の群れを見下ろして、古城は夏音に訊いた。

これだけの数の猫が暮らしているにしては、修道院の中には不快な臭いがこもっていない。誰かが足繁く通って、猫たちの世話や掃除をしているのに違いない。

夏音は、慣れた手つきでキャットフードの準備をしながら頷いた。

「みんな……捨てられた子たち、でした。引き取り手が見つかるまで、預かっているだけのつもりだったんですけど」

引き取り手を見つけるって……これだけの数はさすがに無理だろ……」

軽く唖然としながら、古城は言った。夏音も残念そうに目を伏せて、

「はい。私一人では無理でした。だから凪沙ちゃんや、ほかの人にも助けてもらってました」

「……凪沙が俺に手伝えと言ってたのは、このことか」

妹の真意をようやく理解して、古城はやれやれと肩をすくめた。

そんな古城を見上げて、夏音が遠慮がちに訊く。

「すみませんでした。迷惑でしたか？」
いや、と古城は笑いながら首を振った。
「さっきのことがあるから、頼まれたら嫌とは言えないんだけどさ　姫柊もこんなだし」
「よかった。少し悩んでたんです　この子たちの面倒をいつまで見られるか、自信がなくて」
淡い碧眼を細めながら、夏音は愛おしげに子猫たちを見つめて呟く。
まさに聖女という雰囲気の彼女の横顔を、古城は少し眩しげに眺めて、
「叶瀬さんは、きっといいシスターになれると思うよ」
正直な感想を口にした古城を、夏音が驚いたように見上げた。
その表情に一瞬だけ哀しげな翳がよぎって、
「ありがとうございます。その言葉だけで私には十分……でした」
夏音は柔らかく微笑んでそう言った。

4

降下を続けていたエレベーターが、やがて音もなく制止した。
階層表示は地下十六階　絃神島人工島の中枢、キーストーンゲート内にある人工島管理公社保安部である。

エレベーターの扉が開くのを待って、彼女は、薄暗い通路へと歩み出た。
フリルまみれのゴスロリ服に身を包んだ小柄な女性だ。
美女というよりも美少女、あるいは幼女という言葉の似合いそうな童顔である　そのくせ不思議な威厳に満ちた足取りで、彼女は通路の奥へと迷いなく進んでいく。
「ヘーイ、那月ちゃん、こっちこっち！」
誰かが妙に馴れ馴れしい口調で、そんな彼女の名前を呼んだ。彩海学園の英語教師にして国家攻魔官でもある〝空隙の魔女〟南宮那月が、ちっ、と不機嫌そうに舌打ちする。
「暁、古城といい、おまえといい……担任教師をちゃん付けで呼ぶなといつも言っているだろう」
そう言って彼女が睨みつけた先には、短髪をツンツンに逆立てた少年の姿があった　服装は、人工島管理公社調査部の制服である黒スーツ　ヘッドフォンを首にぶら下げたまま、彼はニヤリと不敵に笑う
「公社直々の呼び出しというからなにかと思えば……おまえか、矢瀬」
「すんませんね。理事会も人材不足なもんで」
矢瀬基樹は悪びれずにそう言って、那月を部屋の中へと案内した。
病院の手術室に似た部屋だった。高価な医療機器に囲まれたベッドの上に、まだ十代とおぼしき少女が眠っている。大きな傷を負っているらしく、彼女の全身は包帯まみれだった。
そして、そんな傷だらけの彼女の両手足は、なぜか分厚い金属製の器具で、がっちりと固定

されている。

それを無感動に見下ろして、那月は、ふん、と鼻を鳴らした

「　こいつが五人目か。昨夜は、ずいぶん派手にやらかしてくれたみたいだな」

「そっすね。半壊したビルが二棟。延焼が七棟　停電や断水、ガラスの破損などの被害報告は集計中……今回はまだマシなほうって話っすわ。付近に民家が少ない商業地区だったし」

矢瀬が皮肉っぽい表情で説明する

「昨日の深夜、絃神島西地区――アイランド・ウエストで事件があった。

高い戦闘力を持つ二体の未登録魔族が、市街地の上空で長時間にわたって交戦　その戦闘に巻きこまれて、周辺の建物に大きな被害を出したのだ。

この少女は、重傷を負った姿で捕獲された、その未登録魔族の片割れなのだった

「……こいつと戦っていた相手がいたと聞いたが？」

「そっちの正体はいまだ不明　依然、追跡も難航中っすね」

ふて腐れたような矢瀬の言葉を聞いて、那月は愉快そうに眉を上げた

「おまえでも追い切れなかったのか」

「あー、無理無理　相手が悪いですって」

そう言って矢瀬はガリガリと頭をかく。

矢瀬基樹は過適応体質　魔族ではなく、人間として生まれた異能者だ。一種の念動力で

拡張された聴覚によって、精密なレーダーのように半径数キロもの広範囲を監視するという特殊な能力を持っている。

だが、その能力にも欠点はある。矢瀬が張り巡らす繊細な音の結界は爆発的な大音響に弱く、大規模な戦闘の監視には向いていない。

そしてもうひとつの欠点は、音速を超えて飛び回る相手には無力、ということだった。

今回の監視対象は、戦闘終了後、矢瀬の能力でも捕捉できない超高速で戦場を離脱したのだ。もちろん並の魔族に真似できる芸当ではない。

「そこの小娘、未登録魔族だと報道されていたな」

「少なくとも絃神市の魔族登録データーベースには、該当する個体がないって話っす。まあ、その子はそもそも魔族じゃないんで、当然っちゃ当然っすけどね」

「……魔族じゃない？　おまえの同類か？」

那月がめずらしく驚きを表に出す。生身で何棟ものビルを破壊できるような存在は、魔族の中でもごく少数だ。ましてや普通の人間に可能な芸当とは到底思えない。

「いやそれが、若干の魔術的肉体改造の痕跡があるだけで、ほぼ通常の人間と考えて問題ない、っていうのが公社の見解なんすわ」

「ただの人間が魔族特区の上空を飛び回り、ビルを薙ぎ倒したというのか。笑えるな」

「まあ、まともな相手じゃないのは間違いないっすよ。笑えねェけど」

「そこの小娘の負傷の程度は？」
傷を負った少女に視線を戻して、那月が訊いた。
「とりあえず命には別状ないって話っす。内臓の欠損は、体細胞からクローン再生するんで」
「……内臓の欠損？」
「横隔膜と腎臓の周辺……いわゆる腹腔神経叢のあたりっすね」
「喰われたのか……」
那月が吐き捨てるように呟いた。
その直後、彼女の背後から無邪気な声が聞こえてくる。美声だが皮肉っぽく響く男の声だ。
「フム、なるほど　奪われたのは内臓そのものではなく、彼女の霊的中枢……いや、体そのものというわけか……なかなか興味深いねェ」
「貴様か、ディミトリエ・ヴァトラー……」
通路から顔を出した声の主を睨んで、那月が露骨に顔をしかめた。
「なぜ余所者の吸血鬼がここにいる？」
「つれないなァ　きみたちの国の組織に頼まれて、わざわざ見舞いに来たというのに」
余所者呼ばわりされた戦王領域の貴族は、嫌がる那月を眺めて愉快そうに笑った。
金髪碧眼の美しい男である。見た目の年齢は二十代の半ばほどだろうか。
しかし彼は貴族。破格の力を持った〝旧き世代〟の吸血鬼だ。第一真祖の血族として、欧

州〝戦王領域〟に自らの領土と、強大な軍事力を持っている。そして今はこの紘神市に特命全権大使として滞在しているはずだった。

「それはまたご苦労なことだな、蛇遣い。いつから獅子王機関の雌狐に飼い馴らされた？」

挑発的な口調で那月が言う。険悪な二人の雰囲気に、矢瀬は頭を抱えている

「ノーコメントと言っておこうか。なにしろ外交機密だからね」

「戦王領域の貴族が外交機密だと？　この事件、貴様らの真祖がらみか。それは面白いな」

「どうかな。あるいは、あの御方とも無関係じゃないかもしれないねェ」

「なに……？」

冗談めかしたヴァトラーの物言いに、那月がしばし絶句した。矢瀬は怪訝な表情で、那月の過敏な反応を眺める。ヴァトラーの発言が意味する内容を、彼は知らされていないのだ。

人形めいた美貌にうっすらと殺気を漂わせ、那月はヴァトラーを睨みつける

「蛇遣い……貴様、なにを知っている？」

「〝ランヴァルド〟という名前に聞き覚えはあるかい、〝空隙の魔女〟？」

「……北欧アルディギアの装甲飛行船か。聖環騎士団の旗艦だな」

「まだ公式には発表されていないが、昨夜から消息を絶っているそうだよ　位置情報が途絶えたのは、紘神島の西、百六十キロの地点だそうだ」

一見すると無関係にも思えるヴァトラーの情報に、那月は、表情を険しくした

「アルディギア王家が、この事件に噛んでいるというのか」
「証拠はなにもないけどね。タイミングが良すぎるとは思わないか？　まあ、いずれにせよ、ボクはしばらく傍観させてもらう　今のところ手を出す気はないから安心してくれ」
「戦闘狂の貴様が、どういう風の吹き回しだ？」
まったく信用していない目つきで、那月がヴァトラーを睨みつける
不老にして不死。それゆえに長い人生に退屈した〝旧き世代〟の吸血鬼にとって、強力な敵との戦闘は、最高の暇潰しであり、生き甲斐である。超高速で空中を飛び回り、ビルをも破壊する正体不明の怪物は、ヴァトラーにとって願ってもない遊び相手のはずだ。
しかし戦王領域の貴族は、笑の端を上げて優雅に微笑んだ。
「彼女たちは、キミたちの敵じゃない。このまま放置しておいたほうが、案外、面白いものが見られるかもしれないぜ」
「……この私に、貴様の言うことを信じろというのか？」
「いちおう忠告はしたサ。信用するかどうかは、キミの勝手だ」
ヴァトラーは無関心な口調でそう告げる。そして彼は不意に思い出したように、
「情報の見返りというわけじゃないが、キミにひとつ頼みがある」
「話を聞くだけは聞いてやる。なんだ？」
那月が素っ気なく訊き返す。ヴァトラーの碧眼が、一瞬だけ、本物の殺意で紅く染まった。

那月に対する警告のつもりなのだろう。噴き出した濃密な魔力の波動で、堅牢なキーストーンゲートの建物がギシギシと軋む。

「この事件に第四真祖を巻きこむな」

……暁古城を？　なぜだ？」

那月は意外そうに眉を寄せた。ヴァトラーが忌々しげに肩をすくめてみせる。

「古城では彼女に勝てないからさ　我が最愛の第四真祖には、まだ死なれては困るんだ」

5

翌日。金曜日の放課後だった。

愛嬌のある白黒まだらの子猫が、二匹まとめて段ボール箱の中で寝息を立てている。それをのぞきこんでいたのは、繊細な顔立ちの男子生徒、古城のクラスメイトの内田遼だ。

「悪いな。内田、助かった」

「いいよ。うちの家族はみんな動物好きだから」

そう言ってほがらかに笑う内田に、古城は子猫入り段ボール箱を手渡す。叶瀬夏音が修道院の跡地に保護していた、捨て猫たちの中の二匹である。昨晩から知り合いに片っ端から声をかけまくって、ようやく引き取り手を見つけることができたのだ。

子猫と戯れる内田を、うっとりと見つめているのは棚原夕歩。強気でずけずけと物を言う彼女はクラスの男子にわりと恐れられているのだが、今は別人のように可愛らしいオーラをまとっていた。彼女は内田にベタ惚れなのである。

「でも、なんか意外。暁が、中等部の聖女ちゃんと仲良しとは思わなかった」

その夕歩が不意に古城に話しかけてくる。

「叶瀬のこと、知ってるのか？」

「あの子、高等部の男子にも人気あるわよ　ハーフなんだっけ　あの見た目は反則よね」

「まあ、それはそう思う」

素直に認めて頷く古城。その夏音は、先輩である古城たちに気を遣って、少し離れた場所で待っていた。夕歩と目が合ったことに気づいて、銀髪を揺らして優雅に会釈する。

「でも……あたし、あの子のこと、苦手なんだよね」

「苦手？」

気の強い彼女らしからぬ夕歩の言葉に、古城が驚く。夕歩は少し照れたような口ぶりで、

「あ、べつに嫌いってことじゃないのよ。ただ、あの子が子どものころに暮らしてた修道院が、この学校の近くにあって、あたしも昔、何度か行事に参加したことがあるんだけど」

「ああ」

廃墟になった修道院の姿を思い出して、古城は頷く。そういえば、あの修道院が閉鎖された

理由をまだ古城は聞いていなかった。

「……事故があって、何人も死んだの……あの子はそこのたった一人の生き残り」

表情を暗く沈ませて、夕歩が呟く。彼女の言葉の中身を、古城はすぐには理解できなかった。

「詳しく教えてもらえなかったんだけど、けっこう悲惨な事故だったらしいの　あたしの友達もいなくなっちゃったし……彼女を見てるとそのことを思い出してしまうから、今でもちょっと苦手なのよね。あの子の責任じゃないのは、わかってるんだけど」

青ざめている古城を見て、夕歩は無理やりに微笑んだ。

「まあ、暁が気にするようなことじゃないから、今のは忘れて。それより、こないだの転校生ちゃんといい、聖女ちゃんといい、あんたは藍羽をあんまりいじめないであげてよね」

「……浅葱は関係ねーだろ。叶瀬には猫の里親探しの手伝いを頼まれただけだからな」

「はいはい」

ぞんざいな態度で古城の言い訳を聞き流す夕歩。なんとなく気まずい思いを引きずりながら、古城は、もう一度内田に礼を言って彼らと別れた。

「これでいちおう全員、引き取り手は見つかったんだっけか」

校庭樹の陰で待っていた夏音と合流して、古城が訊く。夏音は嬉しそうに頷いて、

「はい。今の子たちで最後でした。お兄さん、本当にありがとうございます」

「いや……俺が見つけてきた里親は、さっきのあいつらだけだけど……」

古城はそう言って苦笑する。当然ながら、十数匹もの猫の里親を一日や二日で見つけられるはずがない。夏音や凪沙が何日もかけて、苦労して探した成果がようやく出たのだ。

「でも、どうにか片付いてよかったな」

「そうですね。あとは、さっき拾ってきた一匹だけですから、私一人でも大丈夫です」

「……って、また拾ってきたのかよ!?」

夏音が抱いていた毛布の中に、眠っている子猫を見つけて古城はさすがに愕然とする。捨て猫一匹の面倒を見るだけでも大変なのに、こうも次から次へと世話していたら、夏音の負担は相当なはずだ。単に動物好きというだけでは説明がつかない、強烈な意思を感じてしまう。どうしてそこまで、と古城が思わず訊きかけたとき、

「――ほう、美味そうな子猫だな」

日傘をさした小柄な女性が、横合いからぬっと顔を出す。

「那月ちゃん？」

「担任教師をちゃん付けで呼ぶな」

脇腹に強烈な肘打ちを喰らって、古城が苦悶の声を洩らした。南宮那月は、そんな古城を涼しげな顔で見返して、

「知っていたか、暁古城。学校内への生き物の持ちこみは禁止だ。というわけで、その子猫は、私が没収する。ちょうど今夜は鍋の予定だったしな」

淡々と告げられる那月の言葉に、夏音が、ひうっ、と息を呑んだ。そんな彼女を見つめて、那月は舌なめずりするように笑う。

毛布をくるんだ子猫を抱いて、夏音は怯えたように後ずさり、

「　すみませんでした、お兄さん。私は逃げます」

「お、おう」

銀髪を揺らして駆け出す夏音を、古城は安堵の息を吐きながら見送った。

那月は心なしか傷ついたように口を尖らせて、

「ふん。冗談の通じないやつだ。なにも本気で逃げなくてもいいだろうに」

「あんたが言うと冗談に聞こえねーんだよ」

古城が疲れたように息を吐く。那月は心外そうに古城を睨みつけた。

「ところで今の小娘は誰だ？」

「自分の学校の生徒に向かって小娘はないだろ　中等部の二年生だよ。叶瀬夏音」

「なかなか気合いの入った髪だな　反抗期か？」

「いやいや、違うだろ　父親が外国人みたいなことを言ってたから、そのせいじゃないか？　親父さんの国籍とか、詳しいことは本人も知らないみたいだけど」

「そうか」

ふむ、と那月は、少し思案するような表情を浮かべたが、すぐに顔を上げて古城を見た。

「まあいい、暁古城。おまえ、今夜、私につき合え」
「……え!?　いやあの、それはいったいどういう意味で……？」
「なにを挙動不審ってる　私の副業を手伝えと言っているんだ」
「……もしかして攻魔官の？」
嫌そうな顔で訊き返す古城に、那月が冷たい視線を向けた。
「二、三日前に、西地区の市街地で戦闘があったことは知ってるな」
「……ああ。なんか、未登録魔族が暴れてたって話は、クラスのやつらに聞いたけど……」
古城は曖昧に頷いた。夜中の騒ぎで寝不足だと文句を言っていた浅葱のことを思い出す
「暴れてたのは未登録魔族じゃない。あまり大っぴらにはできない情報だがな」
「魔族じゃない……？　じゃあ、いったい誰が？」
「知らん。容疑者の片割れは確保したが、そいつの正体はまだ不明だ」
那月が乱暴な口調で言った。古城はひどく嫌な予感を覚えて、
「片割れってことは、もう一人はまだ逃走中ってことか」
「ああ。それに市街地での戦闘があったのは、昨夜が初めてというわけじゃない　規模こそ小さいが同様の騒ぎは、ここ二週間で五件確認されている」
「五件……!?」
マジか、と古城が顎を落とす　那月の話が事実なら、二日に一度くらいのハイペースで謎の

市街戦が起きていたことになる。サッカーのリーグ戦かよ、と古城は顔をしかめて、
「じゃあ、また今夜あたり似たような事件が起きるかもしれないわけか……」
「察しがいいな、暁古城」
フリルまみれの日傘を優美に傾けて、那月は満足そうに微笑んだ。
「というわけで、おまえには私の助手として犯人確保に協力してもらおう　いくら私でも、一人で複数の犯人を捕らえるのは難儀だからな」
「いやいやいやいや……！」
古城は必死で首を振る。
那月は、古城の正体を知る数少ない人人の一人である。未登録魔族の古城が普通の高校生をやっていられるのも、攻魔官である彼女が、裏から手を回してくれたおかげだ。
ただし、その代償として、那月は時折こうやって自分の副業の手伝いを要求してくることがある。そのたびに古城は毎回、死にそうな目に遭わされているのだった。
「事情はわかったけど、なんで俺が那月ちゃんの助手なんだよ？　ほかに誰かいないのか!?」
「アスタルテはまだ調整中だ。ガルドシュに撃たれた傷が治ったばかりだからな……しかし、おまえが協力を拒むというのなら、あいつに手伝ってもらうしかないが？」
那月は、彼女が保護観察を担当している、人工生命体の少女の名前を挙げる。まるで怪我人を人質に取るような那月の卑劣な交渉手口に、古城は戦慄せざるを得ない。

「それにディミトリエ・ヴァトラーに忠告されてな。おまえを今回の事件に巻きこむな、とな」
「なんだそれ!?　あいつの忠告、完全にスルーかよ!?」
「あの男が嫌がるようなことを、私がしないはずがないだろう」
那月は堂々と胸を張って情けないことを言う。
「今夜九時にテティスモール駅前で合流だ。遅刻するなよ。一秒でも遅れたら、おまえと藍羽が美術室で生着替えしている写真をクラス全員の携帯に送りつけるぞ」
――なんであんたがそんなもの持ってるんだよ!?」
那月のとんでもない宣告に、古城はたまらず悲鳴を上げた。
「担任だからな」
ふふん、と得意げに微笑む那月　どこまでが冗談でどこからが本気なのか、古城にはまったく判断がつかない　やはり底の知れない女だと思う
「……勘弁してくれ」
悠然と立ち去る那月の後ろ姿を見送って、古城は頼りなく呟いた
頭上には燃えるような深紅の夕焼け。紘神市〝魔族特区〟に夜が訪れようとしている

6

テティスモールは、商業地区である絃神島西地区のほぼ中枢。繁華街の象徴にもなっているショッピングビルである。

専門店や飲食店、映画館なども揃っている便利な場所だが、当然のように混雑がひどいので古城はあまり好きではない。ましてや週末、金曜日の夜ともなれば、駅前の人口密度は殺人的ですらある。そんな中、待ち合わせ場所に那月が現れたのは、約束の時間を二時間ほど過ぎた、午後十一時近くになってからのことだった。

「――遅ェよ！　ていうか、なんだよ、その恰好!?　攻魔官の仕事じゃなかったのかよ!?」

華やかな浴衣姿で歩いてきた那月を睨んで、古城は周囲の迷惑も顧みずに叫んだ。

しかし那月は表情も変えずに、

「騒ぐな、小僧。この近くの商店街で祭りをやっているのを見かけてな。アスタルテに夜店を堪能させてやろうと思ったのだ」

「それならそれで連絡くらいしろよ！」

「なにを怒っている？　おまえのぶんのタコ焼きも買ってあるぞ。ほら、喰え」

「……それはどうも」

那月にタコ焼きのパックを差し出されて、古城は憤然とそれを受け取った。
そんな古城の前に、どこか人工的な美貌の少女が進み出て、静かに頭を下げた
藍色の髪に、左右対称の人形めいた顔立ち。人工生命体のアスタルテだ。彼女も那月と同様の浴衣姿。淡いラベンダー色の生地が、彼女の髪によく映えている。
「合流時刻に一時間五十六分の遅延がありました。謝罪します、第四真祖」
「いや、おまえが謝る必要はないけどな……楽しかったか？」
「――肯定」
アスタルテが短く告げる。相変わらずの機械的な口調だが、いちおう喜んではいるらしい。
その間に那月は、古城の背後に迷惑そうに一瞥をくれて、
「どうしておまえがここにいるんだ、転校生」
「わたしは第四真祖の監視役ですから」
ギターケースを背負って立っていた制服姿の雪菜が、無感情な声で言い返した。
古城が那月の仕事につき合わされると知って、雪菜は、当然のように自分も行くと主張したのだ。意味不明の緊張感が漂う二人のやりとりを、古城は鬱々とした気分で眺める。
「まあいいか。人手は多くて困ることはないからな。せっかくだからおまえも浴衣を着るか？駅前でレンタルしていたぞ？」
「……いえ、結構です」

かすかな未練を感じさせるような短い沈黙を挟んで、雪菜はきっぱりと首を振った。

「それよりも、どうしてこんな物騒な任務に、曰く先輩みたいな危険人物を連れ出したりしたんですか、こんな街中で先輩の眷獣が暴走したら、いったいどんな大惨事になるか……」

「だからといって、こいつがなにも知らないまま戦闘に巻きこまれたらどうする気だ、剣巫。そっちのほうが危険だとは思わんか？」

「そ……それはそうかもしれませんけど……」

意外にもまともな那月の反論に、強気だった雪菜の勢いが削がれる。那月は、さらにたたみかけるように、

「危険物だからこそ目の届かない場所に遠ざけるよりも、手元に置いておくほうが安全だろう」

「うー……」

いきなりあっさりと論破されて、雪菜は悄然と肩を落とした。一人して危険人物呼ばわりされた古城も、不愉快な気分で唇を歪める。

那月は特に勝ち誇るでもなく、古城たちを引き連れてエレベーターへと乗りこんだ。夜店で買った林檎飴を舐めながら、思い出したように古城に訊いてくる。

「メールで送った資料は読んだか？」

「まあ、いちおう。〝仮面憑き〟だっけ？　そいつを捕まえればいいんだろ」

「正確には、〝仮面憑き〟を一体とも、だ」

答え合わせをする教師のような口調で、那月が勝手なことを言う。

〝仮面憑き〟とは、紘神市の上空で戦闘を繰り返す謎の怪物の通称だ。

過去の目撃例では〝仮面憑き〟たちは、常に二体ずつ出現し、どちらかが斃れるまで戦闘を続けたらしい。那月は当然、今夜も二体同時に現れる可能性が高いと考えているのだろう。

「捕まえろ、とか気楽に言われてもな、空を飛んでるやつらを相手にどうすれば――」

「気にすることはない。撃ち落とせ」

迷うことなく即答する那月。そんな無茶な、と古城はうめく。

「空に向かっておまえが眷獣をぶっ放すぶんには、市街地に影響が出ないからな」

「いや、それはそうかもしれないけど――」

「相手もそれなりの化け物だ。そう簡単にくたばりはしないから安心しろ。うっかり殺してしまっても、刑務所に差し入れくらいはしてやるからな」

「安心できねえよ！　なんだそれ!?　無罪にはならないのかよ!?」

あまりにも身勝手な那月の物言いに、古城は頭を抱えて叫んだ。

上昇を続けていたエレベーターが、最上階に到着した。そこでさらに作業用のエレベーターに乗り換えて、古城たちは屋上へと移動する。十階建てのティスモールは、このあたりではもっとも高い建物である。飛行能力を持つ〝仮面憑き〟を監視するには最適な場所だ。

「それはともかく、変ですね」

「ともかくじゃねーよ……なにもかもおかしいだろ」
「いえ、先輩の処遇ではなく、あの建物……」
雪菜が指さしたのは、交差点の向こうに見えるオフィスビルだった。
真新しい建物の上半分がごっそりとえぐられて、飛び散った瓦礫は今も路上に山積みになっている。限石でも直撃したかのような凄惨な光景だ。
「あんな巨大な爆発が起きていたのに、わたしは気づきませんでした。魔術や召喚術であれだけの破壊力を生み出したのなら、相当な魔力が放出されたはずですけど」
「獅子王機関の剣巫でも感知できなかった、ということか……やはりな」
那月が合妙に納得したような表情で呟いた。
「絃神島内に設置されている魔力検知器も、〝仮面憑き〟には反応しなかった。特区警備隊が異変に気づいたのは、ビルが倒壊して、民間警備会社が騒ぎ出したあとだ」
「どういうことだ……？」
「わからん。特殊な魔術か、物理攻撃か、考えられる可能性はいくつかあるがな」
そう言って那月は攻撃的な笑みを浮かべた。
「まあ、本人たちに訊けばすぐにわかることだ……殺すなよ、暁」
彼女が睨みつけていたのは、繁華街の外れに立つ巨大な電波塔の上空だった。
禍々しい光に包まれたなにかが、暗い夜空を舞っている。航空機などではあり得ない不規則

な動き。人型に近い奇怪な影が、激しい空中戦を演じているのだ。

「〝仮面憑き〟!?」

「思ったよりも早く現れたな。アスタルテ、花火の時間だ、と公社の連中に伝えろ」

「命令受諾」

那月の指示を受けたアスタルテが、浴衣の袖口から無線機らしきものを取り出して操作する。

古城はそれを怪訝な顔で眺め、

「那月ちゃん、花火ってなんだ？」

「今どきの若者は、打ち上げ花火も知らんのか」

愛用の扇子を広げながら、那月が呆れたように呟いた。その直後、古城たちの背後で、ドン、と爆音が鳴った。色とりどりの火花が、夜空に大輪の花模様を描く。

本物の打ち上げ花火。発射地点は、ちょうど〝仮面憑き〟の出現地点とは逆方向だ。

「これで庶民どもの目はあちらを向く。多少の爆発や騒ぎは誤魔化せるはずだ」

「なるほど……って、もしかしてこの時期に夜店なんかやってたのも、このためか……!?」

意外とも思える那月の用意周到さに、古城は感心するよりも正直呆れた。

たしかに打ち上げ花火の轟音や絢爛な輝きは、〝仮面憑き〟の存在を隠すには最適だろう。見当外れの方角で多少の爆発音や閃光が目撃されても、特に疑われることはないはずだ

しかし、この〝魔族特区〟で、これほど大がかりな偽装工作が必要になるということ自体、

今回の事件の重大さを証明しているとも受け取れる。

「花火に気を取られている庶民どもが、異変に気づく前に片をつける。跳ぶぞ」

「えっ？　跳ぶって――」

那月の唐突な呼びかけに、古城が、嫌な予感を覚えて振り返る。

その瞬間、古城は強烈な目眩に襲われた。少し遅れて、自由落下に似た不快感がこみ上げてくる。それらがようやく収まったとき、古城は自分が、見知らぬ高い塔の真上に放り出されていたことに気づいて愕然とした。

「　うおおおっ!?　なんだこれ!?　なんでこんなところに……!?」

危うく足を踏み外しかけ、古城は慌てて近くにあった鉄骨に捕まった。

赤と白に塗り分けられた電波塔の骨組み。戦闘中の〝仮面憑き〟たちの真下である、那月が得意とする空間転移の魔術で、無理やり連れてこられたのだ。

「先輩、上です！　気をつけて――！」

古城と一緒に連れてこられた雪菜が、頭上を見上げて鋭く叫ぶ。

その声につられて顔を上げた古城は、思いがけない至近距離で〝仮面憑き〟を目撃して、息を呑んだ。

二体の〝仮面憑き〟は、共に小柄な女性の姿をしていた。

だが彼女たちの背中には、血管まみれの醜悪な翼が何枚も不揃いに生えていた。

剝き出しの細い手脚には不気味な幾何学模様が浮かび上がり、無数の眼球を象った不気味な仮面が、彼女たちの頭部を覆っていた。

彼女たちが翼を広げるたびに、いびつに波打つ光の刃が撃ち放たれ、陽炎のように揺らめく障壁が、それらを次々に撃ち落とす。

撃墜された光の刃は、灼熱の炎に変わって、眼下の道路や建物を次々に焼き焦がした。

二体の戦闘が激化するにつれ、たちまち市街地の被害が広がっていく。

「……なるほど。たしかに違和感があるな。あのような魔術の術式、私は知らんぞ」

那月が、無責任な傍観者のような口調で淡々と呟く。

「はい。あれではまるで魔術というよりも……わたしたちが使う神憑りのような……」

那月の言葉に頷いて、雪菜は背中のギターケースから銀色の槍を取り出した。

槍の柄がスライドして長く伸び、格納されていた主刃と、左右の副刃が展開する。洗練された近代兵器のような、美しい全金属製の槍である。

「〝七式突撃降魔機槍〟か……ちょうどいい。手を貸せ、姫柊雪菜　まとめて仕留めるぞ」

那月が、雪菜の返事を待たずに無造作に右手を振った。

その瞬間、彼女の周囲の空間が、ゆらりと波紋のように揺れた　そしてなにもない虚空から、銀色の鎖が矢のように撃ち放たれ、空中を舞う〝仮面憑き〟一体を搦め捕る

直後、雪菜が鉄骨を蹴って宙に舞った。

古城はただ息を呑んでそれを見た。
雪菜はそのまま、空中に張り巡らされた鎖の上に着地。目の眩むような高さをものともせず、一気に鎖を駆け上がる。
「――〝雪霞狼〟！」
雪菜の詠唱する祝詞に呼応して、彼女の槍が眩くも神々しい光に包まれた。
〝雪霞狼〟の銘を与えられた彼女の槍――〝七式突撃降魔機槍〟は、獅子王機関の秘奥兵器だ。魔力を無効化し、あらゆる結界を斬り裂くという、対魔族戦闘の切り札である。その攻撃は、いかなる魔術障壁をもってしても防げない。
予期せぬ乱入者に戸惑う〝仮面憑き〟たち目がけて雪菜は槍を構え、光り輝くその刃を、いびつな翼に突き立てる――が、
「えっ!?」
激突の瞬間、伝わってくる異様な手応えに、雪菜は息を呑んだ。
〝仮面憑き〟を覆う禍々しい光が輝きを増す。その輝きが〝雪霞狼〟の直撃を阻む。
あらゆる結界を斬り裂くはずの刃が、見えない壁に阻まれて激しい火花を散らした。
不揃いな黒い翼を広げて、〝仮面憑き〟が咆吼する。彼女たちを縛っていた鎖が弾け飛び、その衝撃に巻きこまれて雪菜も吹き飛ばされる。
「――姫柊!?」

「〝戒めの鎖〟を断ち切っただと……!?」

古城と那月が、同時に叫んだ。

空中に投げ出された雪菜は槍を振り、その反動で自らの姿勢を操って、再び無事に電波塔に着地した。猛禽を思わせる美しくしなやかな体術だ。しかし彼女の表情は硬い。吸血鬼の真祖すら驚し得る必殺の〝七式突撃降魔機槍〟が、〝仮面憑き〟には通用しなかったのだ

「無事か、姫柊!?」

「私は大丈夫です。でも……」

駆け寄ってくる古城に頷き返して、雪菜は自由になった〝仮面憑き〟たちを見上げる

一体の〝仮面憑き〟は、古城たちの攻撃を警戒して、互いの戦闘を中断していた　一体は、上空へと逃れて古城たちを見下ろし、もう一体は、怒りを露に電波塔のほうへと突っ込んでくる　仮面の下の唇を張り裂けんばかりに開いて咆吼し、その全身が紅い光を放った

「いかん！」

〝仮面憑き〟の攻撃が、電波塔の根元部分を、ごっそりと半球状にえぐり取る　それを見た那月が表情を凍らせた。

自重を支えきれなくなった電波塔が傾き、折れた鉄骨をばらまきながら、ゆっくりと倒れていく。その先にあるのは渋滞中の幹線道路と、対岸のビル群　このままでは大惨事は免れない

「暁、やつらは任せる！　手加減するな、おまえが死ぬぞ！」

一方的にそう言い残し、那月は空間転移で姿を消した。

「え!?　ちょっ……」

古城は唖然として、彼女が残した空間の揺らぎを見つめた。任せると気軽に言われても、古城は、倒れていく鉄塔から投げ出されないようにしがみつくだけで精一杯だ。

だが、三十度ばかり傾いたところで鉄塔の落下は突然停まった。前触れもなく地面から伸びてきた無数の鎖が、鉄塔に絡みついて倒壊を防いだのだ。

ピサの斜塔を思わせる不安定な状態ながら、どうにかバランスを取って、鉄塔は空中に踏みとどまる。間違いなく那月の仕業だろう。しかし、さすがの彼女も、重量数百トンもの鉄塔を支えながら〝仮面憑き〟の相手をする余裕はないらしい。

猛り狂った〝仮面憑き〟が、再び電波塔へと急降下をかける。

それを見上げる古城の双眸が、恐怖と怒りに紅く染まった。

「ああ、くそっ！　疾く在れ、九番目の眷獣〝双角の深緋〟――！」

宿主の呼びかけに応じた古城の眷獣が、膨大な魔力を撒き散らしながら実体化する。

陽炎のように揺らめく猛々しい巨体。二本の角を持つ緋色の双角獣だ。

吸血鬼は、自らの血の中に眷属たる獣を従える。

それは破壊的な魔力の塊。この世に出現するだけで、宿主の寿命をたちまちのうちに喰らい尽くすという、異界からの召喚獣である。

その眷獣を使役できるのは、無限の〝負〟の生命力を持つ吸血鬼だけだからこそ吸血鬼は、最強の魔族として恐れられているのだ

もっとも力の弱い眷獣でも、その攻撃力は最新鋭の戦闘機を凌駕する、ましてや世界最強の吸血鬼　第四真祖の眷獣ともなれば、その暴威は天災と変わらない　一瞬でも制御を離れて暴走すれば、最悪、この紋神島を丸ごと焼き尽くして廃墟に変えるだろう

そんな凶悪な眷獣が、迫り来る〝仮面憑き〟を睨んで咆吼した

その咆吼は衝撃波の砲弾と化して、ほっそりとした〝仮面憑き〟を正面から襲った　撒き散らされた振動で、電波塔がビリビリと震え、周囲の建物のガラスが白くひび割れる　だが

「なに――!?」

大気を引き裂く双角獣の攻撃を正面から浴びても、〝仮面憑き〟は悠然と空を舞い続けていた。その肉体はまったくの無傷。古城の眷獣の攻撃は、〝仮面憑き〟に通用しなかったのだ。

「そんな……真祖の眷獣の攻撃に耐えるなんて……!?」

いびつな翼を広げる〝仮面憑き〟を呆然と見つめて、雪菜が声を震わせる。眷獣の破壊力を何度も間近で見ている彼女の動揺は、ある意味、古城以上なのかもしれない

己の咆吼に耐えた小癪な敵を睨んで、緋色の眷獣が直接攻撃を敢行する　しかし結果は同じだった。強烈な振動波をまとう双角獣の突撃を、〝仮面憑き〟は悠々とすり抜ける　雪菜の槍と同じように眷獣の魔力を無効化したわけでも、同等のパワーで威力を相殺したわけでもない

ただ微風のように受け流しただけ。

湖に投げこんだ小石が、水面に映る景色を傷つけられないのと同様に、古城の眷獣は〝仮面憑き〟に触れられない。その事実に古城は絶句する。そして、

「やばい　！」

〝仮面憑き〟が生み出した巨大な光剣に気づいて、古城は全身を凍らせた。こんな市街地のド真ん中であの攻撃が解き放たれたら、どれだけの犠牲者が出るか計り知れない

空中の敵を撃ち落とすべく、雪菜が〝雪霞狼〟を投擲する構えを取った。だが、彼女の槍が〝仮面憑き〟に通用しないことは証明済みだった。古城は咄嗟に一体目の眷獣を召喚しようと試みる。だが〝双角の深緋〟が触れることもできない相手に、もう一体の眷獣〝獅子の黄金〟が果たして通用するか　!?

絶望の予感を覚えながら、古城は頭上へと右腕を掲げた　その直後のことだった。

「なっ!?」

上空から飛来した閃光が、光剣を構える〝仮面憑き〟を貫いた。

その閃光の正体は、いびつな翼を持つ小柄な影　上空から戦闘を見守っていた、もう一体の〝仮面憑き〟である。

背後の死角からの不意討ちを喰らって、一体目の〝仮面憑き〟が苦悶の絶叫を上げた。

閃光に貫かれたまま、彼女は電波塔の中腹に激突。鮮血を撒き散らして、のたうち回る

第二の〝仮面憑き〟が、その上にのしかかり、鉤爪の生えた腕で、負傷した同類の身体を容赦なくえぐった。肋骨をへし折り、剝き出しの肌を裂き、いびつな翼を引きちぎる。

一体目の〝仮面憑き〟も激しい抵抗を続けるが、勝敗は最初の一撃でほぼ決していた。同類に浅い手傷を負わせただけで、重傷を負った〝仮面憑き〟はついに動きを止める。

「俺たちを庇った……のか……？」

返り血にまみれた〝仮面憑き〟の横顔を見つめて、古城は呟いた。

慎重に戦況を傍観していたはずの彼女の攻撃タイミングは、単なる奇襲というだけでは説明がつかない。明らかに古城たちの窮地を救うのが目的だったと感じられた。

油断なく槍を握ったままの雪菜も、かすかな戸惑いの表情を浮かべている。

そんな古城たちの目の前で、〝仮面憑き〟の頭部を覆っていた仮面が外れた。同類の攻撃を受けて、金属製の仮面に亀裂が入っていたのだ。

素肌に浮かび上がる電子回路のような紋様が、彼女自身の素顔を照らす。

「……馬鹿な！　あいつ……あの顔!?」

「嘘……」

〝仮面憑き〟と呼ばれていた少女の素顔を目にした瞬間、古城と雪菜は言葉を失った。

いまだ幼さを残したその美貌を、古城たちは知っていた。

雪原を思わせる銀色の髪と、氷河の輝きにも似た淡い碧眼。

いびつな翼を背負い、素肌に奇怪な紋様をまとってそこにいた少女は、叶瀬夏音だった。
いつも穏やかな笑みをたたえていた、動物好きな女子中学生。そんな彼女が全身を返り血に濡らして、同類である〝仮面憑き〟を見下ろしている。
「……やめろ、叶瀬……！」
彼女がやろうとしていることに気づいて、古城はかすれた声を洩らした。
その美しい顔立ちを歪めて、夏音が大きく口を開く。彼女の口腔に密生していたのは、ホオジロザメのような無数の牙だった。電波塔の上に倒れた同類の、剝き出しの白い喉に、夏音はその牙を突き立てて――
「叶瀬――――っ！」
絶叫する古城たちの眼前で、凄まじい鮮血が噴き出した。
喉を裂かれた〝仮面憑き〟が、傷ついた身体を激しく痙攣させた。
淡い碧眼から涙を流しながら、夏音は噛みちぎった肉片を咀嚼する。
そのとき古城は、ようやくこの戦闘の意味を理解した。彼女たちは互いに互いを喰らうために、同類同士で戦っていた。夏音は同類の〝仮面憑き〟を喰ったのだ。
やがて目的を果たした夏音は、再び翼を広げて空へと舞った。
禍々しい光に包まれた彼女の姿は、たちまち夜空にまぎれて見えなくなる。
古城たちは為すすべもなくそれを呆然と見送った。

あとに残されたのは、壮絶な破壊の痕跡と、重傷を負った〝仮面憑き〟の少女だけ――
月のない夜の市街地を、血生臭い風が吹き抜けていく。

第二章

搭乗、のち窮状

The Island of Lo[illegible]

1

翌日。土曜日――

睡もせずに朝を迎えた古城は、雪菜と二人、絃神島北地区の駅でモノレールを降りた。魔族特区〝絃神市は学究都市だ。製薬・精密機械・ハイテク素材産業などの大企業、あるいは有名大学の研究機関が、この島にはひしめき合っている。

中でも特に大規模な研究施設の集積地として知られているのが、この北地区第二層の研究所街だった。人工島らしさを色濃く残した、未来的な景色の街である。

「メイガスクラフト？」

駅前に設置された案内板を見上げて、古城が雪菜に訊き返す。

雪菜は手書きのメモを広げて確認しながら、

「はい。凪沙ちゃんに教えてもらった叶瀬さんの住所は、メイガスクラフト社の社宅でした」

……たしか掃除用ロボットなんかの会社だっけか」

うろ覚えの記憶を辿りつつ、古城は呟いた。ビルの清掃現場などで見かける床磨き機や、家庭用の自動掃除機のロゴが、たしかそんな企業名だったはずである。

「そうですね、主に産業用の機械人形の製造で知られている企業です。研究施設が絃神市内に

あって、そこに叶瀬さんの現在のお父さんが勤めているとか」
「……現在の父親って……そうか、叶瀬は修道院に住んでたって言ってたな」
「はい。修道院が閉鎖されたあと、叶瀬さんは彼に引き取られたと聞いてます」
そう言って雪菜は、少し困ったように目を伏せた　孤児として獅子王機関に育てられた雪菜にとって、夏音の境遇は、同情というよりも共感の対象なのだろう
古城は渋い表情になって頭を掻き、
「普通に考えたらいい話なんだろうけど……昨日のアレを見たあとだと、ちょっとな……」
「同感です。少し引っかかりますね」
雪菜が生真面目な態度で頷いた　そして彼女は、ふと心配そうに顔を上げ、
「叶瀬さんのこと……南宮先生には？」
「まだ話してない。ていうか、言えねーだろ　〝仮面憑き〟の正体が叶瀬かも知れないとか」
せめてもう少し情報を集めてからでないと」
古城は苦悩に顔を歪めて息を吐く。
もちろん古城も、自分の判断が絶対に正しいとは思っていない　これ以上の被害を防ぐためには、那月に任せてしまうべきなのかもしれない　しかし古城は特区警備隊の隊員ではなく、ただの学生だ。なんの事情も知らぬまま、知り合いを管理公社に引き渡す気にはなれなかった。せめてその前に一度だけでも、夏音と話がしたいと思う。

意外にも智菜はそんな古城を責めようとせず、仕方ないですね、と静かに呟いただけだった。

「社宅って……これか？」

「住所ではこの建物のはずですけど」

やがて目的の住所に辿り着いた古城たちは、しばらくの間、その場に無言で立ち尽くす。

鏡面加工されたガラスで壁全体を覆った、攻撃的な佇まいの建物だった。生活感を削ぎ落としたような、冷たく殺風景なオフィスビルである。ここが本当に夏音の自宅だというのなら、社宅ではなく企業の研究所の中に住み込んでいる、という形なのだろう。

それが悪いということではないが、夏音のイメージにそぐわないのも事実だった　少なくともここでは、猫は育てられそうにない。

「――いらっしゃいませ」

古城たちが玄関をくぐると、受付にいた若い女が声をかけてくる。

「あ……すみません。こちらに住んでる、叶瀬夏音さんに会いたいんですが」

古城がぎこちない愛想笑いを浮かべて用件を告げた。

受付係は、無感動な瞳で古城を見上げる。そこで古城は彼女が人間ではないことに気づいた。

彼女はロボット　人間を模して造られた機械人形だ。

「二〇四号室の叶瀬夏音は、外出中です」

手元の端末を操作するふりをしながら、受付係が淡々と答える。

「いつごろ戻るか、わかりませんか？」
「わかりかねます」
礼儀正しくも冷淡な受付係の対応に、古城は言葉にならない不快感を覚える。
同じように人の手で造られた存在でありながら、彼女はアスタルテとはまったく異質だった。アスタルテは人工的に造られた人間だが、この受付係は人間のふりをしているだけの人工物だ。自らの意思を持っていない　それなのに人間そっくりに振る舞う彼女を、古城はひどく不気味に感じる。その冷ややかな違和感は、このメイガスクラフト社の建物に漂っている空気によく似ていた。
「叶瀬賢生氏は、ご在宅ですか？」
沈黙する古城に代わって口を開いたのは、雪菜だった。叶瀬賢生という人物が、おそらく夏音の保護者なのだろう。
「失礼ですが、お客様」
「獅子王機関の姫柊です」
受付係の質問に、雪菜が自分の所属組織名を告げる。そのことに古城は少し驚いた。
本来の任務とは無関係なこの状況で、獅子王機関の名前を出すのは、生真面目な雪菜らしからぬ行動に思えたのだ　そして、それに対する受付係の回答は、古城たちの予想とは少し違ったものだった。

「承っております。あちらで少々お待ちください」

そう言って受付係は、ロビー中央にある来客用のソファを指さした

「承ってるってどういうことだ？」

「わかりませんけど、好都合でしたね」

古城と雪菜は軽く困惑しながらも、指示されたとおりに座って待つことにする

高価そうなソファの座り心地は抜群だったが、広大なロビーのド真ん中にぽつりと置かれているせいで落ち着かない。まるで見世物になった気分だ。

そのまま十五分ほど待たされて古城が退屈を覚え始めたころ、ロビー奥のエレベーターから誰かが降りてくるのが見えた。ワインレッドのスーツに身を包んだ、外国人の女だ

華やかな金髪の女性である。ハイヒール込みなら、おそらく古城よりも背が高い　それに見合うだけの見事なスタイルを持つ、肉感的な美女だった。タイトスカートに浮かび上がる脚のラインが艶めかしい。

「あれが叶瀬の親父さん……か？　そんなわけねーか」

訝しげに目を細めながら古城が呟いた

「登録魔族ですね」

古城のボケを冷たく聞き流して、雪菜が指摘する。

赤いスーツの女の左腕には、幅五センチほどの金属製の腕輪が装着されていた。人工島管

理公社から支給される魔族登録証である。

その腕輪は魔族の肉体を監視し、特殊能力の発動を制限するが、それと引き替えに彼ら魔族に紋神市の市民権を貸与する。魔族登録証をつけている限り、彼らは普通の人間と同様に、教育を受け、あるいは就労する権利が与えられるのだ。

だが、〝魔族特区〟で暮らす古城たちにとって、登録証も、それをつけている魔族も特にめずらしいものではない。それよりも古城の目を惹きつけたのは、その女の肉体の存在感そのものだった。

「なんというか、ゴージャスな人だな」

スーツの襟を突き上げるような彼女の胸元を見つめて、古城が無意識に感想を洩らす。そんな古城を横目で睨んで、雪菜が不機嫌そうに溜息をついた。

「失礼ですよ、先輩……というよりも、そのいやらしい目つきがすでに犯罪です」

そこまで言われるほどか、と古城が軽くショックを受けている間に、赤いスーツの女は古城たちの前で足を止めた　見る者を蕩かすような、蠱惑的な表情を浮かべて笑う。

「ごめんなさい　お待たせしてしまったかしら」

「いえ……こちらこそ、突然すみません」

凛然と立ち上がって、雪菜が答えた。獅子王機関の肩書きを名乗ってしまった以上、弱みをみせるわけにはいかない、と判断したのかもしれない。二十センチ近い相手との身長差にも、

気後れしている様子はなかった。

そんな雪菜を見返して、赤いスーツの女は、少し驚いたように目を瞠った。

「あなたたちは、昨日の……」

「え？」

「いえ、ごめんなさい。獅子王機関の攻魔師が、こんなに若い方々だとは思わなかったので」

何事もなかったかのように首を振り、女は事務的な口調で続けた。

「あらためまして、開発部のベアトリス・バスラーです。叶瀬賢生の……そうですね、秘書のような仕事をしています。本日は、叶瀬にどの様なご用件で？」

「申し訳ありませんが、今は言えません。ご本人と直接お話がしたいので」

雪菜が硬い声でそう告げた。ベアトリスと名乗った女は、気分を害した様子もなく頷いて、

「わかりました。でも、困りましたわね。本日、叶瀬は不在なので」

「不在？」

「ええ。叶瀬は現在、島外におりますの。弊社は〝魔族特区〟の管理区域に、独自の研究施設を持ってますから、そちらに」

「絃神島の外に？　もしかして叶瀬さん……娘さんも一緒、ですか？」

「はい。そのように聞いておりますわ」

ベアトリスは愛想よく微笑んで首肯した。

海洋を流れる龍脈の上に浮かぶ紘神島は、魔術的には極めて優れた地形だ。だが、人工島ゆえの限界も併せ持つ。波や潮流の影響を完全に遮断することはできないし、大地に直接干渉しなければならない種類の魔術はいっさい使えない。

そのような欠点を補うため、〝魔族特区〟に本拠を置く企業は、併呈諸島にあるいくつかの無人島を、〝管理区域〟として借用することが認められていた。叶瀬賢生がいるという施設も、そのような無人島のどこかにあるのだろう

「二人が紘神島に、いつ戻ってくるかわかりますか？」

古城が緊張混じりの声で訊く。ベアトリスは残念そうに首を振り、

「未定です。叶瀬が現在関わっているプロジェクトの詳細については、私どもにも知らされておりませんので――」

「そう……ですか」

落胆する古城を見て、彼女は愉しそうに笑って言った。

「ですから、もしお急ぎのご用件でしたら、研究施設を直接訪ねていただいたほうが早いかと思いますわ」

「……そんなことができるんですか？」

ぽかんと目を丸くして古城が訊き返す。

「ええ、もちろん。一日に二往復、連絡用の軽飛行機を飛ばしてますから、そちらに同乗して

いただければ。今からなら、まだ午前の便に間に合うと思いますわ」
「それ……手配してもらえますか？」
「かしこまりましたわ。では、こちらへ」
古城たちを手招きして、ベアトリスが歩き出す。彼女を追いかけて古城も慌てて立ち上がり、そのとき雪菜がなぜか目を伏せたままぽつりと独りごちた。
「飛行機……」
「姫柊？」
怪訝な顔で古城が振り返る。
「いえ。なんでもありません」
雪菜はぎゅっと拳を握りしめて首を振った。その唇が、かすかに青ざめて震えている。

2

太平洋の ド真ん中に浮かぶ紋神島の住人にとって、飛行機は身近な交通手段だ。そのため紋神市内には、大小合わせて六カ所もの空港が設置されている。
とはいえ大型機がまともに発着できるのは中央空港一カ所だけ。残りの五カ所は、いずれも最低限の設備しか持たない民間飛行場である。滑走路の長さは八百メートル足らず。着陸誘導

装置どころか夜間照明すら存在しないという、実にこざっぱりとしたシンプルな施設だ。
古城たちが連れて行かれた北地区産業飛行場も、そんな小規模飛行場のひとつだった。
飛行場の敷地内には、管制塔の小さなビルが建っているだけ　滑走路の上には、薄汚れた四人乗りの軽飛行機が、ぽつんと取り残されたように停まっていた。
おそろしく旧式のプロペラ機である。どうやらそれが、メイガスクラフト社の社用機らしい。
「やれやれ、あのアマ。わざわざ他人を呼び戻しておいてなにかと思えば、修学旅行の引率の真似事をやれってのかよ、この俺に」
プロペラ機の横で古城たちを待っていたのは、革ジャン姿の長髪の男だ　かなりの長身だが、痩せぎすで、それなりにイケメンだが、性格的にだらしなさそうな印象を受ける　全体的に残念な雰囲気を漂わせた男だった
男は、滑走路を歩いてきた古城たちに軽く手を振って、
「まあいいか……ようこそ、お客様方　ロウ・キリシマだ、ベアトリスの使いっ走りみたいなもんだが、まあ、よろしくな」
「あー、どうも　こちらこそ」
差し出された手を握り返した古城と、雪菜が背負っているギターケースを交互に眺めて、キリシマはニヤリと笑ってみせる。
「ふん、なるほど。ただの学生ってわけでもなさそうだが……まあ、こんな魔族特区に住んで

りゃ、いろいろあるわな」

「はは……」

曖昧に笑って誤魔化しながら、古城は、キリシマの手首に嵌められた魔族登録証に目を留めた。ベアトリスと同様に彼も魔族。おそらくは上種　獣人だ。

「じゃあ、そろそろ離陸の準備を頼む」

古城たちが機内に乗りこむのを待って、キリシマは操縦席にいるパイロットに声をかけた。それから後部座席に座った古城に、ビニール張りの紙袋を手渡してくる。

「あとこれ、ゲロ袋な」

「え？」

どうして離陸する前からこんなものを、と古城は一瞬困惑したが、隣にいる雪菜の顔を見てすぐに納得した。雪菜はひどく思い詰めた表情で、祈るように両手を握り合わせている。いつもの凛々しい雰囲気が、まるで嘘のような狼狽ぶりである。ロタリンギアの殲教師や戦王領域の貴族と対峙したときでさえ、ここまで取り乱したことはなかったはずだ。

「だ、大丈夫か？　姫柊？」

思わず不安になって古城が訊くが、雪菜は気丈に顔を上げて答えた。

「もちろんです。まったくなんの問題もありません」

「いやでも、なんだか紙みたいな顔色になってるぞ……」

「気のせいです」
きっぱりと答える彼女の声が弱々しい　生身で平然と綱渡りのような空中戦を演じる彼女に限って、まさかあり得ないだろうと古城は思いつつ、
「……もしかして飛行機が恐いのか？」
「そんなことはありません！　わ、わたしは獅子王機関の剣巫ですから」
幼稚園児でももう少しマシな嘘をつくだろう、と思える雪菜の稚拙な言い訳に、古城は洩らしかけた苦笑をかみ殺す。雪菜の意外な弱点は可愛らしかったが、それを必死で隠そうとする彼女を、馬鹿にする気にはなれなかった。
選択の余地なく、獅子王機関の剣巫として生きることを強要された雪菜には、人前で弱みを見せることは許されなかった　それは彼女の居場所そのものを失う行為だからだ　だから雪菜は幼いころから、常にこんなふうに無理して気丈に振る舞い続けてきたのだろう
信頼する仲間や友人たちの前でも、弱音を吐くことが許されない　それと同じ種類の孤独を、かつて古城は知っていた　それは彼がバスケットコートで抱いた感情とおそらく同じものだ
そして古城は、その孤独に疲れてバスケを捨てた。そんな人間に、雪菜を笑う資格があるはずもない。
「そういや凪沙も飛行機が苦手だったな……まあ、あいつの場合は、乗り物系全般か苦手なんだけど。すぐ酔うし」

「わたしはべつに飛行機が苦手なわけではないですってば……」

何気ない古城の呟きに、雪菜が脣を尖らせて抗議する

彼らを乗せた飛行機が、ちょうど離陸のために滑走路を加速し始めたところだった。勢いを増すエンジン音と機体の揺れに、雪菜は完全に硬直している。

もはや呆然自失の雪菜を見かねて、古城は黙って彼女の震える手をつかみ、

「……せ、先輩？」

「ああ、悪い。こういうときは手を握ってたほうが安心するかと思って、嫌だったか？」

「そんなことは言ってません――！」

古城の手をギチギチに握り返しながら、雪菜が焦ったような口調で言った　窓の外を眺めて、古城はやれやれと息を吐く。

すでに飛行機は絃神島を離れ、周囲は見渡す限りの青い海だった。太陽の位置でかろうじて方角はわかるが、自分たちがどこにいるのか、もはやさっぱり見当もつかない。いちおう飛行そのものは順調らしいが、旧式プロペラ機の機体の薄っぺらさは予想以上で、無事に帰れるのかと古城は今さら心配になる。雪菜の不安が伝染ったのかもしれない

「叶瀬の親父さんの研究内容……やっぱり〝仮面憑き〟と関係あんのかな……」

自分自身の気をまぎらわすために、古城は独り言のように呟いた。この騒々しい機内では、前の席にいるキリシマに、古城たちの会話が聞こえる心配はなさそうだ

「はい……たぶん間違いなく」

雪菜が重苦しい表情で答える

それは当然の結論だった　怪物化した夏音の全身に、ぴっしりと浮かび上がっていた光の紋様。あれが、夏音の肉体を変貌させるための術式だという可能性は極めて高い

そんな高度な魔術儀式を操る知識を持ち、実際にその儀式を夏音に施すことができる人物。大企業の魔導技師であり、夏音の養父でもある叶瀬賢生は、文句なくその条件に合致する

自分の娘をあんな化け物に改造して、仲間同士で殺し合わせてたってのか……

乱暴に舌打ちしながら、古城がうめいた。しかし雪菜は、さらに悲痛な表情で首を振り、

「たぶん、それは順序が逆です」

「え？」

「叶瀬賢生は自分の娘を改造したのではなくて……」

「改造するために叶瀬を養女にした……ってことか……！」

あまりにも残酷なその想像が、古城の視界を怒りで塗り潰す

孤独だった少女が、ようやく手に入れたはずの家族が、自分をただの実験材料としか見ていなかったと知ってしまったら——

そのときの夏音の絶望を、古城はもはや想像することもできない

そして雪菜は、自嘲するような弱々しい笑顔でそっと目を伏せた

「叶瀬さんとわたしは、似てるのかもしれません　だから……」

言葉少なな雪菜が洩らした呟きで、古城はようやく彼女の本心に気づく。

剣巫として育てられた雪菜の境遇は、たしかに今の夏音に重なる。雪菜とて、一歩間違えば夏音のような魔術の実験台として使われていたかもしれないのだ。だから雪菜はメイガスクラフト社で、獅子王機関の名前を出してまで叶瀬賢生に会おうとした。夏音を救うために、彼女なりに必死だったのだ。

「昨日の夜……叶瀬は俺たちを助けてくれたよな……」

電波塔の上で味わった死闘の記憶を呼び起こしながら、古城はぽそりと確認する。雪菜がハッと顔を上げ、古城の手を握る指に力を入れる。

「はい」

力強く頷く雪菜の瞳が、だから今度は自分が彼女を救いたいのだ、と訴えていた。古城にとってもそれは同じだ。結局のところ、古城が夏音を助ける理由は、それだけで十分なのだった。

しかし、そんな古城たちの決意を嘲笑うかのように、彼らを乗せた軽飛行機が激しく揺れながら降下を始める。

「よお、バカップル。仲良くお話ししてるところに悪いけど、そろそろ着くぜ」

そう言ってキリシマが指さした海面に、小さな島が浮かんでいた。

中心部を緑の森に覆われた、半月形の島である。直径はせいぜい二キロ足らず。半日もあれ

ば島内を一巡りできそうだ。上空からでは民家の姿は見当たらない　完璧な無人島である。
「あの島にメイガスクラフトの研究施設が？」
戸惑う古城の問いかけに、キリシマはやる気なく頷いた
「もともとは名も無い無人島だったそうだが、俺たちは勝手に金魚鉢と呼んでる」
「金魚鉢？」
どういう意味だ、と古城が首を傾げたとき、飛行機が大きく旋回を始めた　着陸態勢に入ったのだ。エンジンが騒々しく唸りを上げ、機体の揺れが激しさを増す。
「滑走路周りが殺風景なのは我慢してくれ。予算がなくてな」
「……滑走路って、もしかしてあのなんもない野原のことか？」
「喋るなよ。舌ァ噛むぜ」
「ちょっ……マジで!?」
旧式プロペラ機が突っ込んでいく先には、あちこち土が露出した草原だけが広がっている
小学校の校庭に毛が生えた程度の広さである、舗装はおろか、標識すら見当たらない　とても滑走路などと呼べる代物ではなかった。
雪菜がたまらず古城にしがみついてくるが、そのことに照れる余裕もない
ほとんど不時着のような勢いで、飛行機は乱暴に着地した。荒れた路面に何度も跳ねながら、ゆっくりと速度を落としていき、かろうじて崖っぷちで停止する。

キリシマは慣れた手つきでシートベルトを外すと、立て付けの悪いドアを開け、
「到着だ。さっさと降りな、バカップル。あとの予定がつかえてるんだからよ」
抱き合う古城たちを眺めて、呆れ顔でそう告げる
「だから、カップルじゃねえっての」
反論する古城の声にも力はない。ふらつく雪菜の手を引きながら、古城はもたもたと飛行機を降りる。久しぶりに触れる硬い地面の感触が、異様なほどに頼もしく思えた。
「こんなところに本当に叶瀬たちがいるのか？」
なにもない無人島の風景を眺めて、古城が訊いた。キリシマは意味ありげにほくそ笑み、
「さあな。そのうち会えるんじゃねえか……それまで無事に生きてられたらの話だが」
「……キリシマ？」
古城たちが飛行機から離れたのを確認して、キリシマが機体のドアを閉めた。再び飛行機のエンジンが勢いよく回り出し、小さな機体がゆっくりと走り出す
「悪いな、バカップル。ま、恨むなら、ベアトリスのやつを恨んでくれ」
窓越しに手を振って、キリシマがそう言い残す。その言葉の意味を理解して、古城は愕然と表情を凍らせた。加速する飛行機を追って古城は慌てて走り出し、
「ちょ……待てコラ、オッサン！」
「誰がオッサンだ、クソガキ！　俺はまだ二十八――――！」

飛行機がふわりと離陸して、キリシマの怒鳴り声が小さくなっていく
青空に吸い込まれるように遠くなっていく小さな機体を、古城は呆然と見送った
「……勘弁してくれ」
南国の強い陽射しを反射して、海が青く輝いていた

3

古城が放心状態から立ち直ったのは、それから十五分ばかりが経ってからのことだった
この絶望的な状況下では、それでもまだ早いほうだといっていいだろう
わずかな期待をこめて見守っていても、水平線の向こう側に消えた飛行機が再び戻ってくることはなく、鳥たちの鳴き声が無情に響くだけ。古城たちは完全に、このちっぽけな無人島に取り残されていた。ベアトリス・バスラーに騙されたのだ
「えーと……大丈夫か、姫柊」
岸壁に呆然と立ち尽くす雪菜に近づいて、古城はおそるおそる呼びかけた
沈痛な面持ちで振り返り、雪菜は悄然と頭を下げた。高い霊視能力を誇る巫女でありながら、ベアトリスたちの奸計を見抜けなかったことに責任を感じているのだろう
「すみません、先輩　わたしの失策です」

「べつに姫柊が謝ることじゃないだろ。騙されたのは俺も同じだし」
「いえ、油断してしまいました。メイガスクラフト社が〝仮面憑き〟の事件に関わってる可能性は、当然予想できたのに」
「まあ、油断っつーか……あんだけ飛行機にビビってたらなあ」
「そんなことはありませんから！　油断しただけですから！」
どうしてもそこは譲れないのか、この期に及んでも虚勢を張り続ける雪菜。まあなんでもいいけど、と古城はパーカーのフードで強い陽射しを遮り、
「結局、あのベアトリスって女も叶瀬の親父とグルだったってわけか……クソ　那月ちゃんに黙って会いに行ったのが完っ璧に裏目に出ちまったな」
自分の判断ミスを思い知らされて、古城は今さらながらに後悔する。
〝仮面憑き〟とメイガスクラフト社のつながりを、那月たちはまだ知らない　それは事件の捜査の遅れを招き、夏音の立場がますます悪化することを意味していた。
叶瀬賢生が娘の身体を使ってなにをするつもりなのかは知らないが、彼は実験をさらに進めるための貴重な時間を手に入れたのだ。
「そうですね。やられました。まさかこんな方法で〝第四真祖〟を絃神島から排除するなんて」
どことなく悔しさを滲ませた口調で、雪菜が言った。自分の監視対象である古城が、こうも簡単に無力化されてしまったことがショックなのだろう。対抗意識を燃やす方向が、少し間違

っているのではないかと、古城は複雑な気分を味わいながら携帯電話を取り出して、
「電波は……当然、圏外か　GPSが使えても、こんな島、地図にも載ってないしな」
役に立たねえ、と愚痴りつつ電源を落とす。
「都合良く船が通りかかったり……ってことは、なさそうだな」
「もともと〝魔族特区〟の周辺海域は、航空機や船舶の接近が規制されてますしね」
雪菜が冷静に悲観的な事実を告げた。
実際、ベアトリスやキリシマが、簡単に救助されるような場所に、古城たちを放り出すとも思えなかった。すぐに助けが来るなどとは、期待しないほうがいいだろう。
「脱出する方法はあとで考えるとして、まずはこの島を調べましょう。とりあえず飲み水を確保しないと」
「水？」
「はい。あとは食べ物と雨風をしのげる場所も。できれば完全に陽が暮れる前に」
雪菜が、背中のギターケースから銀色の槍を取り出した。それで邪魔な木の枝を切り払って、森の中に通り道を造るつもりらしい。
「……なんか無人島に流れ着いた漂流者の気分だな」
緊張感のない声で古城が言う。雪菜は古城を溜息混じりに見返して、
「気分じゃなくて、本当に無人島にいるんですけど」

「そ、そうか……このまま救助がこなかったら、最悪、ここで一人きりで暮らさなきゃいけないのか。それはシャレになんねーな……」

文明から完全に隔離された、ちっぽけな無人島を見回して、古城は頭を抱えた。コンビニやスーパーはもちろんのこと、ネットもテレビも電気も水道もないという生活は、惰弱な現代人の古城にとって想像するだけでも恐怖である。ましてや古城たちがそんな原始的な状況に置かれている間にも、夏音は危険に晒されているのだ。最悪という言葉すら生ぬるく思える状況である。

しかし雪菜は、なぜか傷ついたような瞳で古城を睨んで、

「最悪、ですか……わたしと一人きりだとシャレにならない……そうですか」

「え？」

「いえ、なんでもありません」

背中を向けながらそう言って、雪菜は森の中へと入っていった。彼女がやつあたり気味に振り回した槍が、古城の目の前で木の幹を抉る。

「姫柊……さん？　あの、もしかしてなんか怒ってるとか……？」

「いいえ。全然、怒ってませんから　これは道に迷わないように目印をつけているだけです」

「そ、そうか。なるほど」

あまり納得できない気分でそう言いながら、古城は雪菜を追って森の奥へと進んだ。

密生した樹木が陽光を遮って雑草が育たないせいか、森の中は想像していたよりも歩きやすい。火山岩質の岩肌は緩やかな下り坂になって、小さな入り江へと続いている。

絃神島の周辺は、もともと降雨量の多い海域である。露出した岩の隙間を清流が流れ、島内の至る所に湧んだ泉が湧き出していた。少なくとも飲み水に不自由することはなさそうだ。

「……姫柊？」

振り返りもせずに歩き続けていた雪菜が、森を抜けたところで不意に立ち止まる。彼女は困惑したような雰囲気で、海岸近くの斜面を見つめていた。その視線を追って古城も目を凝らし、

「あれって、もしかして建物か？」

「あ、いえ……あれは……」

声を弾ませる古城を見て、雪菜が少し困ったように言い淀む。

斜面の中腹に立っていたのは、黒ずんだコンクリートの壁だった。表面はひび割れ、苔むしているが、人工的な建造物なのは間違いない。

「案外、本当にメイガスクラフトの研究施設があったりするのか？」

「いえ、そんなはずは……でも……」

「ここで眺めてても仕方ないから、行ってみようぜ。もしかしたらキリシマたちが知らなかっただけで、実は誰かが住んでるかも知れないし」

「先輩!?　待ってください、あれは――」

雪菜の制止を無視して古城は走り出し、建物へと真っ直ぐに近づいていく。キリシマたちが仕掛けた罠という可能性も脳裏をよぎったが、それならそれで、いっそ清々すると思えた

しかし実際に壁の近くまで辿り着いたところで、古城は雪菜の制止の理由に気づく

それは奇妙な建物だった。大きさは二階建てのアパート程度。分厚いコンクリートの壁に覆われているが、壁の穴には窓ガラスすら嵌まっていない。建物の中には家具どころか、照明器具すら見あたらなかった。とても人が住めるような場所ではない。

「トーチカ……ですね」

古城に追いついてきた雪菜が、建物を見上げてぽつりと言った。

「……トーチカ？」

「戦場で、敵部隊の接近を阻止するために設けられた防御陣地です。砦みたいなものですね」

「こんな島で戦争でもやってたのか？」

「それはわかりません。それほど古い建物ではないみたいですけど」

そう言って雪菜は、薄暗いトーチカにためらいなく足を踏み入れる。彼女のあとに続こうとして、古城は靴底から伝わる感触に顔をしかめた。枯れ葉のように足元に散らばっていたのは、鈍く輝く金属の筒。機関銃弾の空薬莢である。

「銃撃戦の跡……ですね」

雪菜が溜息のような声で言う。

ふと見回せば、トーチカの壁には、銃弾の跡とおぼしき窪みや亀裂が無数に残されていた。表面の汚れから判断する限り、それらの弾痕は古いものではない。せいぜいここ数年以内に出来たものだ。しかし誰がなんの目的で、こんな島を攻撃してきたのかわからない。絃神島の周囲に海賊が出るという話は聞いたことがないし、たとえ海賊がいたとしても、わざわざ戦争の真似事までして、こんな無人島に上陸する理由はないだろう。

「死体は見あたりませんね」

荒れ果てたトーチカの中を見回して、雪菜が平然と呟いた。

たしかに弾痕の多さに比べて、奇妙なくらいに負傷者がいた気配がない。吸血鬼化した古城の五感でも、血が流れた痕跡は見つけることができなかった。

「そういやそうだな。まあ、正直、助かったけど」

「屋根が残っていたのは幸いでしたね。キャンプを張る手間が省けました」

「まさか、ここに泊まる気か？」

古城が厭そうな表情でうめくと、なにか問題が、と雪菜は怪訝そうに目を瞬いた。

「その……幽霊的なものとか出てきそうで恐いんだが……」

「……どうして先輩が幽霊なんか恐がるんですか。曲がりなりにも吸血鬼なのに」

噴き出すのをこらえているような口調で、雪菜が言った。古城はふて腐れたように唇を曲げ、

「姫柊だって飛行機にビビってたじゃねえかよ」

「ビビってません！　ビビってませんからね！」
雪菜が顔を真っ赤にして言い返し、古城はやれやれとトーチカの天井を見上げた。
「しっかし見事になにも残ってねえな。無線機くらい残しておいてくれればいいのに」
「……シャレにならない、でしょうけど、自力で脱出できない以上、ここで一人きりで救援を待つしかないですね……最悪、でしょうけど」
なぜか再び拗ねたような口調でそう言って、雪菜はその場に屈みこむ。
「救援か……救援ねえ」
機銃用の銃眼から水平線を眺めて、古城がそっと溜息をついた。
紘神島は今や遥かに遠く、古城の溜息が届くことはない。

4

「遅い！」
つながらないスマートフォンの画面を苛々と見つめて、藍羽浅葱が不機嫌に唸る。
紘神市南地区にあるマンションの七階。暁家のリビングだ。
今日の浅葱の服装は、普段の彼女の装いに比べるとあっさり地味目。しかし実は上から下までバリバリ下ろしたての新品という気張った私服だった。髪も下ろしているため、ちょっと見、

いいところのお嬢さまに見える、というのが浅葱の自己評価である。

「いつまで待たせる気なのよ、あの古城は……！」

憤慨する浅葱の手元にあるのは、まっさらのスケッチブックと画材一式。美術の課題につき合うという古城との約束を真に受けて、わざわざ休日の真っ昼間から、暁家まで出向いて来たのだ。にもかかわらず、肝心の古城は不在。昨夜遅くに帰ってきて、早朝に再び出かけたという。もちろん、浅葱にひと言の連絡もなく、だ。

「……ごめんね、浅葱ちゃん　古城君が迷惑かけて」

浅葱の隣に座った暁凪沙が、申し訳なさそうにうなだれる　この出来のいい古城の妹は、不肖の兄の行動に責任を感じているらしい。

浅葱はいつもの皮肉っぽい表情で、凪沙に気さくに笑いかける。なんだかんだで彼女とも、四年越しの長いつき合いなのだ

「凪沙ちゃんが謝ることないって。悪いのは約束をすっぽかして出かけた、あの馬鹿だから。あいつの言うことを信じたあたしも相当だけどさ。まったくあいつは本当にもう……」

「うん……でも古城君、ホントどこに行っちゃったのかな。携帯も全然つながらないし、雪菜ちゃんも朝から出かけてるみたいだし」

「またあの転校生か……」

凪沙の何気ない呟きに、浅葱が、ちっ、と舌を鳴らした。こうもたびたび似たようなことが

続けば、いくら浅葱でもおかしいと気づく。

ここ半年ほど、やけに無断欠席が多かった古城だが、特にあの転校生が来てからはひどい。

そして古城が前触れもなく失踪するのは、決まって彼女が絡んだときなのだ。古城と彼女の間には、確実になにか秘密がある。

もちろん浅葱がその気になれば、姫柊雪菜の正体を調べるのは簡単だ。公的機関のデータベースに潜りこんで、彼女の生まれや育ちから預金残高まで、ありとあらゆる情報を一瞬で引っ張り出す自信がある。しかし浅葱にはそんなことをする気は毛頭ない。

勝てるとわかっている勝負に挑むのは、藍羽浅葱のスタイルではない。秘密とは、然るべき障壁を打ち破って、正々堂々と暴くべきものだ。それが浅葱のハッカーとしての誇りと矜持であり、それを体現してきたがゆえに、人々は彼女を畏敬をこめて〝電子の女帝〟と呼ぶのである。

「あ、でもあの二人が一緒ってことは、もしかしたら夏音ちゃんの手伝いかも――」

カップに新しいコーヒーを注ぎながら、凪沙が突然思い出したようにそう言った。

「夏音ちゃんって……叶瀬夏音のこと？　あの銀髪の？」

浅葱が不思議そうに訊き返す。中等部の〝聖女〟は有名人だ。顔と名前くらいは、いちおう浅葱も知っている。

「いろいろあって、私が古城君に言っちゃったんだよ。夏音ちゃんが拾ってきた捨て猫の里親

捜しを手伝えって。事情は話すと長くなるんだけど……えへへ……」

　凪沙がいつになく嬉しそうに笑う。話を聞いてみれば、妹が男子に告白されたと勘違いした古城が、慌てふためいて中等部の校舎にまで乱入した、ということらしい。

　普通なら妹離れできない兄だと笑うところだが、浅葱は、満更でもなさそうに微笑む凪沙を、優しく見つめただけだった。四年前、瀕死の妹を見舞うために病院を訪れていた少年の姿を、浅葱は今も忘れていない。

「捨て猫の世話……そういえばたしかに古城のやつ、クラスのみんなに猫を飼わないかって訊いて回ってたわ」

　昨日の彼の奇妙な行動を思い出して、浅葱が呟く。凪沙はうんうん、と頷いて、

「そうそう。それそれ……あ、そっか。てことは、古城君たち、修道院かも」

「修道院？」

「うん。彩海学園の裏に、夏音ちゃんが昔暮らしてた修道院の跡地があって、そこでこっそり猫の面倒を見てるの。もしよかったら案内するけど、今から行ってみる？　私、どうせ部活で学校に出なきゃだし」

　壁の時計を見上げて、凪沙が言う。時刻は午後の一時過ぎ。天気は、家の中で待ちぼうけを喰らっているのが馬鹿馬鹿しく思えるくらいの快晴だ。

「そうね……ここでただ待ってるのも性に合わないしね。オッケー、お願い」

浅葱は愛用のスマートフォンを握って立ち上がる。

5

緩やかな坂の上にある公園の奥に、その建物は残されていた。廃墟となった修道院の建物だ。

伝令使の杖……報告書どおりね」

屋根に刻まれたレリーフを確認して、彼女は無感動な呟きを洩らす。

すらりとした長身の少女である。肌が白く、髪の色素も薄い。華やかで優美な顔立ちは、咲き誇る桜を連想させた。獅子王機関の舞威媛、皇坂紗矢華だ。

「ここが叶瀬夏音が暮らしていた修道院？　何年も放置されてたというわりには綺麗だけど」

廃墟と化した建物の中を見回して、紗矢華は形のいい眉を寄せる。

院内に人の痕跡はない。壁の亀裂や砕けた家具は、五年前に起きた事件の痕跡だろう。

霊力の暴走が原因だと考えられている謎の爆発事故。

その事故がきっかけでこの修道院は閉鎖され、暮らしていた人々は散り散りになった。それ以来、ここには誰も住んでないはずだ。

しかし不思議と埃臭い印象はない。ここに足繁く通っている誰かが、小まめに掃除しているらしい。その人物こそ、紗矢華の現在の任務における重要な手がかりとなるはずだった。が、

「　　っくしゅ」

突然のむずがゆい感覚に、紗矢華は小さなくしゃみを洩らす。清掃が行き届いた院内の空気に、なおも漂う微小な浮遊物が原因だ。

「猫の毛？」

その浮遊物の正体に気づいて、紗矢華は怪訝な表情を浮かべる。

廃墟の中には、彼女自身のくしゃみの残響が残っている。その余韻に混じるかすかな人気の乱れを感じて、紗矢華は弾かれたように背後を振り返った。

「　　誰!?」

油断なく身構えたまま、背負っていた楽器ケースに手を伸ばす　ケースの隙間からのぞいていたのは、銀色に輝く長剣の柄である

「隠れても無駄なんだけど……素直に出てくる気はない？」

紗矢華が冷ややかに警告する　と、柱の陰でかすかな笑い声が洩れた。参ったな、と言いたげな苦笑の響きが感じられる

「……ちっす」

緊張感のない声で言いながら顔を出したのは、制服姿の男子生徒だった　短髪をツンツンに逆立てて、首にヘッドフォンを引っかけた高校生だ。

暁古城と同じ制服？　あなた……たしかディミトリエ・ヴァトラーと一緒にいた……」

「ああ、そうだっけ。あんときはどうも」
ばつの悪そうな表情で、矢瀬基樹が苦笑する。
紗矢華は彼と初対面ではない。紘神市で起きたテロ事件の現場に、なぜかこの生徒は居合わせて、事件の顛末を最後まで見届けたのだ。
「やっぱりただの高校生じゃなかったわけね。あなた、何者？」
「何者か……と言われると、暁古城のクラスメイトとしか答えられないわけなんだが」
矢瀬が少し困ったように頭を掻く。紗矢華は彼を睨んだまま、
「素性を明かす気はないってこと？」
「いやいや、まあまあ、その辺の詮索はなしにしようぜ。訊かれて困るのは、お互い様だろ。獅子王機関の舞威媛が、こんなところで誰を探してるのか、なんてのはさ」
あっさりと自分の正体を言い当てられて、紗矢華は困惑の表情を浮かべた。なにもかもを見透かしたような矢瀬の物言いに、かすかな苛立ちを隠せない。
「あなた……なにが目的なの？」
「あんたと取り引きがしたいんだわ。ちっとばかり困ったことになっててさ」
矢瀬が神妙な声を出す。あながち演技とも思えない態度だ。
「取り引き？」
「ああ。あんたが俺の正体を口外しないことが、取り引きの条件だ。古城にも、姫柊雪菜にも」

妙に回りくどい矢瀬の説明に、なるほど、と紗矢華は納得する。

目の前の男子は、姫柊雪菜が暁古城の監視役であることを知っている。だが、自分がそれを知っているという事実を、雪菜たちに知られては困る立場にいる、ということだ。つまり彼の任務とは、雪菜の動向をも含めた古城の監視　いちおうスジの通った話ではある。

「その条件を呑んでくれるなら、俺はあんたに情報を提供する。たぶん、あんたにとっても価値のある情報だと思うんだが」

「……情報って？」

紗矢華が冷ややかに訊き返す。ここで彼女が譲歩する理由はない。

矢瀬は投げやりに肩をすくめて、短く答えた。

「暁古城の居場所について」

「……は!?　わ、私はべつにそんなこと知りたくもないんだけど……！」

紗矢華は声を上擦らせて反論する。なぜ彼が、そんな取り引きを持ちかけてきたのかわからない。そんな情報のいったいどこに、紗矢華にとっての価値があるというのか　？

露骨に動揺する紗矢華を見て、矢瀬は、うわ、面倒くせえ、と言いたげな顔をする。

「古城のやつ、今、どうやら島の外にいるらしい」

「……〝魔族特区〟の外に〝第四真祖〟が？」

紗矢華が表情を強張らせた。矢瀬の言葉を全面的に信じたわけではないし、彼女の任務とも

直接的には無関係だが、もしその話が事実なら、たしかに重大な問題だ。
「もちろん姫柊雪菜も一緒なんだが」
「う……ぐ……」
「実はあいつら、今ちょっと叶瀬夏音がらみの事件に巻きこまれてて……まずいことに……」
気怠げな口調でそう言いかけて、矢瀬は不意に言葉を切った。
彼が口にした叶瀬夏音の名前に、紗矢華が目つきを鋭くする。しかし矢瀬はなぜか苦悩するようにうずくまり、ぐったりと頭を抱えていた。
「どうしたの？」
紗矢華が警戒の表情で矢瀬を睨む。矢瀬はダラダラと脂汗を流して、
「まずい……ていうか、最悪だろ　なんであいつらがここに来るんだ!?」
「あいつら？」
紗矢華が首を傾げたとき、歪んだ扉を軋ませて、誰かが建物に入って来る気配がした。緊張感に満ちた空気を破って、少し舌足らずな明るい声が響き渡る。
「こんにちはー。夏音ちゃん、いる？　うちの古城君、来てないかな」
ひび割れた壁の裏からひょっこりと顔を出したのは、制服を着た小柄な女子中学生だった。暁古城の妹だ。つぶらな瞳を殊更に丸くして、彼女はしゃがみ込んでいる矢瀬を見つめ、
「あれ、矢瀬っち？」

「基樹？　あんたこんなところでなにを――」
続けて入ってきたもう一人の少女が、紗矢華に気づいて足を止めた。垢抜けた私服姿の女子高生だ。気まぐれで高貴な猫を思わせる、都会的な雰囲気の美少女である
紗矢華と彼女は互いに呆然と目を合わせ、
「あーっ！」
それぞれ相手を指さして、ほとんど同時に声を上げた。
「あんた、こないだ古城を襲ってた通り魔女!?」
「あ、暁古城の浮気相手!?」
お互いの発言を聞いて、二人は絶句　再び同時に声を張り上げる
「だ、誰が浮気相手よ!?」
「こっちこそ通り魔なんかじゃないんだけど!?」
今にも取っ組み合いの喧嘩を始めそうな勢いで近づき、呪い殺すような勢いで睨み合う二人。
ぽかんと目を見開いた凪沙が、わけがわからないという表情で、
「えっ……なになに？　なにがどうなってるの!?　ねえ、矢瀬っちってば、ねえ！」
紗矢華と浅葱の横顔を見比べながら、届みこんだままの矢瀬の背中を乱暴に叩く。
矢瀬は疲れたように頬杖を突いて、弱々しく呟いた。
「もう知らん……」

6

「〝焔光の夜伯〟の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――！」

荒々しく波が打ちつける海辺の岩場に立って、古城は右手を掲げていた。

その指先から噴き出したのは、霧のような深紅の鮮血だ。

血霧はやがて稲妻へと代わり、凄まじい魔力の波動とともに黄金の輝きを放った　爆発的な大電力が、光の柱となって天へと屹立する。

「――疾く在れ、五番目の眷獣〝獅子の黄金〟！」

古城の頭上に出現したのは、雷光をまとう巨大な獅子だった。古城が先代の〝第四真祖〟から受け継いだ、十二体の眷獣のうちの一体――〝獅子の黄金〟である。

霊媒である雪菜の血を吸った古城を新たな宿主と認め、こうして自由に呼び出せるようになったのはいいが、だからといって制御が簡単になったわけではない。少しでも気を抜けば暴走して、無差別に破壊を撒き散らすという実に扱いづらい召喚獣だ。

古城は細心の注意を払いながら、雷光の獅子を海へと向けた

もしここで眷獣の制御に失敗したら、こんなちっぽけな無人島など、一瞬で焼き尽くされて海に沈むだろう。それがわかっていれば、いきおい慎重にもなる

雷光の獅子は、分厚い刀剣のような鉤爪を静かに海面へと近づける。威力を極限まで絞って、古城は眷獣の力を解放し――

その瞬間、空気の抵抗を破って、膨大な電力が一気に海面へと流れ込んだ。

その圧倒的なエネルギーは、一瞬で海水を沸騰させ、気化した水が水蒸気爆発を引き起こす。凄まじい爆音で大気が震え、撒き散らされた衝撃波が地面を揺らした。

「……駄目か」

ぶはっ、と海水に濡れた顔を拭って、古城が無念そうに息を吐く。と、

「なにをやってるんですか、先輩」

古城の背中越しに、低く押し殺した雪菜の声が聞こえてきた。

全身ズブ濡れになった獅子王機関の剣巫が、冷ややかな目つきで古城を睨んでいる。

透明な水滴が彼女の頬を流れ落ち、湿った制服が素肌に張りついて透けていた。今の爆発で飛び散った大量の水飛沫を、頭からかぶってしまったらしい。

爆心地の近くにいた古城のほうが、圧倒的に被害が少ない。そのことに引け目を覚えつつ、

「い、いや……そういえば電気ショック漁法って聞いたことがあるなー……と思ってな」

「だから眷獣を使って魚を獲ろうとした、というわけですか？」

濡れた前髪をかき上げて、雪菜が訊く。古城は怖ず怖ずと頷いて、

「なんだが……駄目だな、これは」

「そうですね」
雪菜が、諦観したように深々と溜息をついた。
古城の眷獣の攻撃は、周囲の海域に深刻な環境破壊をもたらしていた　えぐられた海底が土砂を巻き上げ、煮えたぎる海面を濁らせている　近くを泳いでいた魚がいたとしても、おそらく粉砕されて原形を留めてはいないだろう　威力が強すぎたのだ
そもそも電気ショック漁法は日本では禁止されているというが、その理由がなんとなくわかってしまった古城である。
「えっと……それで姫柊はなにを？」
「夕食の支度ができたので、お誘いに来ました」
「あ、ああ……サンキュ」
感謝の言葉を口にしながら、古城は岸壁をよじ登る
獅子王機関で生存訓練を受けたことがあるという雪菜は、実に手際よく石を積んでかまどを造り、集めてきた枯れ枝にあっさりと火を点けていた。
テーブル代わりの朽ち木の上には、彼女が用意した食事が並んでいる
そこに置かれた料理らしきものを眺めて、古城は微妙な表情を浮かべた
「えーと……これは？」
比較的まともな一品を指さして、古城が訊く。繊維質の硬い殻に覆われた果実である。

「椰子の実です」
雪菜が少し得意げに答える。なるほど、と古城は頷いて、
「……この白いのは？」
「椰子の実の刺身です」
「すると、これは……」
「椰子の実の千切りと、椰子の実の柱剝きです。こちらが椰子の実と海水のスープです」
「なかなか独創的な料理だな」
古城は慎重に言葉を選んで感想を述べた。まあ実際、手に入った食材が椰子の実だけでは、ほかに料理のしようもなかったわけで、文句が言える立場ではない。それよりはあのバカ長い〝雪霞狼〟で、椰子の実を千切りにした雪菜の槍術を褒めるべきだろう。
「お味はどうですか？」
おそるおそる椰子の実の汁をすする古城に、期待のこもった眼差しで雪菜が訊いてくる
「うん……なんて言うか、普通に椰子の実の味だけど」
「はあ」
「そういえば、子どものころに凪沙のままごとにつき合わされて、腹を壊したことがあったな」
「なぜ今そのエピソードを思い出したのかが気になりますが、不愉快な気分になりそうなので、あえて問い詰めるのはやめておきます」

雪菜が頬を膨らませて古城を睨む。

古城はそれに気づかないまま、夕陽に照らされた海を眺めて、

「このまま何日も家を空けるとなると、凪沙のやつが心配だな。なにも言わずに出てきちまったからなー。まあ、明日が日曜だから今日のところはあいつもそんなに……」

そう言いかけたところで、古城はぎょっと目を剝いた　とてつもなく重大なことを思い出してしまったのだ。

「……先輩？」

雪菜が心配そうに古城を見つめてくる。古城は頼りなくその場に突っ伏して、

「やばい。浅葱の美術の課題を手伝う約束をしてたんだった　あいつ絶対怒ってる」

[1]藍羽先輩と約束……ですか」

気の抜けたような声で雪菜が呟いた　そして彼女はふと真顔になって、

「それは少しだけ希望が出てきましたね」

「……だといいけどな」

雪菜の考えていることに気づいて、古城は頷く。

浅葱はそろそろ、古城が絃神島内にいないと気づくころだ。そして彼女の性格を勘案するに、そのまま放っておくようなことはないだろう。約束をすっぽかされたことに文句を言うために、やっきになって古城の行方を調べようとするはずだ。

超一流のハッキング技術を持ち、人工島管理公社のメインコンピューターを手足のように使いこなす彼女なら、メイガスクラフトと古城たちの関係に気づく可能性がある。

「だけど、下手にメイガスクラフトに近づいたら、浅葱の身も危険になりかねないからな……それはそれで問題なんだよな。つっても、このまま叶瀬を放っておくわけにもいかねーし」

誰かを救うために、べつの誰かを危地に陥らせなければならないというジレンマ。そのくせ自分がなにもできないというもどかしさに、古城は、どうしようもなく苦悩する。

そんな古城を真っ直ぐに見つめて、雪菜が仄かに微笑した。

「……他人の心配ばかりですね、先輩は。自分だって無人島に流されて帰るあてもないのに」

「わかってるよ。他人の心配してる場合じゃないってのはな」

古城が決まり悪そうに口を歪める。しかし雪菜は静かに首を振り、ほとんど聞き取れないくらいの小さな声で呟いた。

「いえ……先輩のそういうところはちょっとだけ、いいと思います」

「……え？」

古城が戸惑いながら訊き返す。そんな古城を悪戯っぽく笑って見返し、

「いい景色ですね」

濡れた髪を潮風に遊ばせて雪菜は言った。

まだ少し幼い彼女の横顔を、沈みかけの夕陽が美しく照らしている。

どこか幻想的なその風景に古城はしばらく目を奪われて、
「ああ……そうかもな」
溜息混じりに頷いた。まもなく夜が訪れる

7

紘神島西地区のネットカフェ。一人がけの狭苦しいブースに二人が顔をつきあわせ、モニタ上に流れる映像を息を呑んで見つめている
「あったわ……これ。両神重工製エアロステラRAⅡ」
早送り中の動画を止めて、浅葱は切り出した写真を拡大した。ノイズだらけの粗い画像データ。映っているのは離陸直前の飛行機だ　四人乗りの旧式プロペラ機である
「メイガスクラフトの社用機だな」
機体に描かれた企業ロゴを見て、矢瀬が不敵に笑った
浅葱は無言で頷いてキーボードを操作。後部座席に並んで座る、制服姿の二人組を拡大する。パーカーを羽織った気怠そうな顔の少年と、ギターケースを抱えた小柄な少女だ
「空港監視カメラの画像だから映りが今イチだけど、これってたしかに古城と転校生よね」
「……だな、行き先はわかるか？」

「飛行計画だと、白社所有の研究施設への定期便ってことになってるけど、たぶん嘘よね……」

つっても、飛行時間から考えて、そう遠くまで行ったとは思えないし」

会話を続けている間にも、浅葱は即席で組み上げた自作プログラムを次々に実行していく。

仮初めの命を与えられたウィルスたちは、今や電子的な使い魔と化して、メイガスクラフトに関連する様々な施設へと侵入を開始していた。

さらに浅葱は人工島管理公社のサーバーに管理者権限で接続。相棒である補助人工知能を起動する。絃神島すべての都市機能を掌握する五基のスーパーコンピューターの現身――モグワイだ。

「モグワイ、そっちはどう？」

『そうさなあ。さすがに大企業だけあって、上っ面の帳簿は綺麗なもんだけどな』

メイガスクラフト米国本社に侵入していたモグワイが、やたらに人間臭い口調で言う。

彼が調べていたのは、メイガスクラフトの経理部門である。裏帳簿とおぼしきデータと過去の取り引き記録が、何重ものプロテクトを破って復元されていく。

『ケケッ……臭ェな。このあたりはプンプン臭うぜ』

「……買収した子会社の私有地？」

画面上に表示された地図を見て、浅葱が首を傾げる。

「なんでこんな無人島を丸ごと借り上げてるわけ？　〝魔族特区〟の管理区域外じゃない」

『長向きは観光用ってことになってるけどな』

「紘神島から片道二十分弱……旧式プロペラ機で往復した、と考えると、いい時間ね」

メイガスクラフト社用機の性能表を見ながら、ふん、と浅葱が鼻を鳴らす。

モグワイは、ククッ、と皮肉っぽく笑い、

『ついでに面白いものも見つけたぜ。連中の主要顧客リストなんだが』

「……アメリカ連合国陸軍？　軍隊がお掃除ロボットを大量発注って、なによこれ？」

そのちぐはぐな情報の取り合わせに、浅葱は真っ先にデータの混信を疑った。だが、モグワイに限って、そんな基本的なミスを犯すとは思えない。

「なるほどな。ようやく絡繰りが見えてきたぜ……」

困惑する浅葱の代わりに、不愉快そうに呟いたのは矢瀬だった。どうやら彼には、メイガスクラフトの裏稼業に心当たりがあったらしい。

そして彼らのやりとりを聞いていた紗矢華が、沈黙を破ってぽつりと言った。

「藍羽浅葱……あなた、何者？」

情報機器には疎い紗矢華だが、電子情報を扱う浅葱の手際が、卓越していることくらいはわかる。〝魔族特区〟の住人である以上、普通の人間でなくても驚きはしないが、浅葱の能力は明らかに常軌を逸していた　あの古代兵器を破壊したというのも納得だ。

「人工島管理公社だけじゃなくて、メイガスクラフトの本社に、こんなにもあっさり侵入する

なんて……黒死皇派が目をつけるからには、只者じゃないとは思ってたけど……」

驚嘆の表情を浮かべる紗矢華を、浅葱は少し鬱陶しげに見上げた。ひらひらと面倒臭そうに手を振って、

「悪いけど、あたしは普通の高校生よ。たまにバイトで管理公社の手伝いをしてるだけ」

「は？　バイト？」

今度こそ紗矢華は絶句する。こと情報戦に関する限り、藍羽浅葱は、あの〝第四真祖〟にも匹敵する怪物だ。にもかかわらず、肝心の本人は、まだそれを自覚していない。

その危なっかしさに戦慄する紗矢華を、浅葱は胡乱げにじっと見据える。

「煌坂さん……だっけ？　そっちこそ何者なのさ。本当に古城たちを助けられるわけ？」

「それは任せて　私のコネで沿岸警備隊の艦を動かすから」

紗矢華は、きっぱりと頷いた。

担当部署は違っても、〝第四真祖〟暁古城の監視は獅子王機関の最優先課題だ。監視役の雪菜も一緒に連れ去られたというのなら、彼女を救出するのは紗矢華の当然の義務である。

それに紗矢華自身の任務とも、古城たちの失踪はどうやら無関係ではないらしい。

獅子王機関の名前で、叶瀬賢生に面会の予約をしていたのは紗矢華だった。夏音の保護者である彼に、訊きたいことがあったのだ。もしも紗矢華が雪菜たちよりも先にメイガスクラフトを訪れていたら、今ごろ島外に連れ去られていたのは、実は彼女のほうだったのかもしれない。

「……コネで、ね」

当然といえば当然だが、まったく信用してない口調で浅葱が呟く。

しかし紗矢華は、自分の肩書きを名乗ることができない　ここで獅子王機関の名前を出せば、雪菜の正体が、そして暁古城の秘密が自動的にバレてしまうからだ　それは、おそらく浅葱にとっても不幸なことだ。

だが幸いなことに浅葱には、紗矢華の正体を追及する意思はなさそうだった　その代わり、彼女は紗矢華の瞳を正面から見つめて、

「「それで――」」

ほぼ同時に紗矢華も浅葱に質問していた。

「あなたと古城はどういう関係なわけ？」

「あなたと暁古城はどういう関係なの？」

互いにムッと唇を結んで、浅葱と紗矢華が睨み合う

まるでどちらか先に目を逸らしたほうが死ぬ、と言わんばかりの二人の気迫に、狭苦しいブース内の緊張が一気に高まる　その濃密な空気に耐えかねたのか、

「まあまあまあまあ」

軽妙な口調で間に割って入ったのは、矢瀬だった。

「その辺は古城が無事に帰ってきてから、ゆっくり二人で話し合ってもらうとしてな……ほら、

こうしてる今も、あの野郎は姫柊ちゃんと二人で無人島で……なんというか、こう、アダムとイブ的な関係を築いてるかもしれないわけで」

無責任な矢瀬の発言に、浅葱と紗矢華は、ぴくん、と瞼を引き攣らせ、

「……そうね。それはまずいわね」

「たしかにあなたの言うとおりだわ、矢瀬基樹」

二人は同時に息を吐き出し、それを見て矢瀬もホッと安堵の溜息をついた。

紗矢華は、長いポニーテールを揺らしてブースの外に出る。壁に立てかけてあった楽器ケースを無造作に抱き上げながら、

「手を貸してくれてありがとう。感謝します。藍羽浅葱」

「どういたしまして。それよりも最後にひとつだけ教えてもらってもいいかしら」

「――ええ。わたしに答えられることなら」

挑発的な浅葱の視線を受け止め、紗矢華が頷く。そんな紗矢華の堂々とした態度に、浅葱は満足そうな笑みを浮かべて、

「あなたはどうして叶瀬夏音のことを調べてたの、煌坂さん？」

「それは……彼女に会いたがってた人がいたからよ。その人物の護衛が私の本当の任務なの」

少し迷って、結局、紗矢華は真実を口にする。

古城や雪菜がメイガスクラフトを訪れた理由は、叶瀬夏音に会うためだと考えてほぼ間違い

ないだろう。だとすれば、藍羽浅葱も無関係ではない。彼女には真実を知る権利がある。

「……護衛？」

「ええ。だけど、その人は絃神島に来る途中に、消息不明になってしまった」

楽器ケースを握りしめて、紗矢華は悔しげに呟いた。

彼女が失踪したのは絃神市への到着前。紗矢華に責任があるわけではない。だがそれでも、護るべき相手を護りきれなかったという悔いがある。

「じゃあ、あなたがここに来たのは――」

「叶瀬夏音について調べれば、私の護衛対象が失踪した原因がわかると思ったからよ。おかげで、疑うべきはメイガスクラフトだということがはっきりしたわ」

「なるほどね」

腑に落ちた、という表情で浅葱が頷く。そして彼女は、ついにその質問を口にした。

「それで？　あなたの護衛対象というのは、誰？」

「それは――」

一瞬の躊躇ののちに、紗矢華は告げた。

情報通の矢瀬はもちろん、一般人である浅葱の表情すらも、変させるその人物の名を。

8

「……眠れねえ」

椰子の枝を敷き詰めただけの硬い寝床の上で、古城はぼんやりと暗い天井を見上げていた。

正確な時刻は知らないが、おそらくまだ午後八時前。今どきの高校生が眠る時間帯ではない。ましてや夜行性の吸血鬼では尚更だ。

ねぐらであるトーチカの中に雪菜の姿はない。彼女は外で監視中なのだ。

近くを通りかかる船を見逃さないよう、夜も交替で海を見張りましょう、というのが彼女の主張で、古城もあえて反対はしなかった。こんなところで二人一緒に眠るのは気まずい、という思惑もあった。だが、やはり冷静に考えて、無駄なことをしているという印象は否めない。

「……つか、昼間、あんだけ眺めてて、船なんか一隻も通らなかったのに、今さらだよな」

気怠く息を吐き出しながら、古城はむくりと上体を起こす。

喉の渇きも覚えたことだし、雪菜の様子見がてら水でも汲んでこよう、と思ったのだ。

「おーい……姫柊ー……起きてるかー？」

段差に躓きながらトーチカの外に出て、古城は雪菜に呼びかける。

しかし雪菜の返事はなかった。古城の声が、暗がりの中に虚しく反響するだけだ。

海岸側に回っても彼女の姿は見当たらない。
彼女が常に持ち歩いているはずの〝雪霞狼〟も消えている。
「姫柊……？」
想定外の雪菜の不在に、古城は我知らず心細さを覚えた。
ただの見回りや、トイレに行ってるだけ、という可能性はもちろんあるだが、交替での夜の見張りや、古城が先に寝ることを、雪菜がなぜか強硬に主張したのが、今になって気がかりに思えてくる。明らかになにか意図的なものが感じられた。
「……」
古城の胸の中に漠然とした不安が広がっていく。
雪菜はいわゆる呪術の類が、あまり得意ではないと言っていた。
だが、まったく使えない、というわけではないだろう。たとえば精神感応や幽体離脱などの、遠くの仲間と連絡を取る術がないとも限らない。
そして、もしそれらの呪術が危険を伴うものだとしたら――
古城に止められないように、黙って一人で実行する。彼女の性格からして、おそらくそんなところだろう。古城の思い過ごしだとしたら、それならそれで構わない。だが古城には、ほかに彼女の不在の理由を思いつかなかった
「姫柊のやつ……！　俺の監視役なら、目を離さないでちゃんと最後まで見張ってろよな！」

的外れな不満を漏らしつつ、古城はトーチカ背後の森に向かった。

月齢の若い月の光は頼りなく、森の中は闇が濃い。だが古城の目は、むしろ陽光の下よりも鮮明に景色を知覚する。普段は迷惑に思うだけの吸血鬼の力も、こんなときだけは役に立つな、と古城は自嘲気味に考える。

「どっちだ？」

カンだけを頼りに、古城は島の中心部へと向かった。節くれだった木々の根に何度も足を取られながら、緩やかな坂道を登っていくと、不意に視界が開ける。

そこは森の木々と霧に包まれた泉だった。

カルデラ状の岩の窪みに、湧き水がたまっているらしい。透明度の高い澄んだ水面からは、無数の石柱が突き出して、異世界めいた美しい光景を生み出している。

不意に遠くで水音が聞こえた。

反射的に視線を向けた古城は、そこで息を呑んで立ちすくんだ。

月明かりに照らされた泉の中に、女がいた。

妖精じみたほっそりした体つきに、一瞬、雪菜かと疑った。だが、そうではなかった。

銀色の髪と、碧い瞳。日本人離れした端整な容姿。月の女神と見まがいそうな美しい少女だ。

沐浴する聖女のように冷たい泉に身体を沈め、そして彼女は静かに立ち上がる。

しなやかな曲線を描く白い肌の上を、透明な水滴が流れ落ちていく。

「叶瀬……」

古城の口から無意識の呟きが洩れた。

泉の中にいる少女は、それほどまでに叶瀬夏音によく似ていた。

だが、違う。彼女がまとう雰囲気は、夏音とはなにかが決定的に違っている

夏音よりもわずかに背が高く、顔立ちも大人びているようだ

そして絶対的な自信に裏打ちされた威厳と、揺るぎない意思の力。一糸まとわぬ姿で水と戯れていてなおも、それらは圧倒的な存在感として彼女を取り巻いている

そう、一糸まとわぬ姿でいても

「って……こんなときに！　くそっ……勘弁してくれ！」

自分の口元を覆って、古城は突然低くうめいた。

犬歯が疼き、喉が干涸らびたような渇きを覚える　狭窄した視野が赤く染まり、荒々しい暴力的な欲求がこみ上げてくる。吸血鬼化した古城の肉体が持つ最悪の問題点。血への渇望。性欲の昂ぶりが引き金となって生じる吸血衝動だ。

苦悶する古城の声が聞こえたのか、銀髪の女が顔を上げる。

毅然とした碧い瞳が、正面から古城を見る

―目が合った

そう感じた直後、口の中に広がった血の味に、古城は異様な安堵を覚えた。

吸血衝動は長く続かない。要は血が恋しくなっただけなのだから、それを味わえば嘘のように消滅する。たとえそれが自分の流した鼻血であってもだ。

「……」

だらだらと流れ出した血を拭きながら、古城はうんざりと首を振る。

興奮すると鼻血が出る。吸血衝動を抑えるには便利な体質だが、この体質の問題点は、とにかく見栄えが悪いということだ。事情を知らない人間にとって、今の古城は、水浴び中の女の子をのぞいて、いきなり鼻血を噴き出したヘタレ野郎にしか見えないだろう。

銀髪の少女の姿はすでに消えていた。言い訳すらできなかったという事実が口惜しい。

そして顔を上げた古城の首筋に、突然、ひんやりとした金属が押し当てられた

「動かないでください」

背後から聞こえてきたのは雪菜の声だった。刃物を思わせる無機質な声音だ。自分の頸動脈に当たっているのが、彼女の銀色の槍の穂先だと古城は気づく。

「ひ……姫柊!?」

「動かないでください、と言いました。後ろを見たら刺します。どうせ殺してもあとで生き返るってわかってますし」

脅しとは思えない本気の口調で雪菜が告げた。いつから彼女が古城の背後にいて、どうしてこんなにも怒っているのか古城にはわからない。

「姫柊……さん。えーと、こんなところで、なにを？」
「それはわたしの台詞です。先輩には先に眠っているようにお願いしたはずですが」
雪菜が溜息をつきながら訊き返す　かすかに身じろぎした彼女の髪から、水滴が零れ落ちる気配がした。なぜ濡れているのだろう、と古城は疑念を抱きながら、
「いや、眠ろうとしてたんだけど……気づいたら姫柊がいなかったんで、心配になって　」
「のぞきに来た、というわけですか？」
「ち……違う！」
「い、今振り返ったら、本気で怒りますからね！」
慌てたような口調で雪菜が言って、古城の首筋に押し当てられた刃が圧力を増す　そのときになってようやく古城も気づいた　雪菜が古城に黙って姿を消した目的　彼女の髪が濡れている理由と、妙に焦っているその事情に　そういえば彼女は、海水をかぶってべたつく髪をやけに気にしていたな、と思い出す
「って……あの、もしかして姫柊さんも、水浴び中だったとか……？」
恐る恐る古城が質問すると、槍を握る雪菜の手がビクッと震えた
泉の周辺は夜霧が濃く、水面から突き出す石柱や岩などで死角も多い。水浴びをしていた雪菜の姿を、古城が見落としたとしても不思議はない
「それならそれで最初からそう言ってくれれば――」

「先輩のことだから、そんなことをしたらのぞきに来るじゃないですか。現にこうして」
確信に満ちた口調で雪菜が言う。なんでだ、と古城はさすがにムッとして、
「だからっ、姫柊のことなんかのぞいてねーだろっ！」
「……わたしのことなんか……ですか。そうですか」
雪菜が冷え冷えとした声を出す。彼女がなんに対して怒っているのか、古城にはもうさっぱりわからない。雪菜は、もう、と溜息をついて、そこでふと違和感に気づいたように、
「……先輩、いったい誰をのぞいてたんですか」
「だから、今さっき、そこに叶瀬みたいな子がいたんだ……って、のぞいてたわけじゃねーよ！たまたま目が合っちまっただけで！」
はあ、と雪菜は古城の反論を適当に聞き流し、
「叶瀬さん、ですか？」
「いや、叶瀬にしては大きかったんだけど……あ、いや大きいというのは、つまり成長してたって意味で……どこがどうって意味ではなくて年齢的に……」
しなくてもいい言い訳を始めて焦る古城を、雪菜が冷たく睨んでいる気配がある。
「成長した叶瀬さん、ですか。大きかった、ですか……」
「いや、俺はただ事実だけをありのままに言ってるんで、そんなふうに怒られても」
「べつに怒ってませんから」

明らかに怒気を孕んだ声でそう言って、雪菜がぐりぐりと槍を押しつけてくる。
「お、おう」
「それで、その女性は今どちらに？」
「あ、いや、さっきまでたしかにそこにいたはずなんだが……」
そう言って古城は、泉の対岸に視線を向けた。
だがそこには、鏡のように凪いだ水面が広がっているだけだ
「いない……よな」
「そうですね」
雪菜が冷静な声で言う。
霧に包まれた泉のほとりを眺めて、古城は唸る。その静謐な景色に、誰かがいたという痕跡は皆無だ。古城自身、あれは幻だったのではないかと疑いたい気分になってくる
「先輩……そのパーカー、お借りしてもいいですか？」
「ああ、べつに構わないけど――」
そう言って古城は、羽織っていたパーカーを背後の雪菜に渡す。かすかな衣擦れの音とファスナーを上げる気配がして、
「もうこっちを向いてもいいですよ」
古城の首筋から、ようやく押し当てられていた槍の重みが消えた

突然の解放感に脱力しながら古城は振り返る。暗い夜の森を背後に背負って、銀の槍を持った雪菜が月明かりの中に立っていた。ぶかぶかの白いパーカーの裾から、しなやかな裸足の脚が伸びている。どうやらパーカーの下には、本当になにも身につけてないらしい。

思わず凝視してしまう古城に、雪菜は再び槍を突きつけて、

「あ、あんまり見ないでください。仕方ないじゃないですか、まだ制服が乾いてないんですから。先輩が海水をぶっかけたりするから――」

「あ、ああ。なんか、本当に悪かった」

真剣に謝る古城を見て、もういいです、と雪菜は嘆息する。

そして彼女は、裸足のまま泉に沿って歩き出した。

「姫柊？」

「この先にも人が通れそうな道があります。追いかけましょう」

「さっきの話、信じてくれるのか？」

少し驚いて古城が訊く。雪菜は、そんな古城をむしろ不思議そうに見返して、

「のぞきに来るのは、先輩が先輩だから仕方がないとしても、こんな意味のない嘘をつく人じゃないって信じてますから――」

「そ、そうか……」

信用されているのか信用がないのか、さっぱりわからない雪菜の評価に、古城は不満な表情

を浮かべる。

地形が複雑なせいで遠く感じたが、もともと大きな泉ではない。銀髪の少女を見かけた場所まで、古城たちはすぐに辿り着く

雪菜が言ったとおり、岩陰の向こうには、島の反対側へと続く道が伸びていた。長い下り坂の向こうには、暗い夜の海も広がっている。

その坂道を歩き出そうとして、古城たちはふと足を止めた。沖合から聞こえてくる重々しい騒音に気づいたのだ。

「この音……」

古城は手近な岩の上によじ登って目を凝らす。轟音と茂る木の枝に邪魔されて、視界が悪いだが、闇に沈んだ夜の海面には、白い波飛沫を蹴立てて進んでくるなにかが見えた。

「船!?　助けに来てくれたのか――!?」

「待ってください、先輩。あれは――！」

救助隊の到着を期待して、慌てて走り出そうとした古城を雪菜が制止した。

船が近づいてくるにつれて、古城も彼女が自分を止めた理由に気づく

近づいてくる船の形が、明らかに普通ではなかったのだ。

異様な騒音と大量の水飛沫。闇に溶けこむような黒い船体。スカート形のエアクッションが船を水面に浮上させ、後部の大型ファンによって信じられないほどの高速で移動する。岩礁を

ものともせずに島へと突っ込んでくる、そんな船の姿を古城は戦争映画で見たことがあった。海軍の兵士が敵国への上陸に使う、エアクッション型揚陸艇である。

「メイガスクラフト……！」

積み荷のコンテナに描かれた企業ロゴに気づいて、雪菜がうめいた。

甲板に設置された数基のサーチライトが、一斉に点灯した。

それは目が眩むような光を照射しながら、ゆっくりと旋回し、夜の無人島を照らしていく。どこか執拗なその動きは、獲物を探す巨大な目玉のようにも思えた。

やがて夜目には眩しすぎる輝きが、森の中に潜む古城たちの姿を照らし出す。

「先輩！」

叱責するような雪菜の声に、古城は慌てて茂みの中に身を伏せた。

「見つかった……か？」

一度は通り過ぎたはずのサーチライトの光が、再び戻ってくる。

新たなサーチライトにも次々に灯がともり、森は真昼のような白い光に包まれた。

岸に乗り上げた揚陸艇のゲートが開く。

そこから降りてくるのは、全身を黒い鎧に包んだ兵士たちだ。彼らの手に握られているのが大型の軍用ライフルだと気づいて、古城たちは呆然と顔を見合わせた。

9

「メイガスクラフトの兵隊が、なんで今ごろ!?　置き去りにしただけじゃ不満なのかよ!?」
森の奥に向かって逃げ出しながら、古城は自分の不幸を呪った。
第四真祖の力を受け継いで以来、様々なトラブルに巻きこまれてきた古城だが、武装した軍隊に襲われるというのは初体験である。できれば一生知りたくなかった種類の経験だ。
「伏せて！」
雪菜が古城を突き飛ばして、そのまま覆い被さってくる。
もつれ合うように転倒した古城たちの頭上を、機銃弾の連射が駆け抜けていった。引き裂かれた大気が悲鳴を上げ、撃ち抜かれた木々の破片が雨のように降りそそいだ。
薄いパーカー越しに雪菜の柔らかな感触が伝わってくるが、それを気にしている余裕もない。
二人はそのまま傍にあった大木の根元に転がりこんで、
「問答無用かよ!?　いきなり発砲してきやがったぞ――！」
「実弾ですね……わたしたちを生かしておく気はない、ということでしょうか」
槍を握り直す雪菜の顔から、表情が消えた。
分厚い全身鎧を装備しているにもかかわらず、メイガスクラフトの兵士たちの動きは速い。

足場の悪い森の中、着実に古城たちを追い上げてくる。

このままでは逃げ切れないと判断したのか、雪菜は決然と彼らのほうへと向き直り、

「先輩、十五秒だけ耐えてください」

古城にそう言い残すと、突然、地面を蹴って薄闇の中へと飛び出していった。

「姫柊!?　って!?」

雪菜が飛び出したことで位置を捕捉されたのか、古城が隠れている付近に着弾が集中する。土煙がもうもうと舞い上がり、岩に当たった銃弾が激しく火花を散らした。雪菜を援護しようにも、古城は顔を出すことすらままならない。

だが、永遠に続くかと思われた銃声は、少女が悼めかせた銀色の光に突然かき消された。

「――――鳴雷！」

樹上から猛禽のように舞い降りてきた雪菜が、鎧に覆われた兵士の後頭部を素足で蹴り飛ばす。たとえ分厚い装甲に護られていても、頭部を支える頸椎の強度は変わらない。ましてや呪力をまとった雪菜の打撃は、装甲を浸透して人体内部を破壊する。

屈強な獣人すら一撃で昏倒させる彼女の蹴りをまともに受けて、兵士はひとたまりもなく吹き飛んだ。さらに雪菜は、着地する前に槍を一閃。兵士たちのライフルを両断し、武器を失った彼らを槍の石突きで殴り倒す。瞬きする間もない一瞬の出来事だった。

「姫柊、無事かっ!?」

ようやく集中砲火から解放された古城は、兵士四人を倒した雪菜のほうへと走り寄る。
しかし雪菜は、驚愕の表情で背後へと跳びすさり、
「まだです、先輩！」
「――え!?」
黒い全身鎧に覆われた兵士が、古城の目の前で立ち上がった。雪菜に蹴り折られた首はあり得ない方向に曲がったまま。そのくせ、苦痛を感じている様子はない。
「上雷！」
同じように立ち上がろうとしたべつの兵士の脇腹に、雪菜が肘打ちを叩きこむ。
鎧の隙間への直接打撃。兵士の脇腹が陥没し、その肉体がくの字に折れ曲がった。
肋骨が確実に何本か砕けて、内臓にもダメージが及んでいるはずだ　にもかかわらず、兵士は倒れない。雪菜の脚をつかんで、そのまま彼女を逆さに持ち上げようとする
「きゃあああっ!?」
雪菜はパーカーの裾を押さえて悲鳴を上げながら、旋回させた槍で兵士の腕をへし折った。
そのまま猫のように回転して音もなく着地。そして、
「つだらあっ　！」
古城は彼らを二人まとめて殴り飛ばした。吸血鬼の腕力を全開にした、力任せの一撃だ　兵士たちはたまらず吹き飛んで、背後の岩場に激突する。が、

「……嘘だろ!?　手加減しなかったぞ!?」

全身の鎧をいびつに歪めながらも、兵士たちは平然と立ち上がる。古城は今度こそ顔色を変えた。

彼らからは魔力の波動を感じない。獣人や吸血鬼、魔術的に造られた動死体の類というわけではなさそうだ。しかし、この人間離れした打たれ強さと戦闘力

メイガスクラフトが送りこんできた時点で警戒はしていたが、予想以上の難敵だ。

さらに、

「ぐおっ――!?」

「先輩!?」

背後からの銃撃を浴びて、古城はその場に倒れ伏す。銃弾は肩口をかすめただけ。高い再生能力を持つ吸血鬼にはかすり傷も同然だが、いくら不老不死でも痛いものは痛いのだ。

「すみません、先輩……囲まれました」

負傷した古城を庇うように戻ってきた雪菜が、険しい表情を浮かべて呟いた。

四方から響いてくる足音に気づいて、古城は絶望的な気分になる。最初に遭遇した兵士たちに手こずっている間に、古城たちは完全に包囲されていたらしい。

もちろん古城が眷獣を解放すれば、銃で武装した兵士など、たとえ何千人いても、なんの脅威にもならない。古城の眷獣は一瞬で、彼らを完全にこの世界から消滅させるだろう。

だが、古城の眷獣に手加減という概念はない。少しばかり威力を抑えたところで意味はない。強力すぎる眷獣は爆弾と同じだ。ひとたび喚び出せば善悪の区別なく、その場のすべてを破壊する。破壊的な力を持つ第四真祖の眷獣は、人間相手に使えるようなものではないのだ。

たとえ敵が武装した兵士であっても、彼らを皆殺しにする覚悟がなければ使えない

どうすればいい、と古城が逡巡する。

その直後、

――!?」

古城たちの眼前にいた黒鎧の兵士たちが、轟音とともに飛来した閃光に貫かれた

全身鎧に覆われた肉体が爆発四散し、どす黒いオイルと金属片を撒き散らす

続けざまに飛来した閃光が、同じく古城たちを包囲していた兵士たちの一団を薙ぎ払った

閃光の正体は銃弾だ。たった一発の弾丸が、強靭な兵士たちの包囲網を破り、古城たちの窮地を救ったのだ。

「二人とも、無事ですか」

緊張感のないおっとりとした声が、近くの岩壁の上から聞こえてくる

そこに悠然と立っていたのは、美しい銀髪の女だった。古城が泉で見かけた、叶瀬夏音に似た顔立ちの少女である。

軍人にはとても見えないが、彼女は軍隊の儀礼服を思わせるブレザーと、編み上げのブーツ

を身につけている。彼女の腕に握られているのは、金管楽器に似た美しい装飾の巨大な拳銃だ。
単発式のその拳銃に、黄金の弾薬を装塡し、彼女は迫り来る兵士たちに向けて躊躇なく発砲した。銃口から凄まじい閃光が放たれて、黒鎧の兵士たちを吹き飛ばす
「呪式銃　!?」
彼女の拳銃の正体に気づいて、雪菜が驚く。
「今のうちにこちらへ　早く」
銀髪の少女は優雅に微笑んで、古城たちを手招きした。
古城と雪菜は互いに頷き、銀髪の少女へと近づいた。容赦なく兵士たちを撃った彼女を信用する気にはなれないが、ほかに選択の余地はない
「あなたは　?」
「ラ・フォリア・リハヴァインです　また会えましたね、暁古城」
問いかける古城に、銀髪の少女は優雅な微笑で答えた。
「どうして俺の名前を?」
「暁古城なのでしょう　日本に出現したという第四真祖の」
驚いて訊き返す古城を見て、ラ・フォリアと名乗った少女は不思議そうに目を瞬く。
「ああ……そうだけど……」
「今のが最後の呪式弾でした

戸惑う古城を放置して、ラ・フォリアは一方的に会話を続ける。
古城の話を聞く気がない、というよりは、自分のペースで会話することを当然のように感じているのだろう。そのせいで、実際の口調以上に高飛車な印象を受ける。
貴族めいた豪華な服装といい、金ピカの拳銃といい、おそらく育ちのいい令嬢なのだろう。まるでお姫様気取りだな、と古城は少し呆れた。
「あいつらは？」
「メイガスクラフトの機械人形です。わたくしを追ってきたのでしょう」
「機械人形？　そうか、それで……」
古城は、呪式銃に撃たれた兵士たちが、金属部品を撒き散らして爆発したことを思い出す。肋骨や頸椎をへし折られたまま動いていたことも、機械仕掛けの兵士であれば納得だ。
「あの揚陸艇は無人です。あなたの眷獣なら、沈められますね、暁古城」
岸に乗り上げたまま待機している揚陸艇を指差して、ラ・フォリアが訊く。
「あの船を沈めたら、俺たちもこの島から出られないんじゃないか？」
「たとえ奪い取ったところで、母艦に遠隔操作されているあの船を動かすことはできません。それよりも、船の中に残っている機械人形たちのほうが脅威です」
古城の疑問に、ラ・フォリアは悠揚と答えた。
彼女が嘘をついているとは思わなかった。欺瞞やよやかしを告げるにしては、彼女の表情は

あまりにも高貴な誇り高さに満ちていたからだ。

「先輩、来ます」

古城の耳元で、雪菜が警告する。彼女が槍を向けた方角に、新たな兵士たちの一群が見えた。どうやら迷っている時間はないらしい。

やれやれ、と首を振りながら、古城は兵士たちの前に姿を晒した。

無防備に歩き出した古城を、兵士たちの銃撃が襲う。

しかしその弾丸は届かない　洩れ出した魔力が、青白い雷光となって古城の全身を覆い、銃弾を弾き飛ばしたからだ。

「悪いな、そういうことだからさ」

そう言って、古城は右腕を突き出した。

たとえ相手がただの機械だとわかっていても、人の形をしたモノを破壊することにいい気はしない。だが、こうやって先に撃ってくれれば、多少は諦めもつく。

「――疾く在れ、獅子の黄金！」

古城の腕から膨大な魔力の波動が迸る。それは荒れ狂う稲妻となって、巨大な獅子の姿を形成した。戦車をも凌ぐ巨体が咆哮し、黒鎧の兵士たちを薙ぎ払う。

天災にも匹敵するという真祖の眷獣の前には、全身鎧に覆われた機械人形がどれほど屈強であろうと無意味だった。

自身が爆発的な電力の塊である〝獅子の黄金〟の一挙手一投足は、超高熱を発し、巨大な衝撃波を生み、あるいは致死的な電磁波となって彼らを襲った。

迫り来る兵士たちを壊滅させただけでは飽き足らず、雷光の獅子は紫電と化して、海岸へと移動。停泊していた揚陸艇を跡形もなく破壊し、雄叫びを上げる。

そんな己の眷獣を眺めて、古城はぐったりと頭を抱えた。

破壊されたのは、機械人形たちだけではない。美しかった森は幅数百メートルにわたって焼き払われ、大地はえぐれ、地形までもが変わってしまっている。古城の眷獣が暴れた痕跡である。少しでも被害を抑えようと古城が懸命に制御してこの有様だ。

あらためて目にする〝第四真祖〟の眷獣の威力に、雪菜までもが目を見開いて固まっている。ただ一人、満足げに微笑んでいたのはラ・フォリアだった。

「見事です、暁古城。獅子の黄金……アヴローラ・フロレスティーナの五番目の眷獣ですね」

「あんたは、誰だ？」

長い溜息をついて、古城はラ・フォリアを真っ直ぐに見つめた。

そう。もっと早く確認するべきだったのだ。

古城の正体、そして先代の〝第四真祖〟の名前を知っている彼女が、単なる金持ちの令嬢であるはずがない。おまけに彼女はメイガスクラフトに追われているという。

ラ・フォリアが、静かに古城を見返してくる。

氷河を思わせる碧い瞳に叶瀬夏音と同じ色の瞳だ

「ラ・フォリア・リハヴァインと名乗りました」

威厳に満ちた表情で彼女は告げた

雪菜がハッとしてラ・フォリアを見る。銀髪の少女の正体に、心当たりがあったらしい。

そんな雪菜を悪戯っぽく見返して、ラ・フォリアは笑った。年相応の少女らしい笑顔だ。

「北欧アルディギア国王ルーカス・リハヴァインが長女ラ・フォリア　――アルディギア王国で王女の立場にある者です」

短いスカートの裾をつまみながら、ラ・フォリアが優雅に一礼する

自ら王女と名乗る少女を、古城はただ絶句して見つめていた

第四章 女たちの戦場

1

少女は、光の中で微睡んでいた。

意識の希薄な彼女の耳に、壮麗な音楽にも似た呪文の詠唱が、途切れることなく響いている。美しい光と音の洪水。その光を放っているのは、彼女の肌に刻印された複雑な魔術の紋様であり、その音を奏でているのは彼女自身の喉だった。

不揃いの醜い翼を広げたまま、叶瀬夏音は光の中で夢を見ている。

自らがヒトならぬ異形の存在へと変貌しつつあることを彼女は知っていた。

その変質が完全に成し遂げられたとき、叶瀬夏音という存在がこの世界から消滅することを、誰に教わるまでもなく理解していた。

そのことを、哀しいとも恐ろしいとも感じなかった。それはただそう在るというだけのこと。神の定めた世界の条理に従うということだった。

わずかに消え残った意識の中には、かすかな安堵だけがある。

彼女が助けた小さな命。その仄かな温もりの記憶。

心ない飼い主に見捨てられた子猫たちを、あれほど執拗な執念で救おうとしたのは、幼い彼らの姿に、両親を知らない自分自身を重ねていたせいだろうか。それとも完全に消滅する前に、

自分の生きた証を、この世界に残したいという無意識の願望だったのだろうか

いずれにせよ、彼女の願いは果たされた。たとえ叶瀬夏音という少女を誰もが忘れさっても、彼女が救った猫たちは自らの生命を紡ぎ続けていくだろう

ならばもう思い残すことはなにもない。同類の血にまみれた呪われたこの腕が、再び彼らを抱き上げる機会を永遠に失ってしまったとしても――

完全な眠りに落ちる直前、夏音はふと思い出す。

人間だったころの彼女の名前を、最後に呼んでくれた少年のことを

瞳を真紅に輝かせながら、膨大な魔力を放つ使い魔たちを操りながら　それでも彼は、同類の喉を喰いちぎろうとする夏音の身を案じて叫んでいたのだ。

その姿が、ぎこちなく子猫を抱いていた少年の面影と重なる。

そう……あれはたしか……凪沙ちゃんの……

「お兄さん……」

夏音の意識は、光の中に薄れて消える。

眠り続ける彼女の目から、涙がひとしずく流れ落ちていく。

2

その船は、紘神島の沖約二十キロ地点の海上に停泊していた。

メイガスクラフト所有の商用貨物船〝アマルゴーサ〟である。

本来は工場で生産された作業機械を輸出するための船だが、広大な船倉に積まれているのは、揚陸艇が一隻と、戦闘用の機械人形が数十体だけ。老朽化した船体は本来の役目を終え、現在は叶瀬賢生のための研究のために貸し出されているのだった。

「はー、怠……やっぱ、肩凝るわー、この服。暑いし……」

錆びの浮いた階段を、ベアトリス・バスラーが気怠そうな足取りで降りていく。連絡用の小型艇を自ら操縦し、紘神島から移動してきた直後である。

仕立てのいいジャケットを脱ぎ捨てながら、ベアトリスは、ブラウスのボタンを上から順番に外す。豊かな胸を殊更に誇示するような姿になったところで、彼女は髪を無造作に解いた。理知的な研究主任の仮面が剝がれて、攻撃的な本来の性格が露になる。

電波接続が途切れた魔族登録証を外し、彼女は分厚い金属扉を開けた。船倉を改造して積みこんだ気密区画。叶瀬賢生が魔導儀式を行うために用意した実験室の扉である。

「相変わらず殺風景な実験船ね。食事もまずいし。よくこんなところに籠もってられるわ」

叶瀬賢生が〝祭壇〟と呼ぶ実験室を見回して、ベアトリスが感慨の乏しい声を出す。

無数の医療機器を詰めこんだ、狭苦しい部屋だ。大病院の集中治療室のようでもあるし、危険な細菌を扱う実験室のようでもある。あるいは神を祭り上げる荘厳な神殿のようにもいずれにしても、魔族であるベアトリスにとって居心地の好さとは縁遠い場所だ。

「違法な実験だ。仕方あるまい」

ベアトリスの問いかけに応じたのは、部屋の奥に立っていた男だった。

峻厳な顔つきをした、白髪混じりの男だ。年齢は、間もなく五十に手が届くかというあたり。さして大柄でもないが、奇妙な威圧感のある男だった。それは彼の外見が、敬虔な聖職者の姿を連想させるせいかもしれない。

しかし彼は僧侶でも牧師でもなかった。むしろ彼らの対極に位置する信念の持ち主だ。錬金術と魔術を極め、己が手で奇跡を生み出すことにより、世界を変革しようと企てる者。

すなわち魔導技師――叶瀬賢生である。

「想定どおりとはいえ、第五段階以上の模造天使は、起動時の瘴気発生量が多すぎる。いくら〝魔族特区〟でも、これだけの瘴気を垂れ流せば、特区警備隊の強制捜査は免れんからな」

飽くことなく正面のガラス窓を眺めて、賢生は言う。

幾重にも重ねられた強化ガラスの向こう側には、一人の少女が眠っていた。

純白の壁と、聖句を刻んだ大理石の床。医療用の電子機器に取り囲まれて、七台のベッドが

置かれている　しかし眠っている少女は一人だけだ。今はもう彼女だけ。

「――で、どうなのよ。〝天使もどき〟の具合は」

無関心な口調でベアトリスが訊いた。振り返りもせずに、賢生が答えた。

「順調だ。外部から取りこんだ霊的中枢との小径も安定した。前回の戦闘のダメージが若干残っているが、それも今夜までには回復するだろう」

「戦闘中に、例の仮面がぶっ壊れたって聞いたわよ」

眠り続けている少女を眺めて、ベアトリスが咎める。

本来、少女の美しい素顔は、金属製の仮面によって覆い隠されているべきものだった。

「影響は軽微だ　問題ない。もともと第七段階に到達した時点で、思考拘束具が無力化されることは予想されていた」

「あっそう。そんなんで、どうやってあの化け物を制御するつもり？」

「制御……？　そんなことができるものか」

振り返った賢生が、薄く嘲笑うような表情を浮かべた。

「まがい物とはいえ神の御使いだからな。この段階まで到達した模造天使は、一度解き放ってしまえば、もはや天災と変わらん。道具として操ろうなどとは考えないことだ」

「……聞いてないわよ、そんな話」

ベアトリスが細い眉を吊り上げる。

叶瀬賢生が生み出そうとしているモノは、出資者であるメイガスクラフトにとっては、ただの商品である。制御できない道具など、売り物としてはなんの価値もない。

「心配妥らんよ。爆弾の一種だとでも思えばいい。覚醒した模造天使は、本能の赴くままに敵と戦い、役目を終えれば昇天する。言葉どおりの意味でな」

「あー……そういうこと……まあ、それならそれで売りようはある、か」

髪を乱暴にかき上げながらそう呟いて、ベアトリスは再びベッドの上の少女に目を向けた。不揃いの醜い翼を広げた銀髪の娘。かつて叶瀬夏音と呼ばれていた少女である。

「結局、生き残ったのは、あんたの〝娘〟だったってわけね。感想は？」

「最初から予想されていたことだ」

賢生が突き放すように淡々と告げる。

「番狂わせはなにもなかった。素体の差だな」

「不貞の娘だろうが、さすがは王家の血筋ってことね」

嘲るような表情でベアトリスが笑った。

無感情だった賢生の瞳に、冷たい怒りに似た光が宿る。

「……そんなくだらない話をしにわざわざ来たのか、ＢＢ」

ＢＢ　ベアトリス・バスラーは、まさか、と大げさに肩をすくめてみせた

「第四真祖を確保したわ」

「世界最強の吸血鬼、か。前回の儀式に割りこんできたのは、やはり真祖だったのか」
「なんせ獅子王機関の剣巫が監視役でくっついてるからね……本物の第四真祖かどうかはともかく、新製品の箔付けとしちゃ願ってもない相手だわ。本社の連中も、喜ぶでしょーよ」
ベアトリスが弾んだ声を出す。賢生は長い黙考のあとで、重々しく訊き返した。
「第四真祖はどこだ？」
「金魚鉢よ。知ってるでしょう、機械人形どもの実弾演習場。なんなら島ごと沈めてくれてもいいわよ」
「いいだろう。最終進化の触媒としては申し分ない相手だ」
賢生が重々しく頷き返す。ベアトリスは華やかに微笑んで、きびすを返した。
「決まりね。船長に船を動かすように言っとくわ　」
そのときベアトリスの胸元で、短い電子音が鳴った。業務用の無線端末に着信があったのだ。液晶画面に表示されたメッセージを一瞥して、ベアトリスはつまらなそうに鼻を鳴らす。
「なんだ？」
「キリシマからよ。探し物が見つかったらしいわ。あのアルディギアの雌豚も、金魚鉢に流れ着いてたみたい……まあ、位置的に予想どおりではあったわね」
「ラ・フォリア王女か……まだ生きていたとはな。運のいいことだ……いや、彼女にとっては無用な苦しみが長引いただけかも知れんが」

含みのある口調でそう呟くと、賢生は王女を憐れむように溜息をついた。カード状の無線端末をブラウスの胸元に窮屈そうに押しこんで、ベアトリスが酷薄に目を細める。

「これで遠慮なく、叶瀬夏音は使い潰せるわね」

「ああ」

眠り続ける夏音を無表情に眺めて、賢生は重々しく頷いた

「ああ……そうだな」

3

ラ・フォリアが乗ってきた救命ポッドは、島の西側の岸に打ち上げられていた　絃神島から見て外洋側。島の中央の泉を挟んで、ちょうど古城たちがいたトーチカの反対側である。

「あんた、本当に王女様だったんだな……」

砂浜に残された救命ポッドを見て、古城がしみじみと感想を呟いた。

「なぜ嘘をつく必要がありますか」

ラ・フォリアは、混乱している古城を見て首を傾ける。

王族専用船の装備品だけあって、彼女の救命ポッドは、恐ろしく豪華な仕様になっていた。プラスチックの殻に覆われた卵形の本体と、自動で膨らむゴム製の浮力具。形状だけなら、

古城が思い描く救命ポッドのイメージからそう大きく外れてもいないのだが、なにしろ外装が純金張りである。錆びず、腐食せず、導電性に優れて落雷に強いというのがその理由だそうだ。

ポッドの内装は本革で、狭いながらも立派なベッドを備え、飲料水や食料はもちろんのこと、温水洗浄便座まで備えているという快適ぶりである。

こんな救命ポッドに乗っている人間は、どう考えても王族以外にあるまい、と思う。何日も漂流していながら、ラ・フォリアが身綺麗なままだった理由も納得だ。

「あんたのことは、なんて呼べばいいんだ。殿下でいいのか？」

王女からもらった非常食を齧りながら、古城が訊く。と、彼女は少しムッとして、

「ラ・フォリアです、古城。殿下も姫様も王女も聞き飽きました。せめて異国の友人には、そのような堅苦しい言葉で呼んで欲しくありません。あなたもですよ、雪菜」

「え？　いえ、ですが、しかし……」

雪菜がびっくりしたように首を振る。いちおう政府機関の一員である彼女としては、そのような馴れ馴れしい距離感にはやはり抵抗があるのだろう　しかしそんな雪菜の反応を見てなにを思ったのか、

「そう……愛称という手もありますね」

ラ・フォリアが、ふむ、と真剣な表情で考えこむ。そして王女は得意げに微笑み、

「たとえば、そう和風に、フォリりん　これならば認めましょう。ふふ、わたくし、こう見えて日本文化にも詳しいのですよ」

「……いえ、僭越ながらご尊名で呼ばせていただきます、ラ・フォリア」

雪菜が諦めたような口調で言った。このままでは本当にふざけたあだ名で呼ばされかねない、と危機感を覚えたのだろう。たしかに王女の日本語は流暢だったが、そのあだ名は少なくとも和風ではない。

ちなみに雪菜は、洗濯中だった制服を回収してすでに着替えていた　にわか雨の多い土地柄、彩海学園の制服には乾きの速い生地が使われているのだ

「で、あんたはなんでこんなところにいるんだ？」

ようやく空腹がまぎれてきたところで、古城が訊いた。すでに明け方近い時刻のはずだが、さすがに銃撃戦の直後ということで、まだ眠気は感じない。

「紋神市を訪問する途中に、船が撃墜されたのです」

ラ・フォリアが事も無げな口調で言う。驚いたのは古城たちのほうだった

「撃墜……!?」

ひょっとしてメイガスクラフトにですか？」

古城と雪菜が口々に訊く。

「そうです。おそらく、わたくしを拉致するためでしょう」

犠牲になった部下たちを哀悼するように、ラ・フォリアはかすかに目を伏せて頷いた。

彼女を乗せた装甲飛行船が撃墜されたのは、六日前。ちょうど紋神市で〝仮面憑き〟の騒ぎが起きた夜のことである。

その日、ラ・フォリアは、護衛の騎士団とともに、王家の装甲飛行船で紋神島へと向かっていたのだという。そしてこの付近の海域に差しかかったとき、彼女たちは突然の襲撃を受けた。高度一千メートルへの深夜の奇襲である。

後手に回った騎士団は戦力の大半を喪失し、不利を悟った侍従たちの手で、ラ・フォリアは救命ポッドに押しこまれた。そして抵抗する間もなく射出されたポッドは、海に落ちた。

ラ・フォリアは洋上を、日あまり彷徨い、そしてこの無人島へと漂着したらしい。

「……メイガスクラフトの連中、身代金でも要求する気だったのか？」

素朴な疑問を抱いて、古城が訊く。民間企業であるメイガスクラフトの雇われ魔族たちが、一国の王家の船を襲撃する理由をほかに思いつかない。

しかしラ・フォリアは静かに首を振る。

「彼らの狙いはわたくしの身体、アルディギア王家の血筋です」

「……血筋？」

「はい。アルディギア王家に生まれた女子は、ほぼ例外なく全員が強力な霊媒ですから」

「霊媒……巫女ってことか」

古城は、そう言ってちらりと雪菜を見た。

獅子王機関によって見出された雪菜も、優れた素質を持つ巫女のはずである。実際、彼女の霊視力や神憑りの強力さを、古城は間近で見てよく知っている。しかしそんな雪菜ですら、誰かに狙われるようなことはなかった。だとすれば、ラ・フォリアの霊媒としての能力は、どれほどのものなのか、古城にはもはや想像もつかない。

そんな古城の疑問に答えるように、ラ・フォリアが続けた。

「――メイガスクラフトに雇われている叶瀬賢生は、かつてアルディギアの王宮に仕えていた宮廷魔導技師でした。彼が知っている魔術奥義の多くは、霊媒としての王族の力を必要とします。だから危険を冒して、わたくしを攫おうとしたのでしょう」

「叶瀬賢生って……叶瀬夏音の父親のことか？」

思いがけず聞かされたその名前に、古城が息を呑む。

ラ・フォリアは表情を変えずに古城を見返し、

「あの男は叶瀬夏音の本当の父親ではありません」

「それは知ってる。叶瀬は子どものころは修道院で暮らしてたって言ってたからな」

古城は大きく溜息をついて、王女に向き直った。彼女の淡い碧眼を、正面から睨みつける。

「……あんたと叶瀬夏音はどういう関係なんだ。なんであんたたちはそんなに似てる？」

「似ていますか、わたくしたち？　日本人にはあまり西洋人の見分けがつかないと聞きますが」

ラ・フォリアが目を瞬いて訊き返した。特にとぼけているわけではないらしい

「そういうレベルの問題じゃねえ！　いくらなんでも似すぎだろ！」

思わず王女に詰め寄りながら、古城が怒鳴る。

ラ・フォリアは、古城を見つめたまま沈黙した。なにかを隠そうとしている、というよりは、個人の重大な秘密を口にすることをためらっている、という種類の沈黙だった。

「叶瀬夏音の本当の父親は、わたくしの祖父です」

「……そふ？　お祖父さん？」

言葉の意味がよく理解できないまま、古城はオウム返しに訊き返す。ラ・フォリアの祖父ということは、アルディギアの前国王ということか？

「十五年前、祖父がアルディギアに住んでいた日本人女性との間に作った娘が、叶瀬夏音です」

「……え？」

もちろんわたくしの祖母　当時の王妃にとっては浮気ということになります。叶瀬夏音の母親は、出産の直後に祖父に迷惑をかけまいと日本に帰国。それを後で知った祖父が、彼女のために建てたのが――」

「叶瀬さんの育った修道院……なんですね」

雪菜が、ラ・フォリアの言葉を引き継いで言った。夏音によく似た異国の王女に遭遇したときから、彼女はそのことを薄々予感していたのかもしれない。

古城は、公園の片隅にひっそりと立つ修道院の姿を思い出す。
あの修道院は、夏音の母親のために建てられたものだとラ・フォリアは言った。
だとすれば、夏音の母親もそこにいたはずだ。
つまり夏音は、実の母と一緒に暮らしていたのかもしれない。本人が名乗らなかっただけで、夏音の母親は、娘のことを近くで見守っていたのかもしれない　が、
「ちょっと待て。あんたの祖父さんって、アルディギアの先代国王だろ!?　その人が父親ってことは、叶瀬の立場は　――」
「わたくしの叔母、ということになりますね」
ラ・フォリアの答えは、古城をさらに混乱させただけだった。見た感じ、王女の年齢は十七、八といったところ　明らかに夏音よりも年上である　が、夏音にとってはラ・フォリアは姪になるらしい。とにかく彼女たち二人は、かなり近い親戚なのだ　つまり
「E位継承権はありませんが、王族の一員であることに違いはありません」
「お、王族……って」
「先日、祖父の腹心だった重臣が他界しまして、彼の遺言で叶瀬夏音の存在が発覚しました。祖父が逃亡して祖母は怒り狂っ……いえ、王宮内は今、少々混乱しています　ですが、彼女をこのまま放っておくわけにもいきませんし」
王女がめずらしく弱気な溜息をつく。

古城は無言で夜明け前の空を見上げた。夏音が異国の国王の娘。スケールが大きすぎて現実感が湧かない。そのせいで妙に冷静な気分になる

「だからあんたは紋神市に行こうとしてたのか」

「はい。祖父の名代として、わたくしが叶瀬夏音を迎えに行く予定でした」

ラ・フォリアは淡々と首肯する。古城は、ふと数日前の深夜の電話を思い出し、

「そう言えば煌坂が言ってたな。護衛するはずだったアルディギアの要人にトラブルがあった、って。あれはあんたのことだったのか」

「獅子王機関の煌坂紗矢華ですね。あなたの情婦の――」

ラ・フォリアが、好奇心の滲む悪戯っぽい表情で古城を見た。

「……情婦？」

「彼女は第四真祖の愛人の一人だと聞きました。愛欲にまみれた淫猥な関係だと――」

ぐはっ、と古城が激しく咳きこんだ　隣にいる雪菜の冷ややかな視線が肌に刺さる。

「――そんなわけあるかっ！　誰がそんな無責任な噂をあんたに吹きこんだ!?」

ディミトリエ・ヴァトラーです。戦王領域の貴族の」

王女があっさり白状する。それはそれで意外な名前　ではあったが。

「あああ、あの男は……っ！　って、なんであんたが、あんなやつと知り合いなんだ!?」

「国交があるのです。アルディギアは、彼の領地と国境の一部を接していますから」

「ぐ……」

古城はもう声も出ない。言われてみれば、あの傍迷惑な戦闘狂も、立派な貴族なのだった。アルディギア王国と、戦王領域アルデアル領。名前も少し似てる気がする。

「叶瀬賢生が使う魔術には、アルディギア王族の力が必要だと仰いましたね」

動揺から立ち直れない古城の代わりに、質問したのは雪菜だった

ラ・フォリアも真面目な表情で頷いた。

「五年前、叶瀬夏音が育った修道院で事故が起きたことは知っています。幼かった叶瀬夏音が無自覚に霊媒としての力を暴走させてしまったのでしょう。賢生は、その事件がきっかけで、彼女がアルディギアの王族だと気づいたのではないでしょうか」

「だから叶瀬のことを養女として引き取ったのか　自分の魔術儀式の霊媒に使うために」

苦々しい表情で古城が呟く　叶瀬親子の関係については、最悪の予想が当たってしまったわけだ。

「……あなたは知っているのですか、古城？　賢生の魔術儀式がどのようなものか」

古城に問いかけるラ・フォリアの声には、これまでにない深刻な響きがあった

彼女の威厳に圧倒されて、古城も表情を硬くする。

「俺たちが見たとき、叶瀬は……怪物のような姿に変えられて、自分の同類と殺し合ってた」

「そうですか　やはり賢生は模造天使を」

「……模造天使？」

聞き慣れなくも禍々しい言葉の響きに、古城は眉を寄せる。

「賢生が研究していた魔術儀式です。人為的な霊的進化を引き起こすことで、人間をより高次の存在へと生まれ変わらせるのが目的ですが」

「叶瀬のあの姿が、霊的に進化した存在だってのかよ……」

放心したように目を見開いて、古城は弱々しく首を振った。不揃いな醜い翼を広げ、同類の喉を噛みちぎっていた夏音のことが頭から離れない　あれが霊的な進化だなどと、ましてや天使だなどと、いったい誰が信じる気になれようか　？

！」

古城とラ・フォリアが見つめ合う息苦しい沈黙の中、雪菜が唐突に立ち上がった。彼女が握った銀色の槍が、滑らかなスライド音を残して刃を展開する。

「姫柊？」

「船です」

驚いて振り返る古城たちに、雪菜が告げた。彼女が見ている水平線の片隅に、水飛沫を撒き散らして進む黒い船がある。古城が破壊したのと同じ、軍用の揚陸艇である。

「あの船……また機械人形か？」

うんざりとした気分を味わいながら、古城がうめいた。

機械仕掛けの兵士たちが、何度攻めて来ても同じことだ。古城の眷獣が根こそぎ破壊する。ラ・フォリアの救命ポッドには、救難信号の発信器が積まれていた。これまではメイガスクラフトに傍受される危険があって使えなかったらしいが、古城たちと合流した以上、もはや彼らを恐れる必要はなくなった。付近の海域には王女の捜索隊が派遣されているだろうし、救難信号を発信すれば、彼らがすぐに駆けつけてくるだろう。

だから、乗っ取っても役に立たないメイガスクラフトの無人船は、遠慮なく沈めることができる。そう思って、古城はさっそく眷獣を召喚しようとする。が、

「いえ、あれは――」

そんな古城を制止するように、雪菜が言う。

彼女が指さしたものを見て、古城はその声に混じる戸惑いの理由を知った。

無骨な揚陸艇の甲板上に、見覚えのある人影が立っていた。

大柄な美女と、どこかやさぐれた印象の痩せた男。ベアトリスとキリシマだ。

そのキリシマが自分たちに向けて振り回しているものに気づいて、古城は軽い頭痛を覚える。

それは巨大な無地の布きれ。停戦の意思を示す白旗だった。

4

ベアトリスたちの揚陸艇が接岸したのは、奇しくも、数時間前に機械人形たちが上陸してきたのと同じ入り江だった。

古城の眷獣に焼き払われたその場所は、玄武岩質の岩肌が剝き出しになった平坦な地形で、単純に船を着けるのに都合が良かったという理由だろう。

最初に船を下りてきたのはベアトリス。革製の深紅のボディスーツが、彼女の豊満な肉体の線をくっきりと浮かび上がらせている。

彼女に続いて、聖職者を思わせる黒服の男が上陸してくる。

最後に、馬鹿でかい旗竿を担いだままキリシマが甲板から顔を出し、

「よう、バカップル。元気そうだな。仲良くしてたか　？」

「……ロウ・キリシマ……てめえ、よくもぬけぬけと」

殺気立った目で古城に睨まれて、彼は慌てて白旗を振った。

「待て待て。恨むならあの女を恨めって言ったろ。俺はただの使いっ走りだっての」

部下に責任を押しつけられたベアトリスが、気怠げに髪をかき上げる。

艶めかしくも退廃的な色香を振りまく彼女に、古城は言いかけた文句を忘れて黙りこんだ。

どことなく責めるような目つきで、雪菜がそんな古城を睨む。そして、
「久しぶりですね、叶瀬賢生」
無防備に前に歩み出たラ・フォリアが、黒服の男を見つめて言った。
自分の胸に手を当てて、叶瀬賢生が恭しく礼をする。
「殿下におかれましてはご機嫌麗しく……七年ぶりでしょうか　お美しくなられましたね」
「わたくしの血族をおのが儀式の供物にしておいて、よくもぬけぬけと言えたものですね」
冷ややかな口調で、ラ・フォリアが答えた。しかし賢生は表情を変えない。
「お言葉ですが殿下。神に誓って、私は夏音を蔑ろに扱ったことはありません　私があれを、実の娘同然に扱わなければならない理由――今のあなたにはおわかりのはず」
「実の娘同然の者を、人外の者に仕立て上げようとしたと言うのですか」
ラ・フォリアの口調に、非難の響きが混じる。
「いえ、むしろ実の娘同然なればこそ、と申し上げましょう」
悪びれない賢生の言葉を聞いて、銀髪の王女が溜息をついた。
「叶瀬夏音はどこです、賢生」
「我々が用意した模造天使の素体は七人。夏音はこれらのうち二人を自ら倒し、途中で敗北した者たちのぶんも含めて六つの霊的中枢を手に入れました。人が生まれ持つ七つの霊的中枢と合わせて、これで十三。それらを結びつける小径は二十　これは人間が己の霊格を一段階引

き上げるのに必要十分な最低数です」

賢生が丁寧な口調で告げる。そのよどみない口振りには、たしかにかつての宮廷魔導技師の趣があった。そんな彼の一方的な説明を聞いて、雪菜が突然青ざめる

「まさか……!?」

「姫柊？」

叶瀬さんは、そのために自分の同類を……!? なんて……ことを……！」

大きく見開かれた雪菜の瞳には、恐怖と驚愕、そして賢生に対する怒りの色が浮かんでいた。彼女が、こんなにも強い感情を他人にぶつけるのは、滅多にないことだ。賢生の説明は理解できなくとも、古城を動揺させるにはそれだけで十分だった。

「模造天使の儀式というのは、いわゆる蠱毒の応用です。候補者同士を互いに戦わせ、相手の霊的中枢を喰らって自らの体内に取り入れる。取り入れるといっても、霊的な意味で、ですが。そして生き残った最良の一体を創り出す」

困惑している古城のために、ラ・フォリアが説明した。

「霊的中枢とは、チャクラなどとも呼ばれる、いわば霊力によって奇跡を生み出す回路だ」

彼女の言葉に続けて、賢生が言った。

「すべての人間に等しく備わっているが、それを駆動できる者は多くない。一流の霊能者でも、能力の三割も引き出せれば上等だろう。すべてを使いこなせれば、覚者として、神仏に等しい

力を得られるであろうにな」

どこか哀しげな諦観にも似た表情で、賢生が嘲笑う。

ラ・フォリアは彼を冷たく睨んだまま、

「回路の出力が足りなければ、数を増やせばいい、というのが賢生の仮説です　七人の模造天使候補者は、魔術的に人体の限界まで強化された霊的中枢を、それぞれひとつずつ持っている。そして他の候補者の霊的中枢を奪って自らの体内に取り入れることで――」

「人間の肉体の霊的容量を超えることなく、霊的進化が可能になる、というわけだ　ヒトよりも神に近きモノ、すなわち天使に」

交互に続けられた王女と賢生の説明を聞き終え、古城はようやく理解した。人類を強制的に天使の高みまで引き上げる。たしかにラ・フォリアが語っていたとおりの魔術儀式だ。夏音が、倒した同類の肉体を喰らっていたことにも納得がいく。

「だけど、なんでそんな儀式に、おまえらの会社が手を貸してるんだ？　メイガスクラフトは掃除用ロボットのメーカーじゃなかったのかよ」

古城はキリシマを睨んで訊いた。儀式の正体は判明した。だが、一般の営利企業が、そんな非人道的な実験のために、資金や人材を提供する理由がわからなかった。

儀式の一環である〝仮面憑き〟同士の戦闘は、紋神島内の市街地に甚大な被害を出している。いくら〝魔族特区〟でも許されることではない。完璧な違法行為である。

「いやー……それがな、うちの会社やっべーんだわ……経営状態が」
「は？」
「掃除用ロボットなんて、価格競争は激しいわ、技術革新は速ェわで、利幅が薄くてな……仕方ねーから、戦争用の機械人形なんてものを開発してみたんだが、これがまた売れなくてよまあ、お姫様の呪式銃一発で壊滅するような性能じゃ無理もねーんだが、実弾演習のために大枚はたいて、この島を丸ごと借り上げたりしたのによ」
キリシマが、ガリガリと鼻の頭をかきながら言った。どこか的外れにも思える彼の言い訳に、古城は顔をしかめただけだ。
そしてキリシマは皮肉っぽく笑い、
「そんなわけで、うちらとしては兵器としての人工天使に社運をかけてるわけよ」
「兵器……って、なんだよ……どういう意味だ!?」
古城の背筋に冷たい感覚が這い上ってくる。
那月の攻撃や雪菜の槍、古城の眷獣さえも寄せ付けなかった〝仮面憑き〟
もしあれが霊的進化のための実験体などではなく、単なる兵器として量産されたらどうなるか。考えるまでもなく、わかりきっていた。既存の軍事バランスなど容易く覆す最強の兵器になるに違いない。買い手はいくらでもいるはずだ。
「はー……もう、面倒臭。そういう細かい話はいーのよ。どうせガキにはわかんないんだから。

会社経営の難しさだの、雇われ魔族の苦労だのはさ」

それまで沈黙していたベアトリスが、業を煮やしたように言い放った。

「とにかくそういうことだから、こっちの要求を伝えるわ。まずはアルディギアのお姫様、あんたは無駄な抵抗をやめて投降しな。大丈夫よ、大人しくしてれば命までは取らないわ」

「企業の走狗ごときが、このわたくしに指図しますか　ずいぶんとのぼせ上がったものですね」

ラ・フォリアが、蔑むような視線をベアトリスに向けた

赤い唇を吊り上げて、ベアトリスは獰猛に犬歯を剥く　不自然なほど巨大な白い牙だ

「舐めた口を利いてくれるじゃないの、雌豚。まあいいわ。今すぐあんたを殺す気はないから。代わりに死んだほうがマシってくらい、気持ちいい思いをさせてあげる」

酷薄そうに舌なめずりをして、彼女は気怠げな視線を古城たちに向けた

「で、あんたたち。人にはチャンスをあげる」

どういう意味だ、と古城はベアトリスを睨む。

しかし動いたのは彼女ではなく、賢生だった。彼が黒服の懐から小型の制御端末を取り出し、それを見たキリシマが、甲板に積まれていたコンテナケースの蓋を開ける

棺桶に似た形の気密コンテナだ

その中で横たわっていた小柄な少女が、白い冷気をまとったままゆっくりと起き上がる

患者着に似た簡素な衣服　剝き出しの細い手足。零れ落ちる銀髪　そして不揃いな醜い翼

「　　叶瀬！」

「叶瀬さん!?」

眠りから目覚めた少女に向かって、古城と雪菜が同時に叫んだ。

ベアトリスは、なんの感慨も湧かないという瞳でそれを眺め、

「第四真祖に、獅子王機関の剣巫。二人がかりで構わないからさ。あの子と本気で戦ってやってくれる？」

彼女の口が紡いだ言葉に、古城は怒りを通り越して唖然とする。

「――っざけんな。なんで俺たちがそんなことをしなきゃなんねーんだよ!?」

「そんなこと、わかりきってるでしょうが。売り込みに使うのよ。我が社の〝大使もどき〟が、世界最強の吸血鬼をぶち殺しました――ってね」

物わかりの悪い幼児を見るような、鬱陶しげな表情でベアトリスが言う。

そんな彼女に、雪菜が研ぎ澄まされた刃のような闘気を向けた。

「叶瀬さんを、兵器として売り出すつもりですか」

「ちょっと違うけど、まあそんなに外れてもないわね」

クックッ、とやる気のない声で笑いながら、ベアトリスは目を細め、

「戦う気がないってんなら、べつにそれでも構わないわよ。大人しく死んでもらうだけだから。残念ね。無事に生き残れたら、あんたたちは見逃してあげようと思ってたのに――それにほら、

彼女はすっかりやる気みたいよ」

「なに……!?」

夏音の身体から噴き出した異様な瘴気に気づいて、古城は愕然とした

不揃いな翼を展開して、夏音がゆっくりと浮上する。見開かれた彼女の目に感情の色はなく、瞳孔は焦点を結んでいない。

「あなたはそれでいいのですか、賢生」

制御端末を握る賢生を見つめて、ラ・フォリアが問いかけた。

賢生は、E女の視線から逃れるように背後を振り向き、端末に向かって呼びかける

「起動しろ、XDA - 7。最後の儀式だ」

5

その一瞬になにが起きたのか、古城はすぐには理解できなかった

翼を広げた夏音が浮上する　そう思われた瞬間、古城の視界の片隅を、銀色の閃光が駆け抜けていた。

閃光の正体は雪菜の槍だ〝雪霞狼〟を構えた雪菜が弾丸のような勢いで跳躍し、その刃を夏音へと突き立てる。

魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を切り裂く降魔の槍。

夏音が、魔術儀式によって造られた人工の天使だというのなら、その魔術そのものを無効化してしまえばいい。雪菜はそう考えたのだろう。そして夏音が起動する前の一瞬の隙に、それを実行しようとしたのだ。が、

「くっ――!?」

夏音の肌に穂先が届いたその瞬間、弾き飛ばされたのは雪菜のほうだった。突っ込んできたのと同じ勢いで後方に吹き飛び、槍を地面に突き立てながら、どうにか無事に着地する

「これは!?」

反動で痺れた手を庇いながら、驚愕の表情で雪菜がうめいた。

夏音は、そんな雪菜に一瞥もくれず、何事もなかったかのように空へと舞い上がる

「神格振動波駆動術式……獅子王機関の秘奥兵器〝七式突撃降魔機槍〟か」

銀光を放つ雪菜の槍を眺めて、賢生は満足そうに呟いた。

「無駄なことだ。人の手で生み出した神の波動が、本物の神性を帯びた模造天使を傷つけられる道理もあるまい」

「そんな……ことが……」

雪菜がきつく唇を噛む。真祖の眷獣すら斃し得る彼女の槍が、ここまで完全に無効化されたのは初めてのことだ。さしもの雪菜も動揺を隠せない。

だがそれでも、雪菜の次の決断は早かった。制御端末を持つ賢生へと向き直り、彼女は再び走り出す。模造天使本体が止められないというのなら、それを制御している術者を排除するしかない。当然といえば当然の結論だが、雪菜のその判断の素早さは十分に称賛に値するだろう。

しかし、そんな彼女が繰り出した槍は、深紅の一閃に阻まれる

「だから、あんたの相手はそっちじゃないっての」

気怠い口調でぼやきながら、雪菜の前に立ちはだかったのはベアトリスだった　噴き出す鮮血のような勢いで、彼女の手の中に出現したのは紅い槍　大柄なベアトリスの身の丈をも上回る長槍である。

ベアトリスと雪菜の身長差は二十センチ近く。深紅のボディスーツをまとう肉感的な美女に対して、制服姿の雪菜は見るからに華奢だ　同じように長槍を構えていても、その威圧感には大人と子どもほどの落差がある

しかし雪菜は怯むことなく間合いを詰めた。ベアトリスの深紅の槍から放たれているのは、禍々しくも強烈な魔力の波動。あの槍が、なんらかの魔術によって生み出された武器であるのは間違いない。ならばこそ〝雪霞狼〟を持つ雪菜の敵ではないはずだった　降魔の槍の一撃は、あの深紅の槍を瞬時に消滅させるはず　―

そんな雪菜の思いを嘲るように、ベアトリスが哄笑した。

「〝蛇紅羅〟！　串刺しにしてやんな！」

「……っ!?」

雪菜の槍が、ベアトリスの深紅の槍を巻きこんで打ち落とす　その寸前、深紅の槍が蛇のようにしなって、あり得ない角度から雪菜を襲った

雪菜がその奇襲を避けられたのは、一瞬先の未来を察知する剣巫の霊視の賜物だ

ベアトリスの手の中で、深紅の槍は生物のように形を変え、死角から次々に雪菜を襲う、間合いも型も、使い手であるベアトリスの動きすら無関係に自ら攻撃を仕掛けてくるのだ。

「まさか　眷獣が、槍の形に!?」

「意思を持つ武器ってやつだよ……そうめずらしいもんでもないだろ?」

勝ち誇るでもなく、ただ無感動な声でベアトリスが告げた。その間にも深紅の槍は、絶え間なく刺突を繰り返し、雪菜はそれを片っ端から迎撃する

古城は、もはやその攻撃を視界に捉えることもできず、ただ驚きに打たれていた。

「武器の形をした眷獣……だと!?」

ベアトリスが吸血鬼だということは、古城も薄々気づいていた　おそらくヴァトラーとは異なる血族。〝第二真祖〟か〝第三真祖〟の末裔だろう。

もちろん古城も、自分以外の吸血鬼との遭遇は初めてではない。ディミトリエ・ヴァトラーのような〝旧き世代〟の吸血鬼に比べれば、彼女の眷獣の攻撃力は貧弱といってもいい。

なのに、その貧弱な眷獣しか持たないベアトリスに、雪菜が圧倒されている。槍でもあり、

使い魔でもあるという彼女の眷獣の属性は、それほどまでに脅威なのだ。

そもそも強力すぎる眷獣の攻撃力のほとんどは、対人戦闘においては無意味である。無差別に破壊を撒き散らす爆弾のようなものだ。しかしベアトリスの〝棺〟は、攻撃力のすべてを、一人の敵に注ぎこむことができる。どちらが効率的かは考えるまでもなかった。

「さて……じゃあ、こっちはこっちで仕事を終わらせるか」

雪菜がベアトリスに苦戦していることを確認して、キリシマが船から飛び降りた。だらしなくポケットに手を突っ込んだまま、彼はラ・フォリアへと近づいていく。予定どおり王女を確保するつもりなのだろう。

ラ・フォリアが腰から銃を引き抜いた。愛用の呪式銃ではなく、通常の機関拳銃である。樹脂素材を多用したフレームは比較的小型で軽く、ラ・フォリアの繊手にも違和感なく収まっている。

「離れなさい、獣人」

警告とほぼ同時に、ラ・フォリアは発砲した。至近距離からのフルオート射撃だ。一瞬で撃ち尽くされた十七発の弾丸が、無防備に立つキリシマに降りそそぐ。

「琥珀金弾か。いい弾だ。だが……惜しいな」

獣化した手でつかみ取った弾丸を足元にばらまいて、キリシマは笑った。彼の痩身が一回り大きく膨れあがり、漆黒の毛並みの獣人と化していく。

「なぜこんな安物に頼る？　王家ご自慢の呪式銃は弾切れか、お姫様？」

皮肉るような口調でキリシマが言う　ラ・フォリアは、無言で後退しながら予備弾倉に交換

王女とは思えない手際の良さで拳銃の再装填を終える

そして彼女は、驚いたようにキリシマの背後の空を見上げた。

彼女の反応に興味を惹かれたのか、キリシマも頭上に目を向ける。そこに浮かんでいたのは、

全身を魔術紋様に輝かせた叶瀬夏音だ。

「Ｋｙｉｉｉ

ころとは、比較にならない圧倒的な魔力。
いや、これはもはや魔力ではない　神気とでも呼ぶべき代物だ
「気をつけてください、先輩！　彼女の狙いは　―」
ベアトリスとの睨み合いを続けながら、雪菜が叫んだ
模造天使の出現によって、地上の戦闘は小康状態に陥っていた。
キリシマは王女の確保を後回しにして頭上を眺めたままだし、ベアトリスも無理に雪菜の相手をする気はないようだ。結局のところ、彼らも模造天使の出方をうかがっているのだろう
「Kyriiiiiiiiiiii　　！」
再び夏音が咆吼する。同時に彼女の翼面の眼球が、太陽のような眩い光を放った。
放たれたその閃光は、巨大な光の剣となって、上空から古城へと降りそそぐ。
「やめろ、叶瀬……！」
大地に突き立った黄金の剣は、巨大な爆発を生み出し、地上に凄まじい破壊をもたらした。
硬い岩盤が粉微塵に砕け散り、紅蓮の炎が吹き荒れる。
しかも夏音の攻撃はそれだけでは終わらない。三対六枚の翼が羽ばたくごとに、見開かれた巨大な眼球が閃光を放つ　それは明らかに古城を狙って、次々に地面へと撃ちこまれた。
神の御使いたる模造天使にとって、神に呪われた〝負〟の生命力の塊である吸血鬼は、滅ぼさずにいられない〝天敵〟なのだろう。ましてやそれが、真祖であれば尚更だ

「くそ　疾く在れ、〝獅子の黄金〟！　〝双角の深緋〟　！」

古城にはもはや選択の余地はなかった。このまま夏音の攻撃が続けば、遠からずこの島そのものが消滅することになるだろう。まずは眷獣を使ってでも夏音を止める。でなければ雪菜やラ・フォリアまでもが巻きこまれて命を落とすことになる。

「叶瀬っ！」

雷光をまとった黄金の獅子が、そして振動の塊である緋色の双角獣が、宙を舞う天使へと突撃した。それぞれが天災にも等しい力を持つ、〝真祖〟の眷獣の攻撃だ。

膨大な魔力を帯びたその攻撃は、しかし夏音の身体を傷つけることはなかった

蜃気楼のように肉体を揺らめかせただけで、すべての攻撃は模造天使をすり抜けていく

引き裂かれた大気が軋み、稲妻が蒼穹を貫くが、夏音は無傷のまま悠然と飛び続けていた

「無駄だ、第四真祖よ」

賢生が古城に呼びかける。

彼はどこか達観したような表情で、無感動に夏音の姿を見ている。自らが生み出した模造天使に対して、彼はなんの興奮も喜びも感じていないのだ。

「今の夏音は、すでに我らとは異なる次元の高みに至りつつある。きみの眷獣がどれほど強大な魔力を誇ろうとも、この世界に存在しないものを破壊することはできまい」

「くっ……」

哀れみの眼差しで見つめられても、古城には賢生に言い返す余裕がない
模造天使の六枚の翼が、巨大な眼球を再び古城に向けたからだ
陽光にも似た圧倒的な輝きが、一片の影すら残さず古城を照らし出す
「叶瀬――――っ！」
頭上の夏音に手を伸ばしながら、古城が叫えた　直後、閃光が彼を貫いた
すべての音が消滅した。
古城の心臓に突き立った光は、苛烈な衝撃と炎を伴って、人々の視界を真っ白に染める。
その純白の世界の中で、古城の身体がゆっくりと仰向けに倒れていく
「先輩!?」
「古城！」
雪菜とラ・フォリアが、吹き荒れる暴風に逆らいながら、倒れた古城に駆け寄ろうとする
夏音の攻撃の爆心地は半球状にえぐれ、溶けた岩肌が白く蒸気を吹き上げていた。古城の肉体はズタズタに引き裂かれ、原形を留めているのが不思議なくらいだ
「もう終わりか……世界最強の吸血鬼にしちゃ、ずいぶん呆気なかったな」
絶句して立ちすくむ雪菜たちを眺めて、キリシマがしらけたような口調で呟いた
だが、暴風が突然勢いを増したことに気づいて、獣人化したままの彼の表情が緊張に歪む
肌にぶつかってくる風の中に、刃物のような感触が混じり始めていた　その正体は氷の破片

暴風に巻き上げられた海水が凍りついて、鋭い刃物と化しているのだ。
「って、なんだよ、これは……眷獣が暴走してるのか!?」
焦りに声を震わせて、キリシマがうめく。
宿主を失った第四真祖の眷獣が、制御を離れて暴れ出す。それは想像するだけでも恐ろしい事態だった。あんな巨大な魔力の塊が無差別に解き放たれたら、このちっぽけな島どころか、半径数十キロ以内の海域に致命的な被害が発生しかねない。
だが、事態はそんな最悪の予想のさらに上をいった。
「OAaaaaaaaaaa　！」
渦巻く暴風の中心にいたのは、暁古城の眷獣ではなく、叶瀬夏音だった。
自分の頭を抱えた模造天使が、血の涙を流しながら慟哭している。
その慟哭が竜巻を生み出し、周囲の海水を凍りつかせながら暴風圏を広げていた。
「叶瀬賢生。どうなってんのよ、これは」
ベアトリスが、非難がましい目つきで魔導技師を睨む。
無反応の制御端末を眺めたまま、賢生は泰然と首を振った。
「わからん。まだ彼昇天の段階には達していないはずだが」
「あっそう……はー、かったる……やる気失せたわ」
吐き捨てるように呟いて、ベアトリスは自分の眷獣を非実体化させた。そのまま模造天使

に背を向けて歩き出す。
「おい、BB」
「とりあえずいったん退くわ。あんなのに巻きこまれるのはごめんだからね」
追いすがってくるキリシマを見返して、ベアトリスが気怠い声を出す。
模造天使を取り巻く竜巻は、今や完全に凍りつき、巨大な氷の柱と化していた　螺旋状に渦を巻く地上部分は、すでに直径数十メートルに達し、なおも成長を続けている　ベアトリスたちの揚陸艇もその内部に取り込まれて、島からの脱出はほぼ絶望的だ。
そして猛烈な吹雪の中には、敗北した第四真祖と二人の少女が、今も取り残されている。
「先輩！　暁先輩――！」
制服姿の小柄な少女が、倒れた第四真祖に取りすがって彼を呼び続けていた。
そして異国の銀髪の巨女は、頭上に屹立する氷の柱を眺めている。
「模造天使……いえ、叶瀬夏音……あなたは……」
人工の天使は、その透きとおる氷の中で、慟哭しながら眠り続けている。
氷雪をまとう巨大な柱は、かつて〝バベル〟と呼ばれた天を衝く聖塔によく似ていた

第五章 天使炎上

1

錆と埃まみれの暗い船倉に、跳弾の火花が散った。異常なほどに規則正しい行軍の足音、軽機関銃を構えて接近してくるのは、不気味な黒鎧に身を包んだ兵士たちだった。

「――ひゃっ!?」

毎分七百二十五発という凶悪な速度でばらまかれた弾幕に、煌坂紗矢華は、悲鳴を上げながら逃げ惑う。

貨物船〝アマルゴーサ〟の船内である。古城たちの救助に向かう途中、紗矢華の乗った沿岸警備隊の巡視船は、メイガスクラフト所有のこの船に遭遇。事情聴取のために船内に乗りこんだところ、銃弾の出迎えを受けた、というわけである。

「なんなの、こいつら!? こんなところで銃撃戦をやらされるなんて、聞いてないんだけど!」

銀色の長剣を舞うように操りながら、紗矢華はうめいた。

その剣の銘は〝煌華麟〟。獅子王機関が開発した試作型可変制圧兵器だ。

その剣の軌跡は空間に断層を発生させ、あらゆる物理攻撃を遮断する。軽機関銃程度の攻撃を防ぐのは造作もないことだ。

とはいえ、〝煌華麟〟が生み出す空間断層は、空間を物理的に斬り裂いているわけではなく、

「空間を斬り裂いた結果生じる現象」を呪術的に再現しているだけの模倣に過ぎない。したがって効果が続くのは一瞬たけで、しかも発動にタイムラグが付随するという大きな欠点があった。こうも絶え間ない銃撃に晒されると、紗矢華の戦闘技術をもってしても、その欠点が致命的なものとして露見する。

結果、紗矢華は反撃もままならず、だだっ広い船内をひたすら逃げ続ける羽目に陥っていた。そして船倉に残されていたコンテナの陰に逃げこんで、安堵の息を叶いたとき、

「……え!?」

紗矢華の背後の扉が開いて、新たな兵士たちが現れる。

予期せぬ挟撃に、紗矢華が表情を凍らせた。新たに出現した兵士はわずかに三体。紗矢華の戦闘力なら、ものの数秒で無力化できる数である。

しかし彼らを攻撃している間、紗矢華の背中は完全に無防備になる。〝煌華麟〟が持つ第三の欠点。前後同時に空間断層を生み出すことはできないのだ。

思いがけない自らの窮地に紗矢華は舌打ちし、いっそ船ごと斬り裂くか、と剣を振り上げた。防御に使うには制約の多い〝煌華麟〟だが、その攻撃力は絶大だ。貨物船の分厚い船底も、紙切れ同然に引き裂くだろう。そんなことをすれば、〝アマルゴーサ〟は確実に沈むことになるが、この戦局を打破するにはほかに方法がない。

しかし、躊躇なく剣を振り下ろそうとした紗矢華の眼前で、ゆらり、と空間に波紋が広が

った。水面のように大気を揺らして出現したのは小柄な人影。フリルまみれの豪華なドレスに身を包み、日傘をさした童顔の女性だ。

そして彼女の背後から出現したのは、腕だった。黄金の甲冑に包まれた、機械仕掛けの巨大な腕である。掌だけでも彼女の背丈を優に超えている。

なにもない虚空から突如として出現したその腕が、紗矢華の背後に現れた黒鎧の兵士たちを、まとめてつかみ上げ、握り潰す。道端の雑草を摘み取るような、無造作な攻撃だ。

兵士たちの銃撃は、黄金の鎧に傷ひとつつけることができないままに弾かれ、彼らは歯車や鎧の破片をばらまいて次々と砕け散った。

「南宮那月？　あなた、どこから……!?」

剣を振り下ろすタイミングを見失った紗矢華が、どこか間の抜けた姿勢で訊いた。

彩海学園の教師である南宮那月の正体が、〝空隙の魔女〟の異名を持つ凄腕の攻魔官だというのは、もちろん知識として知っている。しかし空間制御などという高等魔術を、呼吸するように使いこなす姿を間近で見ると、やはり驚きは隠せない。

「なるほど、たしかに矢瀬が持ってきた資料のとおりだな」

黄金の怪腕を従えた南宮那月が、飛び散った兵士たちの部品を拾い上げて、つまらなそうに呟いた。

「作業機械屋が〝魔族特区〟でなんの研究をしているかと思えば、機械人形の起動コアに焼き

つけられた第一非殺傷原則を迂回するために、死霊魔術の術式で代用しているわけか。こんな幼稚な方法では性能が上がらんだろうに　こいつらを軍に売り込もうとして多額の損失を抱えた、というわけか。当然だな」

「機械人形の兵士……じゃあ、メイガスクラフトの裏稼業っていうのは……」

紗矢華が眉をひそめながら剣を降ろす。異様に規則正しい兵士たちの動きと、重い機関銃を平然と振り回す彼らの腕力。機械と言われれば納得だ。メイガスクラフト本社の裏帳簿に残っていたアメリカ連合国軍との取り引きは、機械兵士たちの売買契約だったわけだ。

日傘をくるりと優雅に回して、那月が、背後の機械人形を見た。

「この船の乗組員は全員確保した。残っているのは、あの益体もない玩具だけだ。ああいう有象無象の相手は、おまえの得意分野だろう、獅子王機関の舞威媛？」

「か、勝手に押しつけないで欲しいんだけど?!」

紗矢華は文句を言いながらも、〝煌華麟〟を変形させた。

前後に割れた刀身が広がり、長剣は、美しいアーチを描く銀色の洋弓へと姿を変える　特殊な鳴り鏑矢によって、破壊的な呪術を広範囲に炸裂させる制圧兵器。それが〝煌華麟〟こと、六式重装降魔弓の真の姿だ

紗矢華はたくし上げたスカートの下から金属製のダーツを取り出し、それを伸ばして、弓につがえた。そして迫り来る黒鎧の兵士たちに向けて一気に射放つ

飛翔する矢が、慟哭の声に似た遠鳴りを撒き散らした。それは強力な呪詛だった。魔弓が放つ鳴り鏑矢は、人間の声帯や肺活量では唱えられない高密度の呪文詠唱を可能にする。紗矢華が使ったのは、解呪の呪矢。機械人形たちを操っている魔術術式を、より強力な呪いで上書きして無効化する　呪詛と暗殺の専門家である紗矢華ならではの戦術である。

制御系を一瞬で焼き尽くされて、機械人形たちが停止する。

それを確認して、紗矢華はぐったりと溜息をついた。あんな兵士たちを相手にするために、彼女はここに来たわけではない。

「　この船、本当に〝仮面憑き〟の研究施設だったのかしら」

涼しげに扇子を広げている那月を見上げて、紗矢華が訊いた。

「船倉に実験用の気密ブロックがあった。資料もひととおり押収済みだ。人工島管理公社の理事会は、この不祥事を材料にしてメイガスクラフト本社の株に大規模な空売りを仕掛けるつもりらしい。会社が潰れるか、よくても事業部門の縮小は免れんだろうな」

「……〝魔族特区〟の研究部門は切り捨てられるってことね」

「やつらの今回の実験が失敗すれば、だがな」

那月が不機嫌な声で言う。模造天使は違法な人体実験で、絃神市にもたえた被害も甚大だ。少なくともメイガスクラフトの〝魔族特区〟支社は確実に閉鎖され、職員たちは罪に問われることになるだろう。

だが、模造天使が第四真祖に勝利するようなことがあれば、話はべつだ　それほどの能力を持つ兵器を、各国の軍部が見逃すわけがない　たとえメイガスクラフトが倒産したとしても、その研究は他社に引き継がれることになるだろう
結局、運命を左右するのは第四真祖　すなわち暁古城が、模造天使を倒せるかどうかにかかっているということだ」
「ああ、それからな。小一時間ほど前に、沿岸警備隊がアルディギアの救命ボッドからの救難信号を受信したらしい」
「ラ・フォリア王女が無事だったの？」
紗矢華が表情を明るくした　それは久々の吉報だ　しかし那月は、なぜか不機嫌な声のまま言葉を続ける。
「どうやら暁たちと同じ島にいるらしい」
「……暁古城と王女が……一緒に？」
形容しがたい嫌な予感を覚えて、紗矢華も顔をしかめた。
巫女でもある紗矢華の直感が、不吉な胸騒ぎを訴えていた。日本ではあまり知られていないが、ラ・フォリア・リハヴァインといえば芳紀十七歳。美の女神の再来とまで讃えられる美貌の王女である
あの暁古城が、文明と隔絶した無人島でそんな美姫と遭遇したらどうなるか――

どんなに楽天的に想像しても、絶望的な未来予想図しか思い浮かばない。

「とにかく、この船にはもう用はないのよね。だったら、早く雪菜たちを迎えにいきましょう！　それで一件落着ってことで」

焦燥も露に紗矢華が主張した。

しかし那月は、貨物船の甲板に出たところで不意に足を止め、

「そう上手くいけばいいがな」

「どういう意味？」

那月の視線を追って、紗矢華が海上と目を向ける。そして彼女は絶句した。水平線の彼方にあってもなお、その異変ははっきりと視認できたのだ。

海面が半径数キロもの範囲に渡って凍りついていた。その中央に出現していたのは、巨大な氷柱。螺旋状に渦巻く氷の柱が、遥かな上空にまで伸びていたのだ。

「なによ……あれ……!?」

紗矢華はかろうじてそう呟く。その大異変の発生源が、古城たちのいる無人島にあることは明白だった。つまり雪菜やラ・フォリア王女も、無関係ではないということだ。

「どうやらあの第四真祖は、また厄介なことに巻きこまれているらしいな」

那月が無表情のまま溜息をつく。

紗矢華は呆然と目を見開いたまま、陽光に煌めく氷の尖塔を見つめていた。

2

「　獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る！」

銀色の槍を頭上に掲げて、高らかに祝詞を唱えたのは雪菜だった。その清冽な響きに呼応して、研ぎ澄まされた刃が眩い輝きを放つ。

「雪霞の神狼、千剣破の響きをもて楯と成し、兇変災禍を祓い給え！」

その純白の光が消えたとき、雪菜たちの周囲には、直径四、五メートルほどの半球状の空間が出現していた。〝雪霞狼〟の神格振動波で防護結界を張ったのだ

結界の外側にあるのは、氷河のような分厚い氷の壁

その壁の外側では、今も猛烈な吹雪が吹き荒れて、周囲の土地や海面を凍りつかせている極寒地帯に住むエスキモー民族がドーム型のスノーハウスで吹雪をやり過ごすように、氷の壁でシェルターを造って、そこに逃げこんだ形である。

結界の中央に倒れているのは、いまだに意識の戻らない古城。雪菜が咄嗟に結界を張らなければ、今ごろ彼は氷漬けどころか、分厚い氷の下敷きとなって押し潰されていただろう

「――大儀でした、雪菜。これならしばらくは保ちますね」

氷に閉ざされた天上を眺めて、ラ・フォリアが言った。

分厚い氷に囲まれているせいで、逆に吹雪の影響を受けず、シェルターの中は意外に温かい。このままではいずれ酸素が足りなくなるが、少なくともそれまでは安全だといえた。

「はい。ですが、申し訳ありません。脱出するのは余計に難しくなりました」

「今は考えなくてもよいでしょう。外はまだ吹雪いているようですし」

硬い表情で唇を噛む雪菜に、王女は悠然と微笑んでみせる。

「この雪と氷。あなたはどう見ますか、雪菜？」

「わかりません。でも、叶瀬さんの想いを強く感じます」

氷の壁に触れながら、雪菜が託宣のように静かに答えた。

孤独、不安、恐怖、絶望。冷たく透きとおった氷壁から伝わってくるのは、凍てついたような哀しみの波動だった。恨みでも憎しみでもなく、虚無に近い透明な感情。

「さすがですね。わたくしもそう思います。おそらく模造天使の術式の影響で、叶瀬夏音の心象風景がそのまま実体化しているのでしょう」

哀れむように頭上を見上げて、ラ・フォリアが呟く。

彼女の視線の先にあるのは、氷の塔の中心で、胎児のように背中を丸めている夏音だった。神々しくも美しいその姿は、泣いている幼子のようにも見える。

「ということは、叶瀬さんはまだ――」

「ええ。自我を失ったわけではありません。術を破れば、叶瀬夏音は人間に戻れます」

雪菜の質問に、ラ・フォリアは迷いなく断言した
「ですが、今のわたしたちは彼女に近づくことができません。それどころか、ここから生きて出られるかどうかも」
「それは問題ないでしょう。この程度の氷の壁、古城が目を覚ませばどうにでもなります」
「先輩が……」
倒れている古城の傍らに膝を突き、雪菜はそっと彼をのぞきこむ
確実に致命傷を負ったはずの彼の肉体は、すでにほぼ回復を終えていた　炭化した筋肉も、骨にまで達していた裂傷も、痕跡すら残さず治癒している。
ただ一カ所、彼の胸の中心に刻まれた、十字型の刺傷を除いては——
その傷口から噴き出している神気に気づいて、雪菜は小さく息を呑んだ。
黄金に輝くその神気は、〝負〟の生命力で構成された古城の肉体を、酸のように蝕み続け、ゆっくりと消滅させている。
「この傷は……!?」
「模造天使の剣に貫かれたところですね。古城の肉体には、今もまだ剣が刺さったままなのです。わたくしたちには触れることのできない剣が」
見えない剣の存在を霊視しながら、ラ・フォリアが告げた。
天使と同じ高次元に属するその剣が、古城の回復を妨げて、不滅のはずの肉体を徐々に消滅

させていた。剣を介して流れこむ神気のせいで、このままでは彼は、遠からず完全に消え去ることになるだろう。

「……どうすれば助けられますか？」

雪菜が、真剣な眼差しでラ・フォリアに訊く。

本来、第四真祖の監視役に過ぎない雪菜には、古城を救う義務はない。しかし雪菜は、彼を見殺しにするという選択肢を、そもそも思いつきさえしなかった。

ラ・フォリアは、そんな雪菜を興味深そうに眺めて、首を振った。

「わたくしたちには古城の傷は癒やせません」

「……そんな……」

雪菜の頬から血の気が引く。

模造天使の術式は、アルディギアの秘奥義だ。それを破る方法がないとラ・フォリアが言うのなら、雪菜にはもはや打つ手がない。

しかし王女は、特徴的な淡い碧眼を、悪戯っぽく細めて続けた。

「ですから、彼を救える存在を喚び起こします。そもそも模造天使の剣に貫かれた時点で、古城の肉体は消滅しているはずでした。なのに彼の肉体が今もこうして存在し続けていられるのは、古城が無意識にその力を引き出しているからなのでしょう」

「先輩の力……？」

ラ・フォリアに促されて、雪菜はもう一度、古城の傷口に視線を落とす。じわじわと進行する古城の消滅は、見方を変えれば、何者かが天使の力を抑えつけているようにも感じられた。

「……まさか第四真祖の眷獣が!?」

「そうです。焔光の夜伯アヴローラ・フロレスティーナが、暁古城に譲り渡した眷獣は十二体。おそらく、その中に模造天使の力を無効化できる眷獣がいるのです」

王女の言葉に同意して、雪菜は頷いた。

第四真祖の眷獣の大半を、いまだに古城は自分の意思で使えない。

だが、過去にも何度か、宿主である古城の危機に反応して、休眠状態の眷獣が能力の一部を暴走させたことがあった。おそらく今回も同じような状況なのだろう

「でも、眷獣を喚び起こすといってもどうやって……？　今の先輩には意識がありませんし、外部から吸血鬼の眷獣に干渉することは不可能なはずですが」

思い詰めたような口調で雪菜が訊く。ラ・フォリアも今度は真顔で頷いた

「わたくしも初めてなので上手くできるかどうか不安ですが、やり方だけは侍女たちの噂話で知っています。試してみる価値はあるでしょう」

そう言って王女は、そっと古城の服に手をかけた。意識のない彼を支えてパーカーを脱がせ、破れかけの制服のボタンを上から順番に外していく。

古城の上半身が露になると、胸の傷口はいっそう痛々しく見えた。

ラ・フォリアは息をすることも忘れたように、真剣な表情でそれを見つめている。
ひょろい印象のある古城だが、脱がせてみると意外に引き締まった筋肉質な体型をしている吸血鬼化する直前まで、バスケに明け暮れていたせいだろう。
「……これが殿方のお身体なのですね」
王女は興味津々の表情で、腹筋の弾力を確かめるように古城の脇腹を指でなぞって、
「あの……ラ・フォリア？」
いきなり古城のズボンを脱がせ始めた彼女を、怪訝な表情で雪菜が凍める。
ラ・フォリアは、古城のベルトを抜き取りながら顔を上げ、
「失礼。つい後学のためにと思って好奇心に負けてしまいました」
「はあ……って、どうしてあなたまで服を脱ぐんですか!?」
今度はいきなり自分が脱ぎ始めた王女を、雪菜は慌てて制止した。直接的な肌と肌の接触が必要な魔術なのかもしれないが、それにしても見過ごせる話ではない。
しかし王女は、きょとんとした表情で首を傾げて訊いてくる。
「男女の睦み合いは、お互いに裸で抱き合うものだと聞いていたのですが、違うのですか」
「む、睦み合い……？」
想像を絶するラ・フォリアの発言に、雪菜の顔が硬直する。
ラ・フォリアは、それなりに真剣な眼差しで雪菜を見返して、

「眷獣の覚醒と掌握には、霊媒の血を捧げるのがもっとも確実な方法だと聞きました」

「そ、それは、たしかにそのとおりですけど」

雪菜は弱々しく肯定する。

古城が眷獣の力を使えないのは、彼がまだ、ほとんど他人の血を吸ったことがないせいらしい、そのせいで眷獣たちは、古城を己の宿主だとは認めておらず、召喚にも応じない、というわけだ。しかも気位の高い眷獣たちを満足させるには、彼らの霊媒に相応しい、高い霊格を持つ血が必要なのだという

アルディギア王族のラ・フォリアの血ならば、霊格はもちろん十分だが

「ですけど……血を吸おうにも、今の先輩にはそもそも意識が……」

「問題ありません。吸血衝動を引き起こすきっかけは性的興奮なのでしょう？　肉体的な刺激があれば、たとえ意識が十分でなくても行為が可能なはずです。そう、わたくしの侍女たちも、殿方の人格と下半身は別物なのだと話しておりました」

「……か、下半身て」

「ふふっ、身体は正直、だそうですよ」

無邪気に微笑むラ・フォリアを見て、雪菜はこっそりと溜息をついた。アルディギア王家の人々は、もう少し侍女たちの人選に気を遣ったほうがいいのではないだろうか

「心配ありません、雪菜、わたくしも今はまだ本気で彼と交合する気はありませんから」

「あたりまえです！」

雪菜が頬を赤らめながら叫んだ。今はまだ、という彼女の言葉に、抹の不安を覚えずにはいられない。この奔放な王女がどこまで本気で言っているのか、雪菜には見当もつかないのだ。

ラ・フォリアは儀礼服を脱ぎ捨てて、その下のシャツのボタンも平然と外していく　はだけた襟元からのぞくのは新雪のような白い肌。そして予想外にボリュームのある胸の膨らみだ。

「では、雪菜。少しだけ目を瞑っていてくれますか。人前でこのような行為をするのは、その、さすがに恥ずかしいと感じてしまいます」

ラ・フォリアはそう言って古城の上半身を抱き上げる。互いの素肌を密着させた彼らから、雪菜は目が離せない。頬にかかる銀髪をそっとかき上げて、ラ・フォリアは眠っている古城に顔を近づけていく。そして、二人の唇が触れ合う寸前、

「――駄目です！」

頭で考えるよりも先に、無意識に雪菜は叫んでいた。王女が、少し驚いたように顔を上げる。

「雪菜？」

「だ、駄目です、ラ・フォリア！　あなたがそんなことをする必要はないと思います！」

奪い返すような勢いで古城の身体を自分のほうに引き寄せ、雪菜は声を上擦らせながらそう言った。しかし王女は冷静な眼差しで、

「わたくしとあなた、それに叶瀬夏音を救うためです。やむを得ません」

「それはそう……ですけど、なにかほかの方法があるかもしれませんし……」
頼りなく呟く雪菜を見返して、ラ・フォリアは淡く微笑んだ。
「心配してくれてありがとう。でも、わたくしは大丈夫です　救える人間が古城を救うのは、むしろ当然のことではありませんか？」
健気な王女の物言いに、雪菜はわずかに気圧される。
ふざけているような彼女の態度のせいで、つい惑わされそうになってしまうが、ラ・フォリアの言葉は正論だ。彼女は、この場にいる全員を救うために、最善の方法を実行しようとしているのだ。
自分自身の血を吸血鬼に贄として捧げることすら、彼女にとっては、王族としての当然の義務でしかないのだろう。この異国の美しい王女はこんなふうに、たった一人で、様々なものを背負ってきたのだ。これまでも、きっとこれからも。
だが、これは違う。
この決断を背負うべきなのは、彼女ではない。
「――――わたしがやります」
眠っている古城を、今度こそ完全にラ・フォリアから奪って雪菜が言った。
王女が、びっくりしたように目を瞬く。
「え？」

「先輩を救うのはわたしの役目です。わ、わたしは第四真祖の監視役ですから」

毅然とした表情で雪菜は宣言した。これ以上、王女がなにを言おうと譲る気はない、と強い瞳の輝きが無言で主張している。

するとラ・フォリアは、まるでそれを待ち受けていたかのようにあっさり頷いて、

「わかりました、雪菜。では、この場はあなたに任せます」

「……え？」

雪菜は肩透かしを喰らったような気分で、ぽかんと、気の抜けた表情を浮かべた。

王女はにこやかに微笑みながらそれを見ている。そんな彼女の優美な笑顔で、雪菜は自分が謀られたことを知った。なにもかも、すべて王女の掌の上だったのだ。

「あ、ラ・フォリア……もしかして、あなたは最初からこのつもりで……！」

古城を抱き寄せたまま途方にくれる雪菜を見つめて、王女は悪びれず、祈るように告げた。

「信じています、雪菜。あなたならきっと古城を救えると」

3

叶瀬夏音の暴走で生じた氷の柱は、直径が十メートルを超えたところで、ようやく成長をやめたようだった。吹雪もすでにやんでいる。が、島の面積の大半は氷に閉ざされて、真っ白な

霜に覆われたままである。

雪菜たちがいる狭い空間の頭上も、厚さ数メートルの氷に覆われて、時折、不気味な軋みを発していた。脱出はもちろん不可能だし、自重に耐えかねていつ潰れてもおかしくない状況だ。

そんな絶望的な状況の中、古城だけは静かに眠り続けている

自分の肉体が消滅しかけているというのに、その寝顔はむしろ無邪気ですらあった

「……もう、本当に仕方のない人ですね、あなたは」

そんな古城の寝顔を眺めて、雪菜が苦笑混じりに息を吐く。緊張感のない彼の寝姿をみているうちに、悲壮な覚悟を決めている自分が、どこか馬鹿馬鹿しく思えてくる気がした

「大丈夫ですか、雪菜。もし不安なら、やはりわたくしが代わりましょうか？」

ラ・フォリアが愉しそうに訊いてくる　雪菜はぎこちない表情で首を振った

少し心惹かれる提案だったが、今さら代わってくれなどと言えるはずもない。それに王女に抱かれている古城を見るのは嫌だった。なぜか胸が苦しいような気分になってしまうのだ。

「いえ、問題ありません　これはいわば人命救助、そう、人工呼吸みたいなものですから」

半ば自分に言い聞かせるような口調で雪菜が呟く。ラ・フォリアは感心したように頷いて、

「人工呼吸……まさにそうですね。マウストゥマウス的な」

「う……ぐ」

思わずその光景を想像して、雪菜は赤面した。考えないようにしていた努力が水の泡だった

傍らに置いた槍の穂先に、雪菜は自分の指先を当てる。
そのまますっと刃をなぞると、かすかな痛みが伝わってきた。傷口から浮き上がってきた鮮血が大きなしずくを作るのを待って、雪菜は、その指先を古城の口の中に挿し入れる。
死んだように眠り続ける古城の舌が、痙攣するようにかすかに震えた。
肉眼ではわからないくらいの小さな変化だが、やはり古城はまだ生きているのだ。とはいえ、やはりこれだけでは圧倒的に血が足りない。もっと大量に流しこむ必要があるらしい。
「思ったよりも古城の反応が薄いのですね。やはり刺激が足りないのではありませんか」
ラ・フォリアが、いつになく真面目な口調で言う。雪菜はますます顔を赤くして、
「し……刺激というのは……？」
「肌の露出度、それに密着度でしょうか。ふふっ、手伝いましょうか？」
「いえ、結構です。自分でやります……やりますから！」
背後から伸ばされた王女の手を振り払って、雪菜は制服の上着に手をかけた。どのみちこのままでは古城が目を覚ますことは永遠にないのだ。彼に見られることを心配する必要はない。
リボンを解いて制服の前をはだけ、雪菜は眠っている古城にそっと覆い被さる。
露出度が足りない、と不満そうなラ・フォリアを無視して、雪菜は今度は手首の内側に刃を当てた。呪術で癒やせるギリギリの深さまで傷をつけ、噴き出した血を自分ですする。
そして頬に含んだ鮮血を、口移しで古城の中に流しこんだ。

密着した肌と唇から伝わってくるのは、まるで死体のような冷たい感触だ　だが、その奥にかすかな温もりが残っている。その温もりを見失わないようにと、雪菜は古城を抱く腕に力をこめた　やがてかすかに喉を鳴らして、古城が、流しこまれた血を嚥下する気配がした。

「……先輩!?　聞こえますか、先輩!?」

雪菜が古城の耳元に呼びかける。と、その雪菜の耳元で、

「続けなさい、雪菜。古城はあなたを感じています」

「ど、どうして見てるんですか、ラ・フォリア!?」

至近距離から自分を観察していた王女と目が合って、雪菜は声を裏返らせた。

ラ・フォリアは不思議そうな表情で、

「恥ずかしいから見ないで欲しいとは申しましたが、あなたに見るなとは言われていません」

「い、言いませんでしたけど、それは当然のことだと思って　―んんっ!?」

王女の振る舞いに気を取られていた雪菜は、突然強い力で抱き寄せられて動揺した。意識がなかったはずの古城が、血の残り香に惹かれたように雪菜の唇に触れてくる。

舌先に伝わってくる未知の感触に、雪菜の身体がびくんと硬直した

全身の力が抜けるような、痺れるような感覚が背筋を這い上ってくる。

それでも雪菜は懸命に頭を上げて、

「せ、先輩!?　起きてるんですか!?　いったいどこを触って……ちょっ……！」

本能のままに動く古城の指先が、雪菜の背筋をそっと撫で上げる。
ひっ、と息を呑んで硬直する雪菜。爛々と瞳を輝かせたラ・フォリアが、口元を覆いながら身を乗り出して、
「まあ……」
「先輩！　王女が見てますから……いやっ……そ、そこは……っ!?」
制服の内側の敏感な素肌を古城の指先に触れられて、雪菜は大きくのけぞった。
細く白い雪菜の首筋が無防備に晒されて、まるでそれに吸い寄せられるように、古城が彼女の肌に牙を立てた。くっ、と痛みに耐えるように雪菜が唇を噛む　しかし彼女は抵抗せずに、いまだ意識のない古城を優しく抱き寄せた。
「……」
そのまま動きを止めた二人を気遣うように、ラ・フォリアは彼らに背中を向けた。
そして王女はふと顔を上げる　古城の傷口に絶え間なく流れこんでいたはずの、模造天使の神気が消滅するのを感じたのだ。
古城を消滅させようとしていた胸の傷が、弱々しく薄れて消えていく。
「天使の剣を……喰いましたか」
ちらりと背後を振り返って、ラ・フォリアが呟く。
「さすがですね、古城……これほどの眷獣を従えていたとは……やはり、あなたなら……」

失神した雪菜を抱き支えたまま、古城は寝息を立てている。王女はそんな彼らを眺めて頷き、それから頭上へと視線を向けた。

白く輝く氷雪の世界の中、人工の天使が眠り続けている。

4

「ぐあっ……！」

全身の細胞が引き裂かれるような激痛とともに、暁古城は目を覚ました。

前にも経験したことがある痛み。即死するレベルの傷を負ったあと、復活したときの特徴だ。

「お目覚めですか、古城」

苦悶にうめきながら瞼を開けると、涼しげな表情で見下ろしてくるラ・フォリアと目が合った。精緻な彫刻に似た端整な顔立ちと、銀色の髪。透きとおる氷壁を背景にたたずむ彼女は、現実離れした美しさで、夢の続きを見ているような気分になる

「ラ・フォリア？　どこだ、ここは？　俺はまだ生きてるの……か……」

口の中に残る甘い血の残り香。そして肌に伝わってくる柔らかな温もりに困惑しながら、古城はもたもたと身体を起こした。

軽く痺れた左腕に違和感がある。

子猫を抱き上げたときに感じるような、しなやかで気持ちのいい重さだ
滑らかな肌の感触と、鼻腔をくすぐる魅力的な香り。磁力にも似た愛おしい弾力　さらさらと流れ落ちる髪の手触りが、くすぐったくも心地好い。そう、雪菜の黒髪の手触りが
「――って、なんじゃこりゃあああっ!?」
自分の腕の中で眠っている雪菜に気づいて、古城は今度こそ完全に覚醒した。驚愕のあまり、声が出ない。いつの間に服を脱いだのか、今の古城は上半身は裸だった
そんな古城の腕の中で、雪菜がぐっすりと眠っている。その寝顔は普段の彼女よりも幼く感じられて、唖然とするほど可愛らしかった。清楚な花の蕾を見ているようだ
しかし今の古城にそれを愛でている余裕はない。
「ひ、姫柊!?　こいつ、なんで!?」
「落ち着いてください、古城」
激しくうろたえる古城を見つめて、ラ・フォリアが呆れたように言う
「いや、落ち着けと言われても、俺はこんなことをした記憶は全然　――」
「わかっています。雪菜は、あなたを復活させるために、自分の血を提供したのです　でなければ、あなたは今ごろ模造天使の力で消滅していました」
「姫柊が……俺のために……？」
古城はもう一度、眠り続けている雪菜に目を向けた。彼女の白い首筋には、今も突き立てら

れた牙の痕が残っている。見間違うはずもない　古城自身が彼女につけた傷である

自分の鳩尾に触れながら、古城は深々と息を吐いた。

あの模造天使の攻撃を受けて、あっさり復活できたことに違和感は覚えていたが、なんのことはない、またしても雪菜に助けられたというわけだ。

腕の中にいる小柄な少女に対して、言葉にできない感謝の念が湧いてくる。

心地好い肌の温もりに名残惜しさを感じながら、古城は雪菜をそっと地面に横たえた。はだけた彼女の制服から目を逸らし、

「とにかく、姫柊に服を着せてやってもらえないか。いくらなんでも、このままほっとくわけにはいかないから」

ラ・フォリアは微笑みながら頷いて、

「わかりました……ふふ、今さらという感じはしますけど。あれだけ激しく求め合っておいて」

「いったいなんの話だよ!?」

自分が無意識に行った悪事の存在を匂わされて、古城は再び動揺する。記憶がないぶん、余計に不安が募った。いったい自分と雪菜は、王女の目の前でなにをしたのだろう。なぜ自分のズボンは脱げかけで、雪菜の制服ははだけているのだ――？

不安に苛まれながらふと頭上を見上げて、古城は不意に表情を険しくした。氷の中で眠っている夏音の存在に気づいたのだ。

「叶瀬……！」

螺旋状にねじれた水の柱を、真昼の陽光が透かしている。その黄金の輝きの中で、夏音は背中を丸めていた。

彼女の背中に折り畳まれた翼に、あの禍々しい眼球の気配はない。あれも眠っているのかもしれなかった。

「あなたを刺した直後に、彼女の自我が暴走したのです」

ラ・フォリアが古城の隣に立って説明する。

それを聞いた古城は、ハッと彼女の横顔を見つめて、

「叶瀬の意識が残ってるってことか」

「はい。ですが、この不安定な状態が長く続くことはないでしょう。このままではいずれ彼女の意識は消滅します」

「……その前に助け出さなきゃまずいってことか」

奥歯を鳴らして、古城がうめく。そんな彼を眺めて、ラ・フォリアは愉快そうに目を細めた。

叶瀬夏音は、一度は古城を殺した相手である。にもかかわらず、古城は当然のように彼女を救うことだけを考えている。ふっ、と口元を綻ばせて、王女は古城に顔を近づけた。

「ラ・フォリア……？」

異様に接近してきた王女を見て、古城はどぎまぎと後ずさる。

そんな古城の二の腕をつかんで、ラ・フォリアはますます距離を詰めた。そのときになって古城はようやく、王女が薄いシャツ一枚しか身につけていないことに気づく

どうしてそんなことになってるんだ、と狼狽する古城を、ラ・フォリアは平然と見つめて、

「……あれだけ熱烈な行為のあとなのに、新たな眷獣が目覚めた気配がありませんね」

「あ、ああ。そういえば、たしかに」

言われてみれば、と古城は首を傾げた。古城に責任能力があったかどうかはともかくとして、たしかに雪菜の血を吸った形跡がある。しかし二匹目の眷獣を掌握できたという自覚はない。同じ人間の血では、新しい眷獣は目覚めないのか　と古城が疑念を抱いたとき、

「この眷獣は……なるほど、そういうことですか」

なぜかラ・フォリアは、一人で納得したように微笑んだ。そして唐突に背伸びをして、古城の頬に自分の唇を押し当てる。小鳥のついばみのような軽いキス

「なっ……!?」

予期せぬ不意討ちに古城がのけぞった。

初々しい古城の反応を見て、ラ・フォリアはクスクスと声を洩らして笑い出す。彼女はそのまま自分のシャツに手をかけて、残っていたボタンを外し始めた。

古城は慌てて王女を制止し、

「なにやってんだ、あんた!?　ご乱心ってやつか!?」

「なにを焦っているのです。あなたは一度、わたしのすべてを見ているではありませんか」
「そういう問題じゃねーから！　それにあのときは霧もかかってたし　！」
唇を尖らせて見上げてくるラ・フォリアに、古城は必死で言い訳する。
泉で沐浴をしていた王女の姿が脳裏をよぎり、犬歯にむず痒い疼きが甦った。吸血衝動が再燃する前の、非常によくない徴候だ。
「わたしには、やはり雪菜ほどの魅力はありませんか？」
唐突に心細げな表情を浮かべて、ラ・フォリアが言った　いつも自信に満ちあふれている彼女らしからぬ表情である。
「いや、そんなことはないけど……ていうか、だから困ってんだろうが！」
謎の罪悪感を覚えながら否定する古城を、満足そうに見上げて王女が微笑む
「そうですか。安心しました」
「なにがだ!?」
逆にものすごく不安になって、古城が訊き返す。
王女は羞じらうように目を伏せて、どこか頼りなく苦笑した。
「わたくしはなにも知らないのです。王族として婚礼が決まっていれば、このような場合にどう振る舞えばいいのか、手ほどきを受ける機会もあったのでしょうが　父がわたくしを誰にも嫁がせないと言い張るせいで　」

「嫁に出さない……って、それはあんたが愛されてるってことだろ　いい親父さんじゃないか」

気まずく頭をかきながら、古城が言う　妹が告白されると勘違いして慌てふためいた古城としては、彼女の父親をあまり非難できない

それに王女であるラ・フォリアは、一歩間違えば政略結婚に利用されていた可能性もあるわけで、その意味で彼女は恵まれているといえなくもないはずだ。

しかしラ・フォリアは拗ねたように唇を尖らせて、

「うちの娘に手を出す不埒者がいれば、騎士団と軍の総力をもって叩き潰すと。その覚悟があるならかかってこいや、と父は申しておりました」

「……すまん、さっきの言葉は撤回していいか」

唇を歪める古城を見て、ラ・フォリアはもう一度クスクスと笑った。

「一切の血族同胞を持たない、たった一人の〝夜の帝国〟の領主　あなたなら、わたくしの父とも渡り合えるかも知れませんね」

古城の肩にそっと手を回して、銀髪の王女が囁く。なんの話だ、と古城は顔をしかめる。

そんな古城を、互いの鼻先が触れ合うほどの距離から見つめ、凛とした口調で彼女は命じた。

「アルディギア王家が長女、ラ・フォリア・リハヴァインの名において命じます。第四真祖・暁古城、わたくしの血を吸いなさい」

なにを馬鹿な、と言おうとして、古城はふと王女の眼差しに気づいた。宝石を思わせる青い

瞳に、祈りにも似た真摯な光が宿っている。彼女はふざけているわけではないのだ

「それは、叶瀬を救うために必要なことなんだな」

王女の耳元で古城が訊いた。当然でしょう、と彼女が溜息をつく。

古城はラ・フォリアの繊細なおとがいに手を当てて、白い首筋を露出させた。王女が静かに目を閉じる。その華奢な肩がかすかに震えている。

「あんたの親父の相手はしてやる。だからあんたは後悔するなよ、ラ・フォリア――」

「ええ、もちろん。わたくしの目に狂いがないことを、見事証明してみせなさい、暁古城」

どこか愉しげな口調で王女が言い放つ。古城は彼女の細い身体を抱き寄せた

氷の壁を透かして降りそそぐ光の中、二人の吐息がひとつに重なり合っていく

5

叶瀬夏音は、光の中で夢を見ていた。

彼女を取り囲んでいるのは、美しく透きとおった雪と氷。

それが自分の故郷の景色であることを、夏音は誰に教わるまでもなく知っていた

生まれ落ちた直後に一度だけ目にした原風景。

静けさと孤独だけで造られた、たった一人きりの美しい世界。

それは夏音の心の中の風景そのものだ。ここは夏音が自ら生み出した〝夏音の世界〟なのだ
寂しさも哀しみも絶望も、すべての感情を〝世界〟とともに外に叶き出したことで、夏音の
中にはもうなにもない。いずれはこの意識すら、完全に消えてしまうだろう。
それを哀しいと思う気持ちすら、今の夏音にはもう残されていない。最後まで彼女を止めよ
うとしていた一人の少年。彼を自ら消滅させたとき、夏音はすべてを失った。
六枚の翼。六つの眼球。外部から取りこんだ六基の霊的中枢。それらを経由して、高次元の
神気が夏音の中に流れこんでくる。その力は、やがて彼女を更なる高みへと導くだろう。
もうなにも哀しむことはない。孤独を恐れることはない。
なのに
誰もいないはずのその世界に、入りこんでくる誰かの気配を感じる。
いなくなったはずの少年の気配。消滅したはずの彼が再び目覚めたのだ。
それはあり得ないことだった。あってはならないことだった。なのに
ならばなぜ、と夏音は思う。
どうして自分はこんなにも嬉しいと思ってしまうのだろう――？
叶瀬夏音が、光の中で目を覚ます。その瞳から涙が流れ続けている。

「動き出したか――」

氷の中に閉じこめられていた模造天使が、目を開けた

叶瀬賢生はそれを見上げて、満足そうな呟きを洩らす。

彼の肩には今も薄く雪が積もって、黒服の背中には白い霜がこびりついている　娘は完全に血の気を失くして、蠟のように青白い　模造天使が暴走してからの数時間、その場を動かずに観察を続けていた代償だ。

自らの実験の成果物でもある〝娘〟の姿を、彼は見守り続けていたのである。

「心象風景の投影による表層人格の破棄と再構築か。計算外の事象だったが、まあいい。これでもう、おまえをこの世界に繋ぎ止めるものは完全に消えたのだな……夏音よ」

どこか救われたような表情で、賢生はそう独りごちた。

だが、彼のその言葉を裏切るように、凄まじい轟音が唐突に大地を震わせた。

模造天使が眠る塔の根元。分厚い氷の層をぶち破って、巨大な獣が現れる。

凄まじい振動が大気を歪めて、陽炎のような肉体を形成している。緋色に煌めく鬣と、双角を持つ仔喚獣。膨大な魔力をまとう双角獣だ。

「――第四真祖の眷獣だと!?」

賢生は愕然としながら目を細めた。爆風のような雄叫びを残して眷獣は消滅し、それが残した氷の裂け目から、見覚えのある二人組が這い出してくる。

古城と雪菜、そしてラ・フォリア・リハヴァインだ。

彼らは互いに手を貸しながらも、どことなくよそよそしい雰囲気を漂わせていた　気まずく目を合わせないようにしながら、微妙な距離を保っている。

「――っくしゅ！」

眩い南国の太陽を見上げて、古城が大きなくしゃみをした。破れかけたパーカーのフードを、目深に被り直しつつ、

「……あー、くそ。やっぱ、外は寒いな。風邪引いたか」

「服も着ないで、いかがわしい行為に耽ってたからじゃないんですか」

冷ややかな口調で答えたのは、雪菜だった。意識を取り戻した直後に、ラ・フォリアの血を吸っている古城の姿を目撃してからというもの、雪菜はずっと機嫌が悪い。

監視役である彼女が眠っている隙に、古城が他人の血を吸ってしまったのだから、怒る気持ちもわからなくはないのだが――

「脱がせたのはおまえらじゃねーかよ」

なんとなく理不尽なものを感じて、古城がぼそぼそと口の中でぼやく。

「それはそうですけど……もう。ほら、こっちを向いてください。子どもじゃないんですから」

雪菜は頬を膨らませたままそう言って、古城が垂らした鼻をハンカチで拭いた。

そんな二人のやりとりを眺めて、クスクスとラ・フォリアが笑っている。

つい数時間前に一度死にかけたというのに、そして彼らを追い詰めた天使が目の前にいるというのに、古城たちの間に緊張感は微塵もなかった。

そのことに多少呆れた様子で、賢生が静かに口を開く。

「生きていたのか、第四真祖。さすがは世界最強の吸血鬼、と言ったところか」

その声に同情めいた響きを感じて、古城は胡乱げな表情で彼を見た。

「オッサン、あんたは――」

「だが、ありがたい。もう一度きみと戦えば　－強敵との戦闘で霊的中枢をフル稼働させれば、夏音は今度こそ最終段階に進化する。これ以上、新たな敵を求めて彷徨う必要はない　夏音はもう誰も傷つけなくて済む」

古城の言葉を遮って、賢生が一方的にそう告げた。

あまりにも身勝手な彼の言い分に、古城は頭に血が上るのを自覚する。しかし古城が反論を思いつく前に、ラ・フォリアが前に歩み出た。微笑みながらも冷厳と言い放つ

「模造天使を兵器として売り捌こうという人間が、殊勝なことを言いますね、賢生」

「それはメイガスクラフトが勝手にやっていることです。私の意図するところではありません」

賢生が他人事のように無責任に言い放つ。

「勝手なことを言わないでください」

王女さえも沈黙させる悲痛な声で、割りこんできたのは雪菜だった。槍を握る彼女の指先は

小刻みに震え、黒い瞳が揺れている。

「あなたは叶瀬さんを娘として育てていたんじゃないんですか。それなのに、どうして彼女を実験体にしたんですか。道具のように扱われて、彼女がいったいどんな気持ちだったか」

雪菜の声には、生々しい感情の響きがこもっていた。

彼女が代弁しているのは、まぎれもなく夏音が本来口にしたくて、できなかった言葉だ。この場でたった一人、雪菜にだけは、それを口にする資格がある。

なぜなら雪菜も、獅子王機関によって生み出された、剣巫という名の道具だからだ。

彼女と夏音はよく似ている。雪菜はそれに気づいていた。だから雪菜はこうして賢生を問い詰めている。彼を責めるためではなく、自分のぶんまで夏音を救ってもらうために。

そんな雪菜の想いに気圧されたように、賢生は重々しく息を吐いた。

「お嬢さん、きみはなにか勘違いをしているようだ」

「どういうことですか？」

雪菜の表情が困惑に揺れる。賢生は、氷の中の夏音を見上げて続けた。

「私は、あれを道具として見たことなど一度もない。実の娘も同然に思っている。今でもな」

「今の叶瀬さんの姿を見て、なおもその言葉を信じろと？」

不快そうに眉をひそめて雪菜が訊いた。彼女が苛立つのも当然だ。実の娘に殺し合いをさせ、異形の存在へと変える。そんなことを望む親がいるはずもない。

しかし賢生は平然と首を振る。

「きみが信じなくても、事実は事実だ。それとも、あれの母親が私の妹だと知ったら、少しは信用する気になってくれるかね？」

「妹さん……の娘？」

賢生の意外な言葉に、雪菜が目を瞠った。

驚いたのは古城も同じだ。もしもその話が事実なら、賢生は夏音の養父というだけでなく、実の伯父でもあることになる。

「今から十五年も前のことになるが、妹は、アルディギアの王宮に仕えていた私に会うために、あの国を訪れていたのだ。そして当時の王と出会い、報われぬ恋をした　もっとも私がそれを知ったのは、妹が死んで、彼女の娘と出会ってからのことだがね」

「そのことを叶瀬さんは……娘さんは知っているのですか？」

「まさかな。実の母親が名乗り出なかったのだ。私の口から言えるようなことでもあるまい」

雪菜の質問に、賢生が素っ気なく首を振る。しかし、彼が嘘をついているとは思えない。

ラ・フォリアは無言で雪菜たちのやりとりを聞いている。彼女は最初から叶瀬親子の関係を知っていたのだろう。

「実の娘も同然か……」

古城が苦々しげに呟いた。賢生の妹が夏音の母親。だから夏音を実の娘も同然に思っている、

という彼の言葉は、おそらく事実なのだろう。賢生は、アルディギアの王族の血だけが目当てで、夏音を養女にしたわけではなかったのだ。

だが、だとすれば余計に彼の行動は許されない――

「だったら、尚更だろ。どうして叶瀬を実験に使ったりしたんだよ」

怒気のこもった古城の視線を、賢生は泰然と受け止める。

「娘の幸福を願わない親がいるのかね？」

「幸福、だと!?　今の叶瀬のあの姿が!?」

「夏音は、人間以上の存在へと進化する。あれを傷つけられる者はもうどこにもいない。やがてあの子は神の御許へと召されて、真の天使となる　それを幸福と呼ばずしてなんと呼ぶ？」

なんの迷いも後悔も感じさせない口調で、賢生が答えた。

だがそれでも、古城は静かに問い返す。

「……叶瀬がそう言ったのか？　人間を超えた存在になるのが、自分の望む幸福だって」

「なに？」

揺るぎない岩のような賢生の表情が、そのとき初めて動揺した。

古城は憐れむような瞳で彼を見下ろす。今はっきりと確信する。

この男は、なにも、わかっていない　！

「そんなものが、本当にあいつの望んでいた幸福なのかよ。あんたが勝手にそう思いこんで、

勝手に押しつけてるだけじゃねーのか。世間じゃ、そういうのを道具扱いって言うんだよ！」

「……黙れ、第四真祖……」

賢生が声を震わせた。信念の揺らいだ彼の表情には、憎々しげな苦悩と混乱が浮かんでいた。

「貴様にそれを口にする資格など、ありはしない。自分自身のことすらなにもわかっていない貴様には！」

思いがけない賢生の言葉に、どういう意味だ、と古城が戸惑う。と、そのとき、

「――下がりなさい、賢生！」

ラ・フォリアが鋭い声で警告した。

だが、その言葉が耳に届く前に、賢生の頭上で爆発が生じた。

何者かの攻撃が、夏音を閉じこめていた氷の塔を爆破したのだ。

鋭く尖った無数の氷塊が降りそそぎ、それらをまともに浴びて賢生がくずおれる。

「ベアトリス・バスラー――！」

その攻撃を放った人物に気づいて、雪菜が叫んだ。

古城たちの背後の坂の上に、紅いボディスーツを着た女吸血鬼の姿があった。

氷を破壊したのは彼女が投げた深紅の槍だ。槍の形をした眷獣が、激しい魔力の火花を散らしながら、夏音を護っている氷の壁を砕いていく。

ベアトリスの隣には、獣人化状態のロウ・キリシマ。

彼が両脇に抱えていたのは、棺桶ほどのサイズの金属製のコンテナである。獣人はそれらを無造作に、坂の下へと投げ落とす。

「のんびり育児方針についてお話ししてるとこ悪いんだけどさァ、時間外労働だし、あたしたち、そろそろ帰りたいのよね。さっさと第四真祖をぶっ殺しちゃってくれないかしら」

槍の眷獣を自らの手元に呼び戻して、ベアトリスは、ハァと気怠く息を吐いた。

そして手に持っていた制御端末のパネルを操作する。賢生が持っていたものと同じタイプの制御端末だ。画面に浮き上がる『降臨』の文字を見て、ベアトリスが投げやりに笑う

「でないと、せっかく造ったこいつらが売れ残っちゃうからさ――！」

金属製のコンテナの蓋が、轟音とともに内側から弾け飛んだ。

キィィ――と耳障りな咆吼を上げて、その中から小柄な影が現れる。

醜く不揃いな四枚の翼と、肌に浮き上がる魔術紋様。そして金属製の奇怪な仮面。

「〝仮面憑き〟!?」

雪菜が、槍を構えながら愕然と叫んだ。

キリシマが運んできたのは、間違いなく〝仮面憑き〟と呼ばれる未完成品の模造天使だった。不完全とはいえ彼女たちは、古城を追い詰めるほどの戦闘能力を持っている。それが二体。古城にとどめをささずに眠り続ける夏音に業を煮やして、船に積んであったそれらを引っ張り出してきたらしい。

「どういうことだよ。おまえらが造った模造天使の素体は七体だけじゃなかったのか？」
古城が顔をしかめて賢生を睨む。賢生は血まみれの頭を押さえたまま頷き、
「そのはずだ。私は、儀式に必要な最低数しか用意していない」
「悪いんだけど、それじゃあ売り物にならないからね。こっちで勝手に増やさせてもらったわ」
ベアトリスが蔑むような表情で説明した。
翼を展開した〝仮面憑き〟たちが空へと舞い上がる　彼女たちの姿は、かつて夏音に倒された素体によく似ていた　それに気づいて賢生が顔をしかめる
「……クローンか」
「そういうこと。素体が粗悪だとデキも悪くて、性能では叶瀬夏音には遠く及ばないんだけどまあ、こっちの命令に忠実に従うぶん、使い勝手はマシってとこかしらね」
得意げに制御端末を掲げて、ベアトリスが笑う。
「なるほど」
ラ・フォリアが冷然と呟いて、女吸血鬼を蔑むように睨め上げた
彼女にとってベアトリスは、自分を狙っている犯罪者というだけではない　王家が所有する装甲飛行船を落とし、侍従たちや護衛の騎士団を殺した敵。部下たちの仇なのだ
「おまえがわたくしを拉致しようとしていたのは、やはりアルディギアの王族のクローンを造るのが目的でしたか」

「あはン、ようやくわかったの、お姫様？　改造済みの叶瀬夏音からは細胞が摘出できないし、どうしたもんかと困ってたら、ちょうどあんたがのこのこやってきてくれた、ってわけ」

助かったわ、と荒々しく牙を剝き、ベアトリスは再び自らの眷獣を喚び出した。意思を持つ深紅の槍を邪魔くさそうに引きずりながら、ラ・フォリアのほうへと歩き出す。

「全身バラバラに切り刻んで、増やせるだけ増やしてあげるわ、雌豚。あんたのクローンなら、兵器になんか改造しなくたって、高く買うやつがいくらでもいるだろうし　がっ!?」

愉快そうに喋っていたベアトリスが、突然、苦痛に唇を歪めた。

古城の身体から放たれた雷撃が、鞭のように飛来して彼女の肩を殴りつけたのだ。

しかしそれはベアトリスへの攻撃ではなかった。押さえきれない古城の怒りが魔力となって溢れ出し、無差別に周囲に撒き散らされただけだ。

「……第四真祖……！」

ギリッ、とベアトリスが歯噛みする。

古城はそんな女吸血鬼を、爆発的な魔力の奔流とともに睨みつけた。

「黙れよ、年増……それにあんたもだ、オッサン！」

「っ……!?」

雷鳴のような古城の一喝に、ベアトリスが、そして賢生が言葉をなくす。

「王族とか霊媒とか知ったことか。叶瀬もラ・フォリアも普通の女の子だろうが。それを天使

にするだの、クローンで増やすだの、好き勝手なことばっか言いやがって――！」

古城の瞳が赤く染まっていた。それは烈火の如き怒りの色だった。

理屈がわかってしまえば、簡単な話だったのだ。

ベアトリスは、夏音たちを天使兵器に仕立てて、それを軍に売りこもうとしている。吸血鬼の真祖すら斃し得る最強の魔導兵器として

賢生は、夏音を人間以上の存在にしようとしている　そのためには夏音が霊的中枢をフルに活用するだけの敵が必要だった　だから彼は古城に目をつけた　夏音を進化させるための噛ませ犬として

そう、簡単なことだった

夏音が古城を倒せなければ、彼らの計画は終わるのだ。模造天使ごときでは、世界最強の吸血鬼を、第四真祖を倒せないと思い知らせてやれば、それだけで

「いい加減に頭にきたぜ　叶瀬を助けて、おまえらのくだらねえ計画をぶっ潰してやるよ！

ここから先は、第四真祖の戦争だ！」

禍々しい覇気を放って、古城が吼えた。

真祖の魔力に反応した〝仮面憑き〟が、いびつに歪んだ光剣を古城へと撃ち放つ

その光剣を打ち落としたのは、銀色の槍の一閃だった。

同じ人工的な神気をまとう武器同士。〝仮面憑き〟が雪菜の槍を防ぐのと同様に、彼女たち

の光剣も〝雪霞狼〟で打ち落とせるのだ。

古城の隣に寄り添うように銀の槍を構えて、雪菜が呟く。

「――いいえ、先輩。わたしたちの、です」

彼女に背中を預けて、古城は無言で空を見上げた。

砕け散った氷の塔の上空。三対六枚の翼を広げた叶瀬夏音が、無慈悲な瞳で地上に立つ古城を見下ろしている。

6

「はー……怠っ！　余計な手間ァかけさせてんじゃねーわよ、第四真祖！」

ベアトリスが、制御端末を弄って〝仮面憑き〟たちに指示を出す。不安定な模造天使に頼るまでもなく、〝仮面憑き〟だけで古城を倒せると踏んだのだろう。

上空に待機していた一体の〝仮面憑き〟が降下して、古城たちへと無数の光剣を乱射した。とても雪菜一人で防ぎきれる数ではない。が、

「――邪魔だ」

古城は振り返りもせずに、飛来する剣を無造作に右手で受け止めた。それだけで、いびつな光剣はすべて消滅する。まるで空間ごとえぐり取られたかのように、

「……おい、どういうことだよ、ＢＢ!?」

それを見て血相を変えたのはキリシマだった。話が違うじゃねーか、とでも言いたげに、隣にいる女吸血鬼を見上げて訊く。

しかしベアトリスはなにも答えない。ただ屈辱に顔をしかめているだけだ。

「――〝仮面憑き〟はわたしがどうにかします。先輩は、叶瀬さんを」

雪菜が、背中合わせに立つ古城に告げた。

「わかった……だけど、ラ・フォリアは？」

「わたくしのことは気遣い無用です　存分に、雪菜」

不安げに目を向けてくる古城たちを見返し、ラ・フォリアは優雅に微笑んだ。

彼女が、見栄や虚勢でそんなことを言う人間ではないことはわかっている　はい、と力強く頷いて、雪菜はベアトリスたちのほうへと駆け出した。呪力で脚力を強化して、弾丸のように加速する。

「〝蛇紐羅〟っ！」

雪菜の接近に気づいた女吸血鬼が、舌打ち混じりに斧獣の槍を構えた。

意思を持つ武器であるその槍は、自在に形を変え、長さを変え、あらゆる角度、あらゆる距離から敵を迎撃する。その反応速度は人間の限界を遥かに超えて、雪菜の武術をもってしてもかろうじて互角。それはすでに証明済みである。

だからこそベアトリスは鬱陶しげな表情で、槍を無造作に突き出して、

「何度やっても同じだよ、剣巫！　あたしの眷獣に、あんたの槍は――」

しかし勝ち誇ったような彼女の言葉は、ぐふっ、という苦悶の声に変わった。

眷獣をすり抜けてベアトリスの懐に飛びこんだ雪菜が、彼女の無防備な脇腹に、強烈な肘打ちを叩きこんだのだ。肋骨が砕け散る激痛にベアトリスが顔を歪める

「――若雷！」

雪菜はさらに零距離から、呪力をこめてその肘を突き上げた。ベアトリスの大柄な身体が、数十センチも浮き上がり、女吸血鬼が喀血する

「な……あんた、なにを……」

混乱した頭でベアトリスがうめく。しかし雪菜の攻撃は終わらない。密着状態からベアトリスの足の甲を踏み抜き、掌底で彼女の顎を突き上げる。そして再び脇腹への肘撃。

ぐぼァ、と肺の中の酸素を吐き出して、ベアトリスが喘いだ。

「冗談……だろ。こんな小娘が素手で、あたしを……」

混乱し続けるベアトリスを、雪菜は無表情に見下ろした。

雪菜は剣巫。純粋に対魔族戦闘だけに特化した専門家だ。呪力を乗せた剣巫の打撃は、魔族の肉体再生能力を阻害し、確実に彼らの戦闘能力を奪う。

雪菜と素手で対等に戦えるのは、クリストフ・ガルドシュのような訓練された兵士だけ。眷

獣の能力に頼りきりの屑れ魔族では、雪菜の動きをとらえることもできないのだ

「たしかにあなたの眷獣は強力でした……でも、それだけです」

淡々と呟く雪菜の声は、もう女吸血鬼の耳には届いていない。

ベアトリスは、戦闘に関しては素人だ。だから彼女の眷獣は、宿主の意思とは無関係に戦う。攻撃と防御のタイミングを、彼女の槍が勝手に判断する、ということだ

槍とは本来、攻防一体の武器である

しかしベアトリスが操っている限り、彼女の槍には、攻撃と防御の間に一瞬のタイムラグが生じる。槍の反応速度に宿主がついていけないからだ　それがわかっていれば、裏をかくのは簡単なことだった。

〝雪霞狼〟という強力な武器を囮に眷獣を引きつけ、雪菜自身の手でベアトリスを攻撃する。言葉にしてしまえば簡単なことだ。だが、そんな単純な攻撃が、ベアトリスには防げない。

槍を自分の意のままに操る剣巫と、槍の意思に振り回されている女吸血鬼　－勝負の行方は最初から明らかだったのだ。

背後から飛来する槍の眷獣を、雪菜は背中越しに放った〝雪霞狼〟で打ち落とす。そして、

「――響よ」

呆然としているベアトリスの頭に、密着状態からの掌打を叩きこんだ。脳を直接揺さぶられ、ベアトリスの意識が一瞬飛ぶ。その隙に雪菜は彼女の手から、携帯電話型の装置を奪い取

った。〝仮面憑き〟の制御端末である。これで〝仮面憑き〟を休眠させれば、彼女たちを無力化することができるはずだった

「ちっ……やべェな、こりゃ」

二回り近くも小柄な少女に一方的にやられるベアトリスを眺めて、キリシマが浮き足立つ。逃げ腰になって周囲を見回した彼は、無防備に取り残されているラ・フォリアに気づいて、攻撃的に舌なめずりした。崖の上から跳躍して、王女の目の前に着地する。

そんなキリシマを待ち構えていたかのように、ラ・フォリアは手際よく拳銃を抜いた。

「わたくしを人質にすればどうにかなる、と思いましたか？」

「まー、そういうことだわな。今度はこっちも余裕がねェ、抵抗すると痛い思いをするぜ」

王女の聡明さに苦笑しながら、キリシマが低く身構える。

ラ・フォリアは警告なしに発砲した。フルオートで吐き出された拳銃弾を、キリシマはやはり平然と払いのける。

「だから、9ミリ弾なんか効かねーっての！」

「そうですか。ならば、これを受けてみますか、獣人」

弾を撃ち尽くした拳銃を捨て、ラ・フォリアは背中からもう一挺の拳銃を取り出した。金色に輝く大型の呪式銃だ。銃把には美しい装飾が施され、拳銃としては長めの銃身の下に、刃渡り十五センチほどの銃剣が装着されている。

「呪式銃か。ハッタリとしては面白いがな」

クックッと喉るようにキリシマが笑った。

呪式銃とは、呪力を封印した貴金属の弾薬を使う特殊な銃だ。製造数は極めて少なく、完全な形で現存しているものは世界中に数えるほどしかない。実用品というよりも、博物館にでも展示するのがお似合いの代物だ。

威力はでかいが、弾薬が高価で、しかも一度に一発ずつしか装塡できない。本来は裕福な王族や貴族が、趣味の狩猟に使う銃なのだ。ある意味、ラ・フォリアに相応しい武器だが、実戦向きとは言い難い。

「よく狙えよ、お姫様」

挑発的に笑いながら、キリシマは真っ直ぐにラ・フォリアに突っ込んだ。

王女の呪式銃に弾が残っていないことが、キリシマの目には見えていた。単発式の呪式銃は構造的に、弾丸が入っているかどうか銃口から丸見えなのである。

ラ・フォリアが銃をキリシマに向ける。しかし弾のない銃を恐れる理由はない。

キリシマは王女を押し倒そうと無防備に彼女に近づいて、その瞬間、視界を灼く青白い閃光に悲鳴を上げた。激痛が彼の胴体を貫き、ごぼごぼと鮮血を吐きながらキリシマは苦笑する。

「ハ……ハハッ……なんだよ、そりゃ……心臓に騙されたぜ、畜生」

王女は呪式銃を構えたままの姿勢で、キリシマを冷酷に見下ろしていた。

銃の先端に取り付けられた銃剣が、青白い光に包まれている　その光が、キリシマの視界を灼き、彼の胸を貫いた攻撃の正体だ

「騙し討ちをしたような言われ方は心外です　わたくしは、あなたを撃つなどとはひと言も申していませんよ」

王女が淡々と異議を申し立てる　だが、すでにキリシマは意識をなくして地面に転がり、彼女の反論を聞いてはいなかった。

「ロウー！　この雌豚！　匹絞められねーのかよ、このカス野郎……！」

血まみれの部下を見て奇声にしげに叫んだのは、ダメージからどうにか立ち直ってきたベアトリスだった。〝仮面憑き〟の無力化を優先して、雪菜は彼女にとどめを刺さなかったのだ

正確には、その必要がなかった　というべきかもしれない

雪菜の最後の攻撃は、肉体を破壊するのではなく、肉体の機能を狂わせるためのものだった。細胞そのものに損傷がない以上、吸血鬼の再生能力は役に立たない

事実、平衡感覚を狂わされたベアトリスは、いまだにまともに歩くこともできずにいる。

それでも抵抗を続けるというのなら、雪菜は今度こそ彼女を一撃で倒すだろう。

しかしラ・フォリアは雪菜と目を合わせ、手出しは無用、と首を振る。ベアトリスの始末は自分がつける、と。だから黙って見ているように、と

「やってくれるじゃないの……小娘ども。あー、ホント萎えるわ……クソッ」

そんなラ・フォリアの余裕ぶった態度に、ベアトリスが血を吐きながら激昂する

「もういいわ……商売なんか知らねえっての　全員ぶっ殺してやる！」

女吸血鬼の手の中に、深紅の槍が現れる　宿主の怒りを反映しているのか、彼女の槍型の眷獣は、いくつもの鉤爪や逆棘を生やした凶悪な姿へと変わっていた

「そちらこそ、覚悟はよろしいですか」

不気味な槍の眷獣を目の当たりにしても、ラ・フォリアは涼しげな微笑を絶やさない。そして銃剣の切っ先を、手負いの女吸血鬼へと向ける。

「そんなチンケなナイフで、あたしの眷獣を止める気？　舐めやがって――！」

ベアトリスが絶叫した。彼女の眷獣が一気に倍近く膨れあがり、幾筋にも枝分かれしながら、王女へと殺到する。

「〝蛇紅羅〟！　そいつの臓腑を串刺しにしてやんなっ！」

勝ち誇ったようにベアトリスが笑う。だが、彼女の耳に聞こえてきたのは、ラ・フォリアの悲鳴ではなく、彼女が紡ぐ美しい祈りの詩だった。

「――我が身に宿れ、神々の娘。軍勢の守り手。剣の時代。勝利をもたらし、死を運ぶ者よ！」

その詠唱が終わる前に、ラ・フォリアの銃剣が閃光に包まれた。青白い輝きが太陽のように周囲を照らし出し、刃渡り十数メートルもの巨大な刃を形成する。

王女が掲げた光の剣の一閃は、槍の眷獣を両断し、瞬く間に音もなく焼き尽くした。

「　は？」

消滅していく自分の眷獣を、ベアトリスは呆けた表情で見つめた。ラ・フォリアが放った攻撃の正体を彼女は知っていた。だが、それは決してあり得ないはずのことだった。

「ヴェルンド・システムの疑似聖剣……!?　馬鹿なっ、そいつは精霊炉を備えた母船が近くになきゃ使えないはずだろ　―！」

「よく調べたものですね。賢生の入れ知恵ですか」

ラ・フォリアは、素直に感心したような表情で頷いた。

ヴェルンド・システムは、アルディギア王家が誇る騎士装備。膨大な霊力を流しこむことで、武器の霊格を強制的に引き上げる戦術支援兵器である。

魔族の天敵とまで呼ばれる強力な装備だが、装甲飛行船〝ランヴァルド〟のような、精霊炉を備えた母船と接続しなければ使えない、という制限もある。

「ですが、知らないわけではないのでしょう？　アルディギア王家の女子は強力な霊媒だと」

「……まさか……精霊を召喚したのか……自分の中に!?」

ベアトリスが血まみれの唇を震わせた。

ラ・フォリアは瞳を細めて笑う。青白く輝く碧眼を

「ええ。今は、わたくしが精霊炉です。ベアトリス・バスラー　」

白らの肉体を精霊の寄坐にして、膨大な霊力を操りながら、王女は高々と剣を掲げた。

「騎士のみならず、非戦闘員まで手にかけたあなたの所業――ラ・フォリア・リハヴァインの名において断罪します。我が部下たちの無念、その身で思い知りなさい」

雪菜との戦いのダメージが残るベアトリスに、その攻撃が避けられる道理もなかった。振り下ろされた疑似聖剣が、女吸血鬼の肉体を袈裟懸けに斬り倒す。

「ち……くしょう……なんで、このあたしが……」

眩い閃光に全身を灼かれながら、ベアトリスが呪詛の声を吐いた。

彼女の肉体が燃え尽きずに原形を留めているのは、ラ・フォリアが最後の最後で剣を止めたせいだ。それでも瀕死の重傷であることには変わりない。女吸血鬼は激しい痙攣を繰り返し、やがて動かなくなる。

自ら裁いた罪人にはもはや目もくれず、ラ・フォリアは空へと目を向けた。

三対六枚の翼を広げてそこに舞っているのは、模造天使――

疑似聖剣たるヴェルンド・システムも、神気に護られたあの人工の天使には通じない。叶瀬夏音を救える者がいるとすれば、それはただ一人――

「信じていますよ、古城」

自分の首筋に残る傷を愛おしげに撫でて、王女は美しい花のように微笑んだ。

7

叶瀬夏音が覚醒した影響か、吹きすさぶ海風に粉雪が混じり始めていた。
鉛色の雲の切れ間から、光の柱が地上へと伸びている。
その光芒を背景に、空を舞う模造天使が地上を眺めていた。
「Kyriiii

たりしなかったもんな……」

自分の本当の両親のことを知らず、生まれ育った自身の居場所をも失った　誰よりも身近に孤独と哀しさを知っていながら、彼女は誰よりも他者に優しかった。

それが彼女自身の生まれつきの資質なのか、あるいは彼女を育てた人々の愛情の成果なのかはわからない。だが、夏音のその気高い在り様は、きっと王族を名乗るのに相応しいものだと古城は思う。

そんな夏音が、誰かを傷つけることなんて望むはずがない。

たとえ相手が、神に呪われた吸血鬼の真祖であったとしても　だ。

「神と呼ばれている連中が、傲慢で偏狭で残酷で、自分の気に入らないモノを、滅ぼさずにはいられない存在っていうのなら、おまえをそんなやつらの使いっ走りにさせたりしない」

天使の翼に浮かぶ眼球から、光の剣が放たれる。

だが、その攻撃は夏音の意思ではない。天使の肉体の防衛反応だ。酸が金属を溶かすように、炎が木々を焼くように　――天使は魔族を攻撃せずにはいられない。その事実が夏音を苦しめる。

天使とは意思を持つ存在ではなく、熱や光と同じ、ただの現象だ。

人が天使になるということは、生命を単なる現象にまで貶める、ということと同義なのだ。

それを救いと呼ぶ者もいるだろう。苦しみからの解放と感じる者もいるだろう。

だが、それを望んでいない者にとっては、それは永劫の責め苦以外の何物でもあり得ない。

その苦しみから夏音を救い出す方法は、たったひとつ

「今すぐそこから引きずり降ろしてやるよ！」

降り注ぐ光の剣を次々に消し去りながら、占城が叫んだ。彼の全身から噴き出す異様な気配に、天使の眼球が猫のように虹彩を細める。

それらを目がけて占城は左腕を突き出した。その腕の先から噴き出したのは鮮血だ。

〝焔光の夜伯〟の血脈を継ぎし者、暁占城が、汝の枷を解き放つ　！」

鮮血は膨大な魔力の波動へと変わり、凝縮されたその波動が、実体を持った召喚獣の姿へと変わる。艶やかな銀色の鱗に覆われた、吸血鬼の眷獣へと。

「　疾く在れ、二番目の眷獣〝龍蛇の水銀〟！」

出現したのは龍だった。ゆるやかに流動してうねる蛇身と、鉤爪を持つ四肢。そして禍々しい巨大な翼。水銀の鱗に覆われた蛟龍だ。

それが、一体

同時に出現した二体の龍は、螺旋状に絡まり合って、前後に頭を持つ一体の巨龍の姿を形作っている。すなわち双頭の龍の姿を。

暁占城が、先代の第四真祖〝焔光の夜伯〟から受け継いだ十二の眷獣の中のひとつ。〝龍蛇の水銀〟は、二体で一体となる双頭の眷獣だったのだ。

だから彼らは、雪菜一人の血では目覚めなかった。

彼らを完全に従わせるためには、同時に異なる二人の霊媒の血が必要だったのだ。ラ・フォリアはそのことを看破して、古城に自分の血を吸わせたのだろう。

奇しくも実体化した〝龍蛇の水銀〟の肉体は銀色、それは古菜の棺の色であり、そして王女の髪の色でもある。

「Kyriiii

と喰いちぎっていた。鮮血の代わりに光が散り、模造天使が絶叫する。

「模造天使の余剰次元薄膜を、喰った……だと!?」

呆然とする賢生の眼前に、一対の翼を失った模造天使が墜ちてくる。

しかし双頭龍の攻撃は終わらない。前後から上下から左右から、次々にふたつの頭が襲いかかり、黄金の防護膜を刮ぎ落としていく。

それを見て賢生は、ついに古城の眷獣の正体に気づいた。

「あの眷獣　次元喰いか！　すべての次元ごと、空間を喰ったのか!?」

そう、雷光の獅子ほどの見た目の派手さも、緋色の双角獣ほどの騒々しさもない。だが、凶悪さという意味で水銀色の双頭龍は群を抜く。

彼らの顎に喰われた空間は、この世界から消滅する。

いわばこの世界そのものに、回復不能のダメージを与える眷獣なのだ。創造主たる〝神〟にとっての天敵。呪わしき最悪の魔獣だろう。

しかし今の古城にとって、その魔獣こそが夏音を救うための切り札だった。

遥かな高みに立つ天使に手が届かないというのなら、彼らを地上へと引きずり降ろせばいい。

高次空間の加護を失った今の模造天使には、古城の攻撃が通用する。彼女はもはや無敵ではないのだ。

だがしかし

そんな古城の希望を嘲笑うかのように、夏音の身体から流れ出す神気が勢いを増した。
「ぐ……お!?」
凄まじい閃光に網膜を灼かれて、古城がうめいた。
夏音の身体が燃えていた。巨大な翼には不釣り合いなほど小さな肢体が、燃え尽きる前のロウソクのように神気の炎を噴き上げる。
「そうだ、まだ同じ次元に隊ちたただけ——高次空間から流入する神気が失われたわけではない」
賢生が自賛するような、あるいは安堵するような声で呟いた。
喰いちぎられたはずの夏音の翼が再生する　その翼から、無数の光剣が無差別に放たれる
眷獣の攻撃は続いていた。噴き出す神気を、そして復活した天使の翼を、双頭龍が休みなく呑みこんでいく。失われた高次空間の防護膜を回復していない　古城の攻撃は通用しているのだ。だが、夏音本人が無傷である限り、神気は高次空間から流れこんでくる
「やめろ、叶瀬！」
慟哭を続ける模造天使へと、古城は必死に呼びかけた。
無限に再生する天使を倒すには、夏音の体内にある霊的中枢を破壊するしかない
だが、それはあり得ない選択肢だった。古城は夏音を助けるために戦っているのだ　彼女に傷を負わせなければ勝てないというのなら、それは敗北も同然である
ましてや強力すぎる古城の攻撃は、防御力を持たない今の夏音を確実に殺してしまうだろう。

占城は彼女を倒せない。彼女には勝てないのだ。
「そうだ。たとえ真祖の眷獣が相手でも、模造天使が敗北するはずがない。我々は負けない、負けられないのだ――！」
「くそっ！　なんでだ!?　これでも駄目なのかよ、叶瀬――!?」
賢生が殉教者のように満足げに笑い、占城が暗い絶望に顔を歪める。
そのとき涼やかな刃鳴りの音とともに、凛と澄んだ声が響いた。
「いいえ、先輩。わたしたちの勝ちですよ」
制服姿の小柄な少女が、銀色の槍を構えて占城の前に現れる。
華やかな笑みを浮かべながら、とん、と地面を蹴って彼女は跳んだ。
「姫柊!?」
占城は、彼女の妖精じみた後ろ姿を呆然と見送った。
人工の天使が光剣を射放ち、巨龍が暴れ狂う戦場へと、雪菜は怯むことなく突っ込んでいく。
そして彼女は音もなく宙に舞った。
「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」
雪菜が構えた銀色の槍が、粛々と紡がれる祝詞に呼応して輝きを放つ。
灰白いその光は、あらゆる結界を切り裂く神格振動波。魔力を無効化する降魔の光だ。
「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

雪菜の槍が、銀色の美しい弧を描いて放たれた。
古城の眷獣によって高次空間の防護膜を奪われた模造天使に、その攻撃を防ぐ力はない。
雪菜には夏音を突き抜く必要すらなかった。
ほんの一条、薄皮一枚ぶんだけ、彼女の肌を切り裂けばいい。
それだけで、夏音の肌に描かれた魔術紋様は消滅する。
魔力を無効化する〝雪霞狼〟の一撃が、叶瀬賢生が娘に刻んだ霊的進化の術式を消し去ったのだ。それは模造天使の、霊的中枢を支える力が失われたことを意味している。
「な……!?」
賢生は、その光景を放心したように見つめている。
魔術の呪縛から解き放たれた夏音が、本来の人間の姿を取り戻し、裸の彼女の背中から三対六枚の翼が抜け落ちた。眼球の形をした霊的中枢が、制御を失って暴走する――
そう思われた瞬間、
「喰い尽くせ、〝龍蛇の水銀〟！」
飛来した巨大なふたつの顎が、その眼球をすべて呑みこんだ。金色の輝きが消滅し、あふれ出していた神気が消失する。
ようやく腹が満たされた、と言わんばかりの咆吼を残して、双頭の巨龍が姿を消した。
意識をなくして倒れこむ夏音を、雪菜が支える。それを見て古城はホッと息を吐き、背後に

立つ賢生を睨みつけた　右手の指を握りこみ、拳を固める

「終わりだな、オッサン」

賢生が魂の抜けたような表情で頷いた。

「ああ、そのようだ」

喪失感に満ちた彼の目を見て、古城はやれやれと溜息をつき、構えていた拳を無言で下ろす

殴ってやろうと思っていたが、その気も失せた。

失意に彩られた賢生の瞳の奥には、たしかに夏音を案ずる愛情の色が感じられた

たとえ違法な実験でも、本人の意思を無視した最悪の方法でも、たしかにこの男は彼なりの方法で娘を愛していたのだ。ならば、この男を裁くのは古城ではない。彼を殴るのか、赦すのか、それを決めるのは古城の役目ではない。

「夏音……」

黒服の魔導技師が弱々しく呟いた。

かつて天使と呼ばれた銀髪の少女は、雪菜の膝で、子猫のように背中を丸めて眠っている。

彼女の頬に舞い降りてきた一片の雪が、南の島の強い陽射しを浴びて、音もなく静かに溶けていった。

8

沿岸警備隊の巡視船が到着したのは、それから間もなくのことだった。
巡視船の船上には南宮那月、そして煌坂紗矢華の姿もある。予想外に早く救助が訪れたのは、彼女たちが苦労して古城たちの行方を捜してくれていた証拠だろう。
「雪菜！」
エンジン付きのゴムボートで上陸してきた紗矢華は、焼き払われた島の惨状には目もくれず、出迎えに出た雪菜に抱きついた。そのまま自分の頬を雪菜にぐりぐりと押しつけて、
「はー、雪菜よかった無事で雪菜雪菜雪菜！　大丈夫？　怪我は？　怪我はない？」
「さ、紗矢華さん!?　く、くすぐったいです！」
むしゃぶりついてくる紗矢華の勢いに、雪菜が困ったように身をよじる。しかし紗矢華は、不安から解放された反動で欲望が暴走気味らしい。鼻息を荒くして雪菜の首筋に顔を突っこみ、怪しげな手つきで彼女の制服の下に手を入れる。
「紗矢華さん……ちょっ、ちょっとそこは……っ!?」
「おい」
蹂躙されている雪菜を見かねた古城が、暴走する紗矢華にチョップを叩きこんだ。

あ痛っ、と悲鳴を上げた紗矢華が、涙目になって振り返る。その隙に彼女から逃げ出した雪菜が、乱れた着衣を直しながら古城の背中に隠れた。

「き、気軽に触らないで欲しいんだけど！」

ポニーテールの後頭部を押さえて、紗矢華が古城に抗議する。前にもこんなことがあったな、と古城はうんざりした気分になりながら、

「その辺にしとけ。みんな見てるから」

「うっ」

紗矢華が、ようやく落ち着きを取り戻して、怖ず怖ずと周囲を見回した。人々の注目を集めていることに気づいて、コホン、と咳払いで誤魔化そうとする。

それから彼女は、ちらり、と古城の顔色をうかがうような上目遣いで、

「あ、あなたも生きてたのね、暁古城。まあよかったんじゃない　心配して損しちゃったわ」

「悪かったな、心配かけて。迎えに来てくれて助かった。サンキュ」

「う、うん。どういたしまして……って、あなたのために来たわけじゃないから！　あなたはついでだから！　本当に深い意味はないから！」

顔を真っ赤にしながら紗矢華が言い返す。相変わらず面倒くさいやつだなあ、と古城はぞんざいに手を振って、

「あー、はいはい　わかってるって」

「う！……なんなのよ、もう。死になさいよ」

なぜか恨みがましい目つきになって、紗矢華がぶつぶつと文句を言う。古城と紗矢華のやりとりを眺めて、雪菜は頭痛をこらえるように目元を覆っていた。

「――古城、手を貸してもらえますか」

そしてラ・フォリアが、古城を呼ぶ

彼女の傍に転がっているのは、意識不明のキリシマとベアトリスだ。そう言えばこいつらのことを忘れていたな、と古城は反省する。

登録魔族の犯罪者である彼らは、いずれ〝魔族特区〟の法で裁かれることになるのだろうが、とりあえず今は船に乗せて連れ帰らなければなるまい。

「生きてるのか、こいつら？」

ぼろぼろの二人を担ぎ上げながら、不安な顔で古城が訊く。どてっ腹に風穴が空いているキリシマと、胴体をぶった切られているベアトリス。倒されてからずいぶん時間が経っているのに、意識が戻る気配もない。いくら魔族でもまずいのではないかと不安になる。が、

「手加減はしました　ただ、精霊の加護を受けた疑似聖剣の傷です　魔族といえども、適切な処置をしなければ治ることはありません」

ラ・フォリアは涼しい顔でそう答えた。この人形のような美貌の王女が、魔族二人をこんな目に遭わせた張本人なのだ。彼女のことは怒らせないようにしよう、と古城は密かに心に誓う。

そして、二人仲良く並んで歩く古城たちを見て、紗矢華がぎょっと目を丸くした。
「ラ・フォリア王女……!?」
唇を震わせながらそう呟いて、紗矢華は慌てて古城の腕を引き寄せた。咎めるような表情で古城を睨んで、上擦った声で訊いてくる。
「あ、あなた、誰に向かって馴れ馴れしい口を利いてるのよ。この人が誰か知ってるの？」
「あー……まあ、いちおうは」
古城は曖昧に頷いた。そういえば紗矢華は、もともとラ・フォリアの案内役だったのだ。出会った状況が状況だけに、なんとなく感覚が麻痺していたが、どちらかといえば紗矢華の反応のほうが、王女に対する正しい態度なのだろう。しかし今さら扱いを変えても、ラ・フォリアは喜ばないのではないだろうか、と古城はなんとなく思う。
「煌坂紗矢華ですね。わたくしのせいであなたにも苦労をかけてしまいました」
ラ・フォリアが紗矢華に微笑みかける。紗矢華は慌てて姿勢を正しながら、
「申し訳ありません、王女殿下。このバカにはあとできつく言っておきますので――」
「よいのです。古城はわたくしにとっても特別な……その、初めての殿方ですから」
不意に羞じらうような表情になって、ラ・フォリアが軽く目を伏せた。誤解を招きかねない王女の発言に、古城の顔から血の気が引く。
「は、初めて？　それはどういう意味で……？」

紗矢華が顔を強張らせて訊いた。王女は頬を赤らめてうつむくだけだ。

しかし彼女の可憐な唇の端に、かすかな笑みが浮いているのを古城は見逃さなかった。ラ・フォリアは明らかに面白がっている。古城を困らせて愉しむつもりなのだ。

そしてさらに厄介なことに、どこからともなく現れた那月が、古城たちの姿をじろじろと眺めて、

「ふん。なるほど、昨夜はお楽しみだったようだな、暁」

「ちょ……那月ちゃん!? そういう余計なことを言うのはやめてくれ……！」

明白な悪意のある担任教師の言葉に、古城は思わず悲鳴を上げた。ちゃん付けはやめろ、と那月が膨れるが、そんな細かいことを気にしている場合ではない。

「お楽しみって……雪菜、それに王女も、その首のアザはもしかして……」

顔色を蒼白にして紗矢華がうめく。雪菜とラ・フォリアの首筋には、キスマークに似た小さな傷跡が今もうっすらと残されていた。古城の吸血行為の痕跡だ。

「ち、違うんです、紗矢華さん」

雪菜が慌てて元ルームメイトをなだめようとする。

「この傷は人工呼吸のようなものの痕跡で、決していかがわしい行為の痕ではないんです。で、ですよね、先輩？」

「そ、そう。そういうことだから」

古城も咄嗟に雪菜と話を合わせ、なんとか紗矢華の誤解を解こうと試みる。息の合った二人の言い訳を、紗矢華はしばらく無言で眺めていた。

そして紗矢華は左手に提げていた楽器ケースから、すらりと銀の長剣を抜き放つ　その剣を変形させて、鋭く尖った矢をつがえると、

「暁古城おおおおおおうっ……！」

「き、煌坂？　ま、待て、落ち着け。その弓はあれだろ、ヤバいやつだろ　!?」

「動かないで欲しいんだけど、このケダモノ！　あなたは私が目を離すとすぐにこれだから！」

「だーっ、だから少しは人の話を聞けって！」

怒り狂う紗矢華の攻撃から、古城が必死で逃げ惑う　それをどうにか止めようとする雪菜、そんな古城たちの様子を、ラ・フォリアは束の間、本当に愉しそうに眺めていた

それから王女は、救助隊の担架の上に寝かされていた叶瀬夏音のほうに歩み寄る　夏音が、意識を取り戻して、うっすらと瞼を開けたことに気づいたのだ

「悪い夢からは醒めましたか、夏音？」

自分によく似た、妹のような少女をのぞきこんで、ラ・フォリアが訊いた、

「ゆ……め……」

ぼんやりとした表情で王女を見上げて、夏音は困惑したように呟いた　そして、夢の続きを見ているように頷き返す。

「そう、でした。お父様が私を救うと言って……私は……たくさんの人を……」
「大丈夫です、夏音。古城たちがあなたを助けてくれました」
ラ・フォリアは優しく夏音に微笑み、古城たちの方角を指さした。
紗矢華に説教されている古城の姿に気づいて、夏音が驚いたように目を細める。
「……お兄さん……が」
「彼らだけではありません、わたくしもついていますよ、夏音」
ラ・フォリアが夏音の手を握って囁いた。
夏音はそんな王女を、不思議そうに見返す。実際に彼女の手に触れるまで、ラ・フォリアの存在を夢の一部だと思っていたのかもしれない。
「あなた……は……？」
「わたくしは、あなたの……そうですね、家族です」
少し思案するような沈黙を挟んでラ・フォリアが言った。
その言葉が、なにかとても大切なものであるかのように、夏音は自分の口で繰り返す。
「家族……」

終章

巡視船が紘神島に帰港したのは、日曜日の夕方近くになってからのことだった。

鏡のような夕凪の海を、沈みかけの太陽が金色に照らしている。船室からその美しい景色を眺めていた叶瀬賢生は、突然漂ってきたコーヒーの香りに、怪訝な表情を浮かべて振り返った。

犯罪者を勾留するための狭い船室である。作り付けの小さな椅子とテーブルだけが置かれた、殺風景な部屋だ。そのテーブルの上にコーヒーカップを置いて、一人の男が座っている。

短髪を逆立て、ヘッドフォンを首に引っかけた十六、七歳の少年だった。

「飲むかい？」

少年が賢生の前にコーヒーを差し出してくる。

彼がいつ部屋に入ってきて、いつからそこに座っていたのか、賢生には思い出せなかった。ドアを開け閉めする気配も、足音も、この少年の動作からはまったく音が感じられない。

「君は、誰だ？」

「矢瀬基樹。暁占城のクラスメイト、と言ったら納得してもらえるか？」

賢生の質問に、ニヤリと笑って少年が答えた。

「その制服……なるほど、第四真祖の監視役か。人工島管理公社の間諜だな」

「あんたがそれで納得するのなら、そう思ってくれて構わないぜ」

ふむ、と賢生は無関心に頷く。どのみち彼が何者だろうと自分には関係のないことだ。

今の賢生にとって唯一気がかりがあるとすれば、それは夏音の処遇だけだった。

模造天使の儀式のために、夏音は紋神市の上空で何度か戦闘をしている。いくつもの建物が壊れて、大勢の負傷者が出た。そのことで彼女がなんらかの罪に問われる可能性は高かった。

だが、

「あんたの娘のことなら心配要らない」

そんな賢生の心の内を見透かしたように、矢瀬が無遠慮に言った

「なんせ未成年だし、あんたらが彼女を操っていた思考拘束具も押さえてある　むしろ被害者扱いってことで、まず罪には問われんだろうさ。それに、なんといっても彼女にはアルディギアの王宮が後ろ盾についてるからな」

「……そうか」

賢生が安堵の息を吐く。それが聞ければもう十分だった

矢瀬が肩をすくめて、言い出しにくそうに頭をかく。

「で、まあ、問題になるのがあんたの立場なわけなんだが」

「べつに構わんよ。覚悟はしている」

「まあな……違法な人体実験に殺人教唆。聖域条約違反は数知れず　極めつけに禁呪の使用だ。普通に考えれば、実刑は免れないところだが――」

そう言って矢瀬は唐突に口を細めた。

「ここで問題になってくるのがあんたの動機だ。あんたはなにを知っている？」

「……なんのことだ？」

賢生は素知らぬ表情で訊き返す。だが、矢瀬は目を逸らさない。

「娘を愛しているから、天界に送りこもうとした、というあんたの理屈――まるっきり嘘とは言わないが、それだけとも思えんな。あんたには理由があったんだ　愛娘を実験台にしてまで、模造天使の実用化を急がなければならない理由がな」

「……」

賢生は沈黙した。

そう。賢生はメイガスクラフトに利用されていたわけではない。研究を続けるために彼らの資金を利用したのは賢生のほうだ。模造天使さえ実用化できれば、その技術が軍事利用されても構わなかった。たとえそれがどんな結果を招こうとも、賢生には、模造天使を完成させなければならない理由があったのだ。

「それを訊いてどうする。きみたちも本当は理解しているのだろう」

やがて賢生が重々しく答えた。

「真祖は三名しか存在してはならない。第四の真祖が現れたということは、その力が必要になるような敵が目覚める、ということだ。我々にはもう、時間がないのだ」

だからあんたは兵器としての天使を造り出そうとしたのか。ヤツを滅ぼすために」

「第四真祖ごときを倒せない兵器では、どのみちあの御方には歯が立たん。笑うがいい。私の

研究は、まったくの徒労だったというわけだ」

自嘲するように笑って、賢生が背中を丸める。それきり彼はもう頭を上げようとはしなかった。矢瀬がやれやれと息を吐く。

「まあ、そんな捨てたもんでもないさ。あんたの研究も、古城もな」

湯気の立つコーヒーカップを残して立ち上がり、矢瀬は船室の扉に手をかけた。部屋を出て行く直前、背後を振り返って賢生に告げる。

「あんたの身柄は公社が預かる。悪いが、もうしばらく働いてもらうぞ、宮廷魔導技師」

十

事件の後始末は那月と紗矢華が引き受けてくれるということで、古城たちは案外あっさりと帰宅が許された。巡視船が紋神港に到着して三十分ばかり過ぎたころ、夕焼けに照らされた甲板上に、帰り支度を終えた古城と雪菜が現れる。

下船の準備に時間がかかったのは、古城が着替えに手間取ったせいだった。模造天使との戦闘で制服がズタズタになったため、代わりの服を探していたのだ。

結果的に古城が手に入れたのは、巡視船の船長が譲ってくれた安い古着。ド派手なアロハシャツとピチピチのバミューダパンツだった。

「――もう少しどうにかならなかったのか、この服は」

リゾートっぽい、というよりは街のチンピラ風味の自分の姿を見下ろして、古城が嘆息するビーチサンダルを引きずる古城を、雪菜は笑いをこらえているような表情で見上げて、

「似合ってますよ、先輩」

「褒められても微妙に嬉しくないんだが……まあ、もらいものだから贅沢は言えないけどさ」

うんざりしたように首を振り、古城は背後を振り返った。見送りを期待しているのではなく、ほかの人々の姿が見えないことが気になったのだ。

「叶瀬は？」

「しばらく入院することになるそうです。魔術儀式の影響で、衰弱がひどいので」

夏音を気遣うような表情で、雪菜が言う。

冷静に考えてみれば当然のことだった。天使などという別次元の生命体に、無理やり進化させられそうになったのだ。夏音の肉体に影響がないはずがない。

唯一の救いは、彼女の天使化を強制解除したときの反動までもが、〝雪霞狼〟の能力で無効化されていたことだった。そうでなければ夏音はあのとき、命を落としていてもおかしくなかったはずだ。

「大丈夫なのかな、あいつ。ほら、身体のこと以外にもいろいろ」

古城が顔をしかめて訊いた。

実験に利用されていただけとはいえ、夏音は何人もの人間に重傷を負わせている。おまけに養父は犯罪者として拘束されているのだ。衰弱している彼女にとっては、かなり過酷な状況のはずである。

しかし雪菜は少しだけ明るい表情で、

「そうですね……でも、彼女のお父様の裁判が終わって落ち着くまでは、南宮先生が後見人になってくださるそうですよ」

「那月ちゃんが？　そうか、だったら心配ないか……」

担任教師の童顔を思い出して、古城はホッと息を肩の力を抜く。

ぶっきらぼうな態度とは裏腹に、那月は意外に面倒見がいい　そのことを古城はよく知っていた。第四真祖などという非常識な存在が、普通の学生として高校に通えているのも、彼女が手を尽くしてくれたお陰なのである。異国の王族一人の生活をどうにかするくらい、那月にしてみれば造作もないことだろう

「ラ・フォリア王女は、少し残念がってましたけど」

どことなく意外な雪菜の言葉に、古城は、王女が絃神市に来た目的を思い出す

「ああ、そうか……あの姫様、叶瀬をアルディギアに連れて帰るつもりだったのか」

「はい。でも、それは叶瀬さんが断ったそうです。王族としての生活は望んでいないと」

「……まあ、本人がそう言うならな……勿体ない気がするけどな」

いかにも夏音らしい決断に、古城は敬意を覚えつつも思わず本音を洩らす
雪菜も仄かに苦笑しながら頷いて、
「アルディギアの王太后様もがっかりしてたみたいですよ　叶瀬さんに会うのを楽しみにしていたらしいですから」
「王太后が？　前国王じゃなくて？」
古城は訝しげに眉を上げた。
王太后　つまりラ・フォリアの祖母にとって夏音は、血のつながりがないどころか、旦那の浮気相手の娘である。わざわざ会いたがる理由はないはずだ
「もともと叶瀬さんのお母様は、王太后様のご友人だったそうですし　それに叶瀬さんの今の境遇を知って、王太后様はずいぶん心配していたみたいです」
「へえ……いい人なんだな。それに引き替え、前国王は、浮気がバレて逃亡したとか言ってなかったか？　ずいぶん差があるもんだな」
古城は素直に感心してそう言った
そんな古城を、雪菜が無表情に見上げてくる　そして彼女は抑揚の乏しい冷たい声で、ぽつりと呟いた
「本当に許せないですよね。そういう無責任な人は」
「あ、ああ……」

なぜか漠然とした危機感を覚えて、古城は曖昧に頷いた。特に疚しいことはないはずなのに、無意識に雪菜から目を逸らしてしまう。

「少し目を離すとすぐにべつの女の人と仲良くなって。それが、ほかの誰かの友達だったり、身分の差があったりしてもおかまいなしで……おまけに、いくら緊急時とはいえ、人が眠っているときに、そのすぐ隣であいう行為をするなんて　－」

「あ、あのさ……姫柊？　それってラ・フォリアの祖父さんの話……だよな？」

古城がぎこちない口調で訊き返した。雪菜はにこやかに微笑して、

「はい、もちろん。それともほかに心当たりがありますか？」

「い、いやそれは、なんというか」

淡々と訊き返してくる彼女の言葉に、古城は追い詰められたような気分でうめく。

その直後、船内の通路から軽やかな足音が聞こえて、銀髪の王女が現れた。彼女の背後には、案内役の紗矢華が、護衛の騎士のように付き従っている。なかなか絵になる光景だ。

「――こちらにいたのですか、古城。それに雪菜も」

「ラ・フォリア？　もう帰るのか？」

頬を伝う脂汗を拭いながら、どこか救われたような口調で古城が訊いた。

ラ・フォリアは怪訝そうに古城を見返しながらも、優雅に微笑み、

「これから病院に向かいます。墜落した飛行船の生存者が収容されているそうなので」

「救助された人たちがいたのか」
それはいい報せだな、と古城も声を弾ませる。
「はい。そのあとは東京に。非公式の訪問のつもりだったのですが、こうも騒ぎか大きくなっては、そういうわけにもいかないでしょう」
「外交か……大変だな、王族ってやつも」
何日も漂流を続けたあとでの戦闘の連続。そして古城に自分の血まで分け与えた彼女が、疲れていないはずがない。多くの部下たちを失ったことに、心痛を覚えていないはずもない。
それなのに公務に戻ると告げるラ・フォリアに、古城は心配そうな視線を向ける
王女は、そんな古城を不思議そうに見上げ、そして花のように微笑んだ。
「お別れは申しません。あなた方のおかげで、無事にこの地に辿り着くことができました。この縁、いずれまた意味を持つときがありましょう」
気品あふれる口調でそう言って、王女は古城たちの前に歩み出た。そして雪菜を抱き寄せ、彼女の左右の頬に順番にキスをする。少しびっくりしたような表情でそれを受ける雪菜。
ただの挨拶だとわかっていても、彼女たちが演じると華やかな映画のワンシーンを見ているような気分になる。少し感動的ですらあった。
続いて王女は古城に一歩近づいて、同じように顔を寄せてきた。その瞳に、悪戯っぽい光が宿る　そして彼女は、緊張して硬直している古城の唇に、自らの唇を押し当てた。

「……！」

その場にいる王女以外の全員の時間が止まった。

雪菜と紗矢華が目を丸くして固まっていた。いったいなにが起きているのか、理解できない、という表情だ。

古城は動揺のあまり動けない　それをいいことに王女は好きなだけキスの感触をむさぼって、ようやく古城を解放する。

「それでは、ごきげんよう」

天使のような笑顔で手を振りながら、タラップを降りていくラ・フォリア

「あ……王女、お待ちを……って、暁古城！　あとでどういうことかきっちり説明してもらうから！　ていうか、灰になれ　！」

ハッと我に返った紗矢華が慌てて王女を追いかけながら、一瞬だけ古城を振り返り、怒りに燃える眼差しを向けてくる。勘弁してくれ、と古城は思わず天を仰ぎ、

「―先輩」

うっすらと殺気すら漂う雪菜の声に凍りつく。

「ま、待て。今のは俺は悪くないだろ。あれはたぶんちょっとした挨拶で　！」

「ちょっとした挨拶、ですか。そうですか……」

「だから、なんで槍を出そうとする!?」

ギターケースに手をかける雪菜を、古城が必死でなだめ続ける。と、
「古城君！」
王女一行と入れ替わりにタラップを上ってきた足音に、古城は思わず頭を抱えた。
足音の主は、長髪をショートカット風にまとめた小柄な中学生。凪沙だ。
「ね、ね、今の誰!?　夏音ちゃんそっくりだけど外国の人だよね。すごい美人ていうか、王女様みたいっていうか、なんであんな人と知り合いなの。なんで古城君とキスしてたの。ていうか古城君どこに行ってたの。なにその恰好。昨日家にも帰ってこなくて心配したんだから！」
「な、凪沙!?　おまえ、なんでこんなところに……!?」
早口で絶え間なく質問を続ける妹の姿を、古城は半ば放心しながら見つめる
いったいなにが起きているのか、古城は本気でわからない。自分が港にいることを、凪沙が知っているはずがないのだ　しかも、よりによって最悪の場面を目撃されてしまったらしい。どんな言い訳をすればあれを凄魔化せるのか、今回ばかりはまったく思いつかない
そして凪沙の隣に立っている人影に気づいて、古城は顔を引き攣らせた
ここに来て古城はようやく、今の今まで完全に忘れていたとてつもなく大事な用件について思い出す。その大切な約束の相手は、青ざめる古城に邪気のない笑顔を見せた
なぜか気合いの入った私服姿の浅葱が、うろたえる古城を愉快そうに見つめていた
「あたしが連れてきたの。煌坂さんが、あんたがこの船に乗ってるって教えてくれたから」

「あ……浅葱……なんで、おまえ、いつから煌坂と結託して……!?」

背筋をじっとりと汗で湿らせて、古城がうめく。

ちらりと横目で雪菜の反応をうかがうが、彼女も困惑したような表情を浮かべていた　どうやら古城たちが紘神島を離れていた間に、ややこしい事態になっていたらしい。

「軍隊がらみの企業に誘拐されたっていうから心配してたんだけど。余計なお世話だったみたいね。可愛い外国人の女の子ともずいぶん仲良くなったみたいで」

「違う！　いや、違わないけど、俺と彼女はおまえらが思ってるような関係じゃないからな、姫柊」

「そうですね……たしかに、わたしが思っていたよりも、ずっと仲良くなってたみたいですね、先輩と彼女は」

「ひ、姫柊……！」

同意を求めた雪菜に素っ気なく突き放されて、古城の目の前が暗くなる。

絶望の表情を浮かべる古城を、浅葱は冷ややかな笑顔で睨みつけて、

「まあいいわ。時間はたっぷりあることだし、絵のモデルでもやりながら、ゆっくり聞かせてもらおうじゃないの、その理由とやらを」

「モデルって……」

その約束はまだ生きてたのか、と古城は軽い目眩を覚えた。肖像画の提出期限はたしか明日。

今夜中に描き上げれば間に合うのだから、浅葱の要求は的外れではない。
しかしこの状況下、差し向かいで絵のモデルをするというのは、浅葱が描き終えるまで延々と尋問タイムが続く、というのと同じことではないだろうか。
「まさか嫌とは言わないわよね。おかげで俄然、創作意欲が湧いてきたし」
華やかな笑みを浮かべて、浅葱がポキポキと指を鳴らす。
古城は無言で手すりに突っ伏した。これが神の御使いに逆らった報いなのだろうか、と苦悩しながら、あらためて己の不幸を呪う。

水平線の彼方に夕陽が沈んで、〝魔族特区〟に新たな夜が訪れようとしていた
第四真祖、暁古城の苦難の日々は、こうして今日も続いていく

あとがき

空から降ってくる女の子がいちばん似合う乗り物といえば――という感じでアンケートをとったら、その存在のマイナーさに反して、「飛行船」ってやつが確実に上位に食いこんでくるだろうと勝手に予想しているのですが、実際のところはどうなんでしょうか　女の子の正体が実はどこぞの王女様だったりすると、もういろいろと完璧な気がするのですが。飛行船的に

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド3』をお届けしております。

普段は殺風景な人工島が舞台のこのシリーズですが、今回は少し趣向を変えて若干アウトドアな雰囲気になりました　サバイバルというには緊張感が足りない感じですが、個人的に漂流モノの映画や某テレビドラマや孤島モノのミステリ（……はちょっと違うか）が好きなので、書いていて非常に楽しかったです。といいつつ、実は孤島パートは最初の予定の半分くらいにカットされてしまっているのですが。

その理由は、皆様も薄々お察しのとおり、話がまったく進まずにあの二人がいちゃついてるだけだったから、でした。削ってしまったエピソードが惜しいという気持ちもあるのですが、フルで収録してたら、たぶん文庫を壁に向かってぶん投げたい気分になっていたはずなので、

やはりカットして正解だったのかな、と思います。

それから、この巻でも例によって新ヒロインが登場しています　しかし今回の番狂わせは、紗矢華でした。実は紗矢華はこの巻には登場しない予定で、担当さんとの打ち合わせでも「出ません」と断言していたのです。しかし結果的には、その程度の逆境でめげるような子ではなかった、ということで。クラスメイトという地の利に恵まれた浅葱や、なにかとチートな新ヒロインに挟まれて気苦労の多い紗矢華ですが、スペック面ではめちゃめちゃ優遇されているキャラなので、こんなふうに自己主張してくれるのは原作者として嬉しい限り

そして新ヒロインといえば、叶瀬夏音の性格について助言をくださった作家の皆様に、この場を借りてこっそりお礼を申し上げます　ありがとうございました。助かりました

それでは最後になりましたが、今回も素晴らしく魅力的なイラストで本作を飾ってくださったマニャ子さま、本当にありがとうございました！　また担当の湯澤さんをはじめ、この本の制作・流通に関わってくださったすべての皆様にも心からお礼申し上げます

そしてこの本を読んでくださった読者の皆様にも精一杯の感謝を

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ3」（同）
「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）
「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）

「レベリオン　彼女のいない教室」（同）
「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・I　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・II　Seven」（同）
「i・d・III　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　各点アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）
「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re-MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科学部カイメツ」（同）
「アスラクライン⑪　めぐりあい異世界」（同）

「アスラクライン12」（同）世界崩壊カウントダウン
「アスラクライン13」（同）さくらさくら
「アスラクライン14」（同）The Lost Files
「ストライク・ザ・ブラッドI」（同）吸血の右腕
「ストライク・ザ・ブラッド2」（同）戦士の使者
「サイハテの聖表」（同）
「M.G.H」（単行本　徳間書店刊）楽園の鏡像
「聖遺の天使」（単行本　双葉社刊）
「カーマロカ」（同）
「煉獄の鬼王」（双葉文庫）
「海底密室」（デュアル文庫）
「ワイヤレスハート・チャイルド」（同）
「アース・リバース」（スニーカー文庫）
「ランブルフィッシュ1」（同）新学期乱入編
「ランブルフィッシュ②」（同）中間試験暴走編
「ランブルフィッシュ③」（同）場外乱闘恋心編
「ランブルフィッシュ④」（同）仏説崩壊編
「ランブルフィッシュ⑤」（同）闪大使襲来編

「ランブルフィッシュ⑥」（亡霊殲滅編 上）同
「ランブルフィッシュ⑦」（亡霊殲滅編 下）同
「ランブルフィッシュ⑧」（決戦前夜秘湯編）同
「ランブルフィッシュ9 人公間幕引襲編」同
「ランブルフィッシュ10 学園突主終幕編」同
「ランブルフィッシュ あんぷらぐど」同
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「田宮殿にて」（単行本 光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・T日王 NOVELS」（ガカカ文庫）
「幻獣坐 -The Scarlet Sinner -」（講談社ノベルズ）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102 8584 東京都千代田区富士見1-8 19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

■

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド3

天使炎上

三雲岳斗

発行　二〇一二年二月十日　初版発行

発行者　髙野　潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇二-八八四　東京都千代田区富士見二-一三-一九
電話〇三-五二一-六八三九　（編集）
http://asciimw.jp/

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-一三-一
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書の一部または全部を無断で複製することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。なお、本書を代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、私的使用の場合も含め、一切認められておりません。

※落丁・乱丁本はお取り替えいたしますので、購入された書店名を明記して、小社販売部までお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

※定価はカバーに表示してあります。

© 2012 GAKUTO MIKUMO
Printed in Japan
ISBN978-4-04-886274-5 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870267-6

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30 2090

ストライク・ザ・ブラッド2 戦王の使者

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870752-7

世界最強の吸血鬼・暁古城と、彼を監視する雪菜の前に、欧州の真祖"忘却の戦王"の使者が現れる。その目的は古城に対する宣戦布告か、それとも……

み-3-31 2191

ストライク・ザ・ブラッド3 天使炎上

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-886274-5

失踪したクラスメイトを追跡して、無人島に漂着した古城と雪菜。そして彼らが遭遇したのは、魔族特区で生み出された対魔族兵器"人造天使"たった……

み-3-33 2280

サイハテの聖衣（シュラウド）

三雲岳斗
イラスト 朱シオ

ISBN978-4-04-886101-4

霊獣を封印した破魔の鎧――獣装戦闘服（ビースト）、またの名を"聖衣"。これは、怪物の侵攻から人々を守るため、聖衣をまとい戦う、美しき少女たちの物語。

み-3-32 2251

アスラクライン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3090-0

高校入学を明日に控えたその夜、留学中の兄から銀色のトランクが届けられた。そして僕と操緒の秘密を巡る、あまりにも賑やかな、高校生活が始まった――。

み-3-16 1123

アスラクライン②
夜とUMAとDカップ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3179-6

かわいい女の子に囲まれ始まった高校生活。だけど、一人は幽霊、一人は悪魔、そしてもう一人はサイボーグ!? 普通の高校生智春は、どこへ行ってしまうのか＝

み-3-17 1160

アスラクライン③
やまいはきから

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3308-X

個性強すぎの美少女たちに囲まれて、刺激強すぎの高校生活を送る智春。今度の敵は過労と記憶喪失!? トラブルの連続に、ますます加速するスクールバンク第3弾＝

み-3-18 1221

アスラクライン④
秘密の転校生のヒミツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3449-3

智春のクラスに交換留学生がやってくる。貴族の末裔で美少女という前評判を聞きつけて、盛り上がるクラスメイトたち。しかし彼女は……。人気シリーズ第4弾。

み-3-19 1276

アスラクライン⑤
洛高アンダーワールド

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3550-3

智春の前にまた新たな女の子が現れた!! 今度は小動物系美少女の沙原ひかり。美化委員の活動を通して親密な雰囲気になっていく二人だったが……。

み-3-20 1314

アスラクライン⑥
おしえて生徒会長!

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3685-0

入学以来、めちゃめちゃな学校生活を送る智春は、その原因である行方不明の兄に会いに行くことを決意。そして兄の手がかりを握る人物を訪ねるが……!?

み-3-21 1374

電撃文庫

アスラクライン⑦ 凍えて眠れ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3842-1

洛高の二年生が修学旅行へ出かけた。留守中、佐伯兄から洛高と玲子のことを託された智春だったが……。美少女たちに囲まれた高校生活が思わぬ急展開!?

み-3-22 1426

アスラクライン⑧ 真夏の夜のナイトメア

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3934-9

アルバイトのため海辺のペンションに滞在中の智春たちだったが……。解き明かされていく二巡目の世界と、悪魔出現の謎。絶好調スクールバンク夏休み篇!

み-3-23 1469

アスラクライン⑨ KLEIN Re-MIX

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-4118-2

機巧魔神や悪魔出現の謎を解く鍵を握る人物とは、操緒の姉の女子大生、水無神環緒だった!? 大好評人気シリーズ、新たな特技を身につけ暴走気味の第9弾!

み-3-24 1523

アスラクライン⑩ 科學部カイメツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867088-3

水無神環緒が語る"一巡目の世界"の秘密。執拗に智春たちを狙う鳳島氷羽子。急速に非在化する奏――。物語は怒涛の急展開!! 人気シリーズ第10弾!!

み-3-25 1603

アスラクライン⑪ めぐりあい異世界

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867267-2

鋼色の機巧魔神との戦闘に敗れ、一巡目の世界へと飛ばされた智春。異界の街で彼が出会った人物は!? そして「魔女」と呼ばれる美少女が現れて……

み-3-26 1663

アスラクライン⑫ 世界崩壊カウントダウン

三雲岳斗
イラスト　和狸ナオ

ISBN978-4-04-867763-9

人間化した奏と、高校生の姿に美しく成長したアニア。そして大破した機巧魔神《黒鐵》の中から、操緒を救い出す方法を知る人物が現れて……!?

み3-27　1749

アスラクライン⑬ さくらさくら

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868141-4

二巡目の世界へと帰還した智春たち。しかしここにも、世界崩壊の予兆が!? 非在化を始めた世界を前に、操緒と智春が選んだ最後の決断とは……!?。

み3-28　1851

アスラクライン⑭ The Lost Files

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868334-0

夏目智春が謎の失踪を遂げてから数ヵ月。智春の義理の妹・苑宮和葉が、洛高に残された記録から知った、智春の隠された記憶とは

み3-29　1902

シースルー!?

天羽伊吹清
イラスト／雛咲

ISBN978-4-04-870748-0

好きな女の子の服が、一枚だけ透けて見える能力が身についてしまった……!? 神秘が導く懊悩コメディ。業界初の"透けてるよイラスト"仕様で刊行♡

あ31-1　2196

シースルー!? ②

天羽伊吹清
イラスト／雛咲

ISBN978-4-04-886391-9

電撃文庫MAGAZINEに連載されたエッチすぎる問題作、第2弾！　好きな女の子の服は透けなくなったけど、代わりにエッチな怪異が次々と起こって……!?

あ31-2　2288

電撃文庫

ソードアート・オンライン1 アインクラッド

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-867760-8

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは〝死〟を意味する。この仮想空間は、ゲームであっても遊びではない　第15回電撃大賞（大賞）受賞者が描く大作！

か-16-2　1746

ソードアート・オンライン2 アインクラッド

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-867935-0

アインクラッドでは珍しい〝ビーストテイマー〟の少女・シリカが窮地に陥ったとき、彼女を助けたのは、素性も分からぬ謎の《黒い剣士》キリトだった

か-16-4　1804

ソードアート・オンライン3 フェアリイ・ダンス

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-868193-3

謎のデスゲームSAOをクリア、現実世界に戻ってきたキリト。しかし、攻略パートナーであり、永遠の誓いをたてた想い人アスナはいまだ帰還しておらず……

か-16-6　1862

ソードアート・オンライン4 フェアリイ・ダンス

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-868452-1

MMO《ALO》内へ、アスナを救うためログインしたキリトは、ついに《世界樹》までたどり着く。しかし彼の秘密を、旅を共にした少女・リーファが知ってしまい……

か-16-8　1924

ソードアート・オンライン5 ファントム・バレット

川原 礫
イラスト　abec

ISBN978-4-04-868763-8

《SAO》事件から一年　次にキリトを待ち受けるのは、銃と鋼鉄のVRMMO《ガンゲイル・オンライン》。突如発生した謎の殺人事件を追うが……！　新章突入！

か-16-10　1985

電撃文庫

ソードアート・オンライン6 ファントム・バレット

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-870132-7

《GGO》にログインしたキリトは、銃が支配するこのゲームで唯一《光剣》を駆使し、《BoB》を勝ち進む。そして決勝。ついに《死銃》が姿を現して……。

か-16-12 2046

ソードアート・オンライン7 マザーズ・ロザリオ

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-870431-1

次世代飛行系VRMMO《アルヴヘイム・オンライン》にてアスナが遭遇した、とあるアバターとの大切な想い出とは？『マザーズ・ロザリオ』編、登場！

か 16-14 2107

ソードアート・オンライン8 アーリー・アンド・レイト

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-870733-6

《SAO》で起こった奇怪な殺人の謎を追う『圏内事件』、《ALO》伝説の聖剣獲得クエストを描く「キャリバー」、キリトが《SAO》初日に体験したエピソード「はじまりの日」を収録！

か-16-16 2170

ソードアート・オンライン9 アリシゼーション・ビギニング

川原 礫
イラスト／abec

ISBN978-4-04-886271-4

気づけばキリトは、直前の記憶を無くし、謎の仮想世界に入り込んでいた……。『SAO』史上最も支持を得たエピソード、壮大なる《アリシゼーション》編、開幕!!

か-16-19 2278

なれる！SE 2週間でわかる？SE入門

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-868605-1

きつい！　厳しい！　帰れない！　そんな3Kと戦うシステムエンジニアの過酷な日々を描く問題作。でも、ヒロインは年齢不詳のかわいい女の子なのです。

な-12-6 1965

電撃文庫

なれる！SE2 基礎から学ぶ？運用構築

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-868937-3

無事にOJTを乗り越えた工兵が出会った女の子はなぜか立華と犬猿の仲で!? とある携帯RPGのインフラをめぐって構築と運用の不倶戴天の戦いがはじまる！

な-12-7 2025

なれる！SE3 失敗しない？提案活動

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-870181-5

とある企業から出入り禁止処分を喰らった社長に代わり、工兵が営業をすることに。しかも数千万規模の案件で競合は超大手企業ばかり。はたして勝算はあるのか!?

な-12-8 2069

なれる！SE4 誰でもできる？プロジェクト管理

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-870528-8

とある出版社の本社移転のプロジェクトマネージャーを無茶振りされた工兵。迫る期限、こねるベンダー各社を前に、未経験のPM業務を完遂できるのか!?

な-12-9 2129

なれる！SE5 ステップ・バイ・ステップ？カスタマーエンジニア

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-870809-8

「あんた西日本と東日本どっちが好き？」立華のその一言が過酷な出張への一里塚。各地を転々とした後、立華とともに辿り着いたのは——なぜか工兵の実家で!?

な-12-10 2187

なれる！SE6 楽々実践？サイドビジネス

夏海公司
イラスト／ixy

ISBN978-4-04-886350-6

「桜坂君さ……バイトしてみない？」大学時代、同期だった娘からの禁断の副業への誘いが泥沼への第一歩で!? その他、バラエティに富んだ中短編5編収録！

な-12-11 2283

好評発売中! イラストで魅せるバカ(バッカーノ)騒ぎ!

エナミカツミ画集
『バッカーノ!』

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ　定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!

注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!
『バッカーノ!』シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA
『ヴぁんぷ!』をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS
ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
『チェスワフぼうやと(ビルの)森の仲間達』
豪華描きおろしで贈る『バッカーノ!』のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

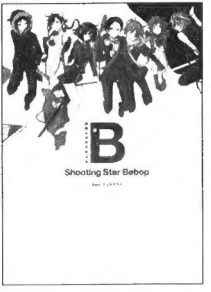
画集

ヤスダスズヒト待望の初画集登場!!

イラストで綴る歪んだ愛の物語――。

ヤスダスズヒト画集

シューティングスター・ビバップ
Side:デュラララ!!



content

■『デュラララ!!』

大好評のシリーズを飾った美麗イラストを一挙掲載!!　歪んだ愛の物語を切り取った、至高のフォトグラフィー!!

■『越佐大橋シリーズ&世界の中心、針山さん』

同じく人気シリーズのイラストを紹介!!　戦う犬の物語&ちょっと不思議な世界のメモリアル。

■『Others』

「鬼神新選」などの電撃文庫イラストをはじめ、幻のコラムエッセイや海賊本、さらにアニメ・雑誌など各媒体にて掲載した、選りすぐりのイラストを掲載!!

著/ヤスダスズヒト　定価:2,415円(税込)　A4版/128ページ
※定価は税込(5%)です。

画集

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス